

Design Works '25/'26



Department of Architecture
Setsunan University



2025 年度 摂南大学理工学部
建築学科 作品集

創設 50 周年を迎えて

皆様には、平素より摂南大学理工学部建築学科の設計教育にご支援ご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

摂南大学理工学部建築学科では、計画・環境系と構造・生産系の 2 つの教育系統を軸に、社会における実践的課題に対処していく力を培うために、多彩な角度から建築に関わる知識と技術を習得し、感性をみがくことを目指した教育・研究活動に励んでおります。

特に、設計演習や卒業設計では、実社会における建築への要求やその社会的役割を踏まえて、多数の現役建築家を講師に迎え、1 年次から 4 年次まで多様な課題のもと、学生と一緒に開かれた議論を行っております。また、先端の情報を共有する授業環境づくりにも努め、情報系科目と連動したデジタルと手描きの双方向による設計教育も進めております。4 年生は、学部での学びを応用した集大成として、卒業論文、卒業設計に取り組み、12 月には「卒業研究発表審査会」を、1 月には「第 19 回卒業研究作品展」を滞りなく終えることができました。作品展では、展覧会用にさらに磨きをかけて質の向上を目指した卒業研究成果が展覧され、論文・設計の各講評会では学外の建築家、実務家、研究者をお招きして熱のこもった議論が交わされました。卒業設計では、模型が大きくなり、優秀な作品が多数となりました。ご支援をいただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

今年度、建築学科は創設から 50 年という節目を迎えました。1975 年に 94 名が入学してから 50 年間で総勢 4599 名が建築学科を卒業しました。節目を迎えたことを記念し、11 月には卒業生ならびにそのご家族に 8 号館や寝屋川キャンパスまでお越しいただき「ホームカミングデイ」と題したイベントを実施しました。また、建築学科の略年表と教員一覧を編集いたしました（本作品集の巻末に掲載）。

本作品集は 2025 年度における学生の作品から優秀作品を選抜し、当学科における設計教育全体の取り組みをご紹介しますのでございます。

学科一同、学生・教員がともに成長する教育環境を目指してこれからも努力してまいります。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

2026 年 3 月

摂南大学 理工学部 建築学科長

宮本 征一

4年生作品 【卒業設計】

p.4 ~ 15

概要	4
欲動ヲ獲得セヨ。	樽井智哉 5
まちとり物語 重要伝統的建造物群保存地区に溢れ出す「ぼく・わたしのひみつきち」	吉村尚生 6
「地域に寄り添う建築」 道としての記憶と未来	西口千尋 7
ひろわれた日常	土井萌愛 8
でんしゃなき島のせんろみち	中郷陽咲 9
使わない時間のデザイン 雨が暮らす住宅群	矢口恵斗 10
緑のつながり 桂離宮から読み替える現代のまち	國澤晃一 11
共助と共生 暮らしの可視化と窓の共有化	松浦菜奈 12
斜面に寄り添うランドフォーム建築 ワインと自然が交わる場の提案	田川泰地 13
あわいの建築 新しい市街地再開発の提案	宮下巧 14
連続する帯 境界をゆるめる高架下の居場所	佐藤帆純 15

3年生作品 【建築設計演習 B】

p.16 ~ 21

課題概要	16	
歴史とともに包み込む ～人に寄り添い広げる地域拠点～	内田章太郎 17	
飛来が編む都市の緑と蜂舎 ～ポリネーションを促し、人が入り込む層状蜂建築～	山本龍之介 17	
帰る、その手前。 ～帰路に介入する行為の建築～	梅原聖大 18	
課題 CHARIWAY ～自転車の動員と再動員～	市川凜平 18	
世界を編み直す建築	アーカイブス コンテキストを読み解き、コミュニティの場を形成する	木場俊輔 19
境界からひらく可能性	はちまん湯煙物語	森田楓人 19
MUSIC ROAD ～音楽が紡ぐ再びにぎわう街道～	後藤桜希 20	
憩いの再生	高橋桜子 20	
路地を長くする建築 ～この街には既に居場所がある～	佐藤直哉 21	
呼応する竹	立花遥香 21	

3年生作品 【建築設計演習 A】

p.22 ~ 27

課題概要	22	
しがらみの間合い	木場俊輔 23	
連鎖 居場所とのつながりを再構築	立花遥香 23	
課題 いきどまりのない学校	岡本万生 24	
体験を巡る	佐藤直哉 24	
学校の再構築	DELTA	山本龍之介 25
思考の学び舎 読む 動く 疑う 遊ぶ 気づく 学ぶ	森田楓人 25	
はみだして、なじむ。	山本和香奈 26	
学びの起こり ～原体験が生み出す新たな形様～	梅原聖大 26	
凹凸 ～小学校の再構築～	内田章太郎 27	
Bubble school	藤井晴樹 27	

2年生作品 【建築設計製図 B】

p.28 ~ 36

課題概要	28	
第2課題	五段テラス美術館	中田隼登 29
まちの美術館	Built Through	伊藤真衣 29
吹き抜けのある	The Open-Ended Museum ー非完結な美術館ー	久保心音 30
市民のためのアートパーク	DAILY ART	阪野妃菜 30
	CLASSICA クラシカ	土田花野子 31
	水景にひらく	中村綾乃 31
	波に入る	波江七海 32
	The Following Sequence ー流動する繋がりー	森行珠紀 32
	Library of Gentle Loops	伊藤真衣 33
	LOOP	呉世根 33
第1課題	Layer Shift	川端晃生 34
ピロティとテラスのある	COMMUNITY LAYERS	久保心音 34
コミュニティ・ライブラリー	まちのリビング	中村綾乃 35
	Block Book ～まちに開く読書テラス～	波江七海 35
	つながるライブラリー ～ピロティとテラスのあるコミュニティ・ライブラリー～	根本樹 36
	内に開かれた箱 光と通りが貫く、秩序の中の開放	野村優奈 36

2年生作品 【建築設計製図 A】

p.37 ~ 45

	課題概要	37
第2課題 SU Visitor Center ～通り抜けできるキャンパス～	LINK	中村和希 38
	円縁 ーえんえんー	波江七海 38
	学びの遊び場	中村綾乃 39
	斜めに架かる緑がのぼる屋根	伊藤真衣 39
	Weave	久保心音 40
	まちとまなびの交点	中田隼登 40
	ヒカリの階段	土田花野子 41
	たまりばの巣	阪野妃菜 41
第1課題 中之島公園を臨む ワークプレイス	PATH WORK → PATH「道」「通路」+WORK「仕事」「働くこと」	久保心音 42
	チーズハウス	山下千穂 42
	Veil & Core	伊藤真衣 43
	見上げ、登る	飯室遥斗 43
	REN-SO works	中村和希 44
	余白と共に	呉世根 44
	流域のアトリエ	野村優奈 45
	フラクタル アーチ	成瀬孝直 45

1年生作品 【建築基礎演習 B】

p.46 ~ 54

	課題概要	46	
第2課題 「蔵のある暮らし」を デザインする 狭小敷地に蔵とともに棲む	蔵と居のあいだ	出田陽心 47	
	蔵とつながる内外のあいだ	岸田稜一郎 47	
	ズレの箱	小林慎昊 48	
	ぼつんと蔵 CAFE ～蔵と共に生きる狭小住宅～	篠崎拓真 48	
	家族空間を核とする住居	平井心楚 49	
	光と住む家	正延葉月 49	
	紡ぐ	丸井悠斗 50	
	流れ	山田稀琉 50	
	第1課題 キャンパス内の レストスペース	X3 TIMES THREE	池上ゆず 51
		風を視る建築	杉村優斗 51
木漏れ日と心地よい風		原田詩月 52	
非日常と邂逅		松井一真 52	
木に集う人々 ～休憩を求めて～		松枝尚希 53	
自然と集まる空間		松村直道 53	
時を過ごす場所		南柗一朗 54	
ひかりの環		武藤歩乃 54	

1年生作品 【建築基礎演習 A】

p.55 ~ 58

	課題概要	55
第3課題 「大学構内に設けられる 外部展示空間（パビリオン）」	繋がる	植芝咲斗 56
	陽だまり	武藤歩乃 56
	空中回路	中村美咲 56
	つなぐ	佐藤燈 56
	包まれる建築	松村直道 56
	滴る森	原田詩月 56
第2課題 「中心のある家」の模型		岩間庵莉 57
		山田秀真 57
		武藤歩乃 57
		小林慎昊 57
		野間隼人 57
第1課題 「中心のある家」のトレース		池上ゆず 58
		波多野朱鞠 58
		武藤歩乃 58

その他の活動

p.59 ~ 66

ゼミ活動	59 ~ 60
50年のあゆみ	61 ~ 63
■ 2025年度 卒業研究題目一覧	64・65
■ 2025年度 設計演習一覧	66
■ 2025年度 摂南大学 建築学科スタッフ	66

4

年生通年

| 担当教員 |

計画系

伊熊昌治

大谷由紀子

加嶋章博

小林健治

白須寛規

環境系

宮本征一

構造系

池内淳子

奥田泰雄

柳沢学

| STAFF |

Shoji IKUMA

Yukiko OTANI

Akihiro KASHIMA

Kenji KOBAYASHI

Hironori SHIRASU

Seiichi MIYAMOTO

Junko IKEUCHI

Yasuo OKUDA

Manabu YANAGISAWA

概要 教員の指導のもと、各々が定めた課題・テーマに対して、学部4年間の集大成として卒業研究（卒業設計あるいは卒業論文）に取り組む。2025年度は中間発表会（9月24日）および発表審査会（12月24日・26日）、卒業研究作品展（1月31日-2月2日）を実施した。卒業研究作品展では、卒業設計5名、卒業論文4名のゲスト審査員をお招きし、ポスターセッションと講評会を実施した。

卒業研究作品展ゲスト審査員

卒業設計部門

河崎敦子（竹中大工道具館）

高木章寛（高木章寛建築設計事務所）

岸下真理（Atelier KISHISHITA）

小野龍人（T2P アーキテクト）

新森雄大（NIIMORI JAMISON）

卒業論文部門

西村勝尚（元摂南大学教授）

土川忠浩（兵庫県立大学）

西嶋一欽（京都大学防災研究所）

所 千夏（アトリエCK）



欲動ヲ獲得セヨ。
樽井 智哉

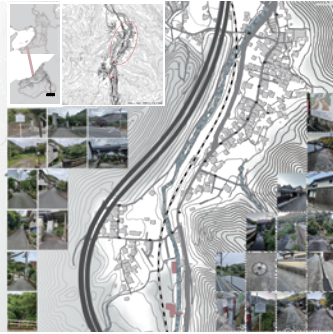
本研究は、私含む人間の根源的欲求を「残す」と定義し、建築を媒体として空間化する試みである。形態や思想が無意識に継承される「模襲」を「残す」欲求の表れとして設計により構造化する。本計画は、阪南市山中溪を敷地に、「残す」という欲求を受け止める器としての〈継承〉を軸に据えた塔状建築を提案する。さらに、「死」を概念化し、恐れる対象として空間化することで、「残す」への衝動を喚起「残す」欲を介し、個と社会の関係を更新する建築の可能性を探る。

人の根源的欲求を「残す」と定義し、「模襲」によって継承される形態を独特の手つきで記号化している。山中溪の峡谷に潜在的にある「死への畏怖」に永続性を見いだし、それを礎に継承の衝動を喚起する建築を提案した。保存や活性化という明るい未来とは違い、再解釈や共有へと導く仕掛けで、空間に対する信頼に正面から向き合っていた。答えのない自問のような建築に最後まで挑戦し続け、迫力のある建築へと昇華された。白須 寛規

：大阪府阪南市山中溪

特徴と歴史

- 山中溪は大阪府阪南市南端に位置し、山と渓流に囲まれた自然豊かな地域である
- 江戸時代には紀州街道の宿場町・山中宿として栄え、交通の要衝であった
- 旧住居屋敷や石畳、寺院などが現存し、地域の歴史的記憶を伝えている
- 近代には「大阪の奥座敷」として知られ、温泉地として発展した。1931年に温泉旅館「ほととぎす」が開業し、空間演出を伴う建築的試みがなされた
- ほととぎす旅館を契機に温泉施設が連なり、一時的に温泉街として賑わった
- 宿場町としても20件以上の旅館が存在し、温泉まつる伝承も残る
- 地形的制約や交通網の変化、災害、環境被害、用地転用などにより温泉街は衰退した
- 昭和30年代以降、旅館街は解体が進み、現在は往時の賑わいを失っている



継承の課題

- 人的・社会的課題
 - 高齢化と人口減少の進行により、地域コミュニティの担い手が不足している
 - 行事や文化活動を継続する主体が減少し、世代間の断絶が生じている
- 空間・資源の課題
 - 空き家や未利用建物の増加により、地域の景観と機能が低下している
 - 自然景観や歴史的資源が点在する一方で、それらを統合的に継承する場が不足している
- 記憶・思想の課題
 - かつて温泉街を形成した人々の志向や慣れが、現在では明確に共有されていない
 - ほととぎす旅館を起点とした思想の伝播は存在したが、その意味や背景は風化しつつある
- 継承の方法論の課題
 - 文化や記憶を保存するだけでなく、いかに現在の価値観と結び付け再解釈するかが問われている
 - 「残す」欲求を、現代において有効に受け止める新たな媒体が必要とされている

地形の課題



- 山と渓流に囲まれた狭隘な地形により、平地が少なく開発の自由度が低い
- 起伏の激しい地形は、移動や滞在に身体的負担を与え、高齢化社会では障害となりやすい
- 一方で、峡谷状の地形や陰影の深さは、他地域にはない空間的特質と強い記憶性を内包している

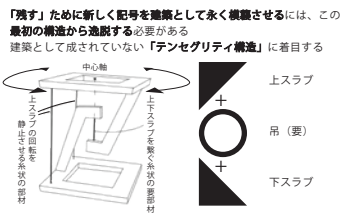
：模襲される建築



記号化する構造

- 建築が模襲されてきた古典建築オーダーには、構造そのものが記号として認識されている
 - 原初の小屋の、柱・梁・屋根という最小構成によって成立した最初の構造であるため概念が定着しやすい
- 古典建築のオーダーは、構造や装飾を通じて明確なアイデンティティを獲得してきた
- 構造を記号化することで、建築は伝達性・記号性・継承性を内包する形式となる

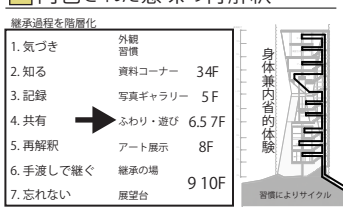
テンセグリティ構造



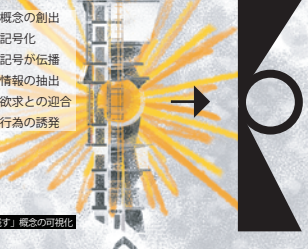
「残す」ための記号への課題

- 記号が反復的に消費されることで、本来内包していた意味が弱体化している
 - 行為や選択の理由が記号によって消失しつつある
 - 記号と欲求・思想の接続が断たれ、行為が習慣として自動化している
 - 衝動は消失せず、理由を失ったまま身体に潜伏している
 - 意味の再解釈が行われないことで、形式のみが継承され続けている
- 社会における存在感や継承力が希薄化している

内包された意味の再解釈



継承の器としての建築

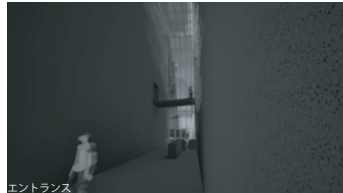


やぐらの継承

- 山中溪のやぐらは、地域の祭礼を象徴する存在として代々受け継がれてきた文化財である
 - 令和元年に代替わりが行われ、現在は三代目のやぐらが祭事の中心を担っている
 - 役目を終えた二代目やぐらは、現在わんぱく王国入口に保管されている(左下写真)
 - 現状では、地域の記憶や歴史的連続性を十分に伝えきれない
 - 単独で置かれた状態では、やぐらの背後にある地域の誇りや文脈が埋没している
- やぐらを単なる展示物ではなく文化継承の象徴として再定義する必要がある

- わんぱく王国から山道を登った約30m上に展望台を設け、「継承の場」として構築した
- この場では、やぐらを保存するだけでなく、眺め、語り、歴史の巡りを体験できる
- やぐらを中心に据えることで、建築が文化を伝える仕掛けとして機能する

：死を恐れる



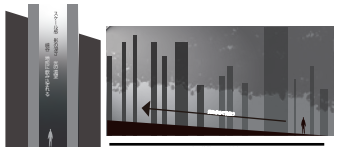
死の認識

- 「残す」という欲求は、生き物が死から逃れようとする本能的衝動に由来する
- 死の認知は、人に何かを残そうとする動機を与える
- 人は死への恐怖から、自然や高次の存在を超越的なものとして捉えてきた
- 折りや祭祀、聖域、建築は、死に抗う形として現れたものである



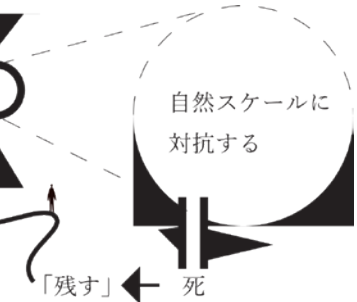
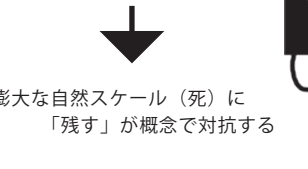
峡谷の建築化

- 狭隘な地形や自然のスケール感、影の存在を物理的に建築化する
 - 速い進む行為を、影の中から光を探る存在状態として捉える
 - 死がもたらす恐怖や無力感を飲み込まれる感覚として空間化する
 - 自然の中で人間の存在の小ささを体験的な建築として可視化する
- 樹幹とそこに差し込む光線を光を切り取るフレームとして建築に投影する
- 自然への畏怖を「死=自然との同化」として解釈する



峡谷美術館の位置づけ

- 相対する概念を並置し、無意識下での結び付きを促す
- 概念同士の関係により認識が再生成され、行為へと誘発する
- 概念化された「死」は記憶に堆積し、風景として残り続ける状態を生み出す





まちとり物語 ~重要伝統的建造物群保存地区に溢れ出す「ぼく・わたしのひみつきち」~
吉村 尚生

とある街の道には、観光地エリアと住宅地エリアという二つの性質の道が存在する。観光地エリアは観光客で賑わう一方、住宅地エリアでは住民があまり出歩いていない。この状況は、観光地整備を優先してきた結果、住民の暮らしや居場所が街から排除された表れではないかと考えた。そこで本研究では、児童館に見られる年齢ごとに遊べる場所や年齢に関係なく関わられる場所の構成を街へと広げることが目的とする。設計手法として遊環構造を取り込み、住宅地エリアの道に居場所を点在させ、道を移動の場から滞在と関係が生まれる場へ変えていく。

1. 神戸市北野町の問題

住宅環境保全ゾーン（住宅地エリア）の道には、歩いていても楽しさを感じにくく、人と人との交流が生まれにくい、単なる通過のための道となっている場所が多い。一方で、住宅・商業共存ゾーン（観光地エリア）では、景観に関する規制のもと、歩道の整備やベンチ、イルミネーションなどが設けられ、歩くだけでもさまざまな変化を感じられる魅力的な道が形成されている。これは、異人館街という観光地の整備・保存が優先され、街が年々華やかになってきたことを示している。その一方で、住民の暮らしや居場所は観光地の裏側へと追いやり、街の中から見えにくくなってきたとも言えるのではないだろうか。重伝建地区の中にあっても、住民の生活は排除されるべきではない。そこで本研究では、住宅環境保全ゾーン（住宅地エリア）の道に居場所を点在させることで、住民の暮らしを街の中に段階的にじみ出させ、失われつつある生活の風景をもう一度「舞台前」へと取り戻すことを目指す。道を単なる移動の空間から、滞在や関係が生まれる場へと再構築していく必要があると考えた。



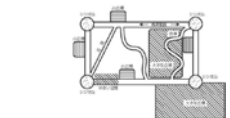
2. 児童館の特性

児童館とは、児童館ガイドラインより「18歳未満の全ての子どもを対象とし、地域における遊び及び生活の援助と子育て支援を行い、こどもの心身を育成し、情操を豊かにすることを目的とする施設」であると明記されている。また、二つの特性を持つ施設である。しかし、実際には「居場所」としての目的が強いと感じている。さらに、18歳未満と明記されているが、イベントごとで訪れる大人や高齢者にとっても居場所となる施設である。

■二つの特性

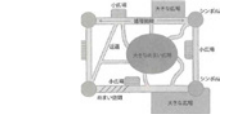
施設特性	機能特性
① 相談したり助けももらえる → 住民同士で助け合い	① 拠点性 地域におけるこどものための拠点。自らの意思で利用でき、自由に遊ぶくつろぎ、年齢の異なる子どもが一緒に過ごせる。
② 自らの意思でひとりでも利用できる	② 多機能性 児童館は、こどもが自由に時間を過ごし遊ぶ中で、こどものあらゆる課題に直接関わるができる。
③ 年齢の異なる子どもが活動を共にできる → 年齢の異なる住民同士で交流	③ 地域性 地域の人々に見守られた安心・安全な環境のもとで成長していくことができ、こどもの発達に応じて地域全体に活動を広げていくことができる。
④ 出合いの場になる	
⑤ こどもが遊ぶことができる → くつろぐ、話す等の行為も生まれる	
⑥ 安心してくつろぐことができる	

3. 遊環構造 仙田満さんが提唱したもので、あそびやすい遊具の構造として生まれた。



1984年モデル

画像参照 <http://bon47.blog14.fc2.com/blog-entry-26.html>



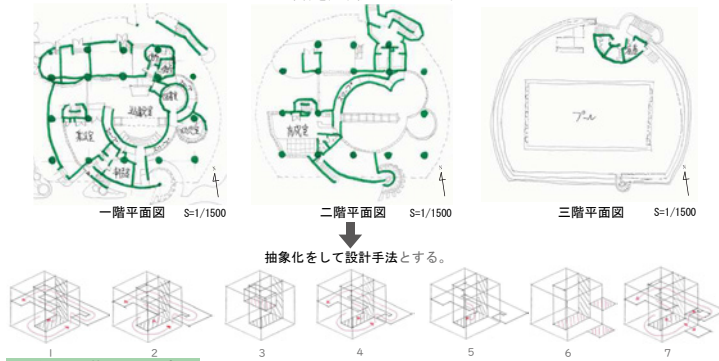
2013年モデル

画像参照 「遊環構造デザイン ~円い空間が未来をひらく~」 建築空間として開放的である。循環が強制的ではなく、途中で出入りすることが自由である。

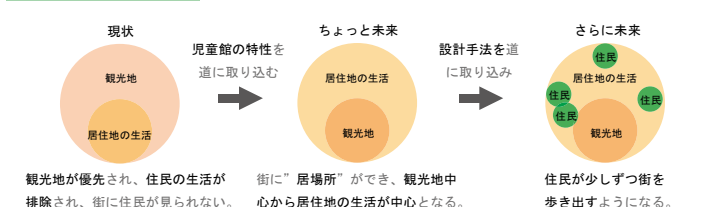
■「7つの条件」

- ① 循環機能があること。
→ 回遊の繰り返しで、遊びのおもしろさを高めている。
- ② その循環（道）が安全に変化に富んでいること。
→ こどもたちが思う存分、意欲のおもむくままに遊ぶための条件。
- ③ その中にシンボル性の高い空間、場があること。
→ 塔の、舞台の、穴的なものが、遊びの流れに変化をもたらす。
- ④ その循環に「めまい」を体験できる部分があること。
「めまい」とは、身を投げ出すことや、滑走などによって、身体をさまざまに翻弄される運動のこと。
- ⑤ 近道（ショートサーキット）ができること。
→ 幾通りもの経路の選択を可能にし、循環機能、回遊性を高める。
- ⑥ 循環に広場、小さな広場などが取り付けられていること。
→ 動きと休みをバランスよく配置することで、楽しさが生まれる。
- ⑦ 全体がボーラスな空間で構成されていること。

七つの条件を建築物に当てはめる。



4. 住民の暮らしの変化

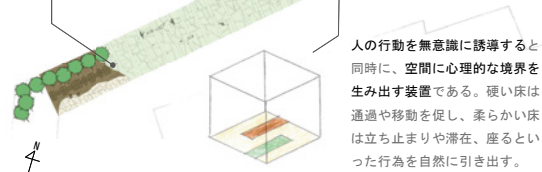


研究段階で論文を読み漁り、子どもの遊び場に対する解像度を可能な限り高めた姿勢がまず強い。その知見を一つの大きな施設に集約するのではなく、あえて住宅地に溶かしまわような選択をとることによって、建築そのものを問い直す提案へ踏み込んだ。図面は最終提出まで手書きを貫き、自身のスケール感を信じて新しい空間を探り続けた態度は賞賛に値する。この期間に蓄えた知識と挑戦は、仕事でより高い次元へと昇華されるだろう。

5. 提案

■敷地1(高齢者の居場所)

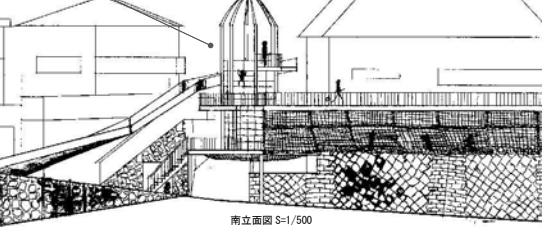
空間は人の行為を自然に切り替える装置となる。狭い部分では立ち止まらずに通過する動きが促され、幅が広がる部分では歩みが緩み、腰掛ける・話すといった滞在の行為が生まれる。あわせて、空間の幅は人と人の距離感を調整する役割も担う。狭い場では一人での利用やすれ違いが中心となり、広い場では複数人が並んだり向かい合った関係性が許容され、状況に応じた関わり方が自然に選択される空間となる。



■敷地2(小学生の居場所)

① こどもの身体から見た意味
こどもにとって、のぼる・おりる・立ち止まるといった上下移動は、それ自体があそびである。高さの違いによって視界や音の感じ方が変わり、こどもは街を多様な視点から発見していく。

② 都市・道との関係
塔状の建築は、街路の中で目印となり、人が立ち止まるきっかけをつくる存在である。平面を大きく占有せず、居場所を上方向に積層することで、道としての連続性を保ちながらあそびの場を挿入できる。



■敷地3(大人の居場所)

階をまたぐ循環
気分や状況に応じて居方を選ぶ環境となる。上り下りの中で視点や距離感が変化し、座る・歩く・眺めるといった行為が連続的に生まれることで、固定された使い方に縛られない居場所となる。また、循環によって異なる階の空気が緩やかにつながる、干渉しすぎない関係が保たれる。

空中にある空間
地上とは異なる高さ以身を置くことで、視線や音、周囲との関係が変化し、落ち着いて過ごしたり、ひとりになることが許される。完全に閉じるのではなく、上下の気配を感じられることで、孤立せずに滞在できる点も重要である。

分散型広場
複数の居場所を散りばめることで、多様な居方を許容し、にぎやかに過ごす、静かに滞在する、通過の途中で立ち止まる場が生まれ、使い方が固定されにくくなる。また、広場同士が緩やかにつながることで、人の流れにリズムが生まれ、街全体が一つの大きな居場所として機能する。

■敷地4(全世代の居場所)

地上にのびのびと視線から距離を取ることで、落ち着いて過ごす人と活動的に過ごす人が共存できる。そこに小・中・大の広場を段階的に配置することで、ひとりで過ごす居方から集団での滞在までを連続的に受け止める、多様な関わり方を選ぶ環境となる。地下は、世代を越えた居場所を包み込む基盤として機能する。

小・中・大の広場
声や視線が緩やかにつながる一方で、身体的には一定の距離を保つことを可能にする。この関係性により、積極的に関わる人と、見守る立場の人が無理なく共存でき、特に大人や高齢者にとっては安心して居続けられる居場所となる。段々型構成は、行為を強制することなく、参加の度合いを自ら選択できる空間構成として、全世代が同じ地下空間を共有するための基盤をつくっている。

段々型

「地域に寄り添う建築」- 道としての記憶と未来 -

西口千尋

本計画では瓢箪山駅周辺の敷地にまたがる近鉄奈良線と地域の歴史を反映させた博物館を提案する。歴史的背景と都市の断片を再解釈し、現在の暮らしに結び付けることを目的とする。老朽化を理由に閉館した郷土資料館や文化埋蔵センターのように、時間の流れの中で地域の記憶や文化を伝える場所は減少している。そこで、地域に残る条里制の痕跡を建築設計に取り入れ、道・電車・博物館が重なり合う構成とし、移動・生活・文化が連続する公共空間を形成することで、地域の生活と文化が混ざる場所を提案する。

近鉄奈良線瓢箪山駅、老朽化し閉館した資料館等にかわり地域の条里制の痕跡を基本モジュールとし、ダブルグリッドのフレームを取り入れ、地域の記憶や文化を伝える場を創出している。かつての条里制が鉄道という土木的スケールで分断された痕跡を「遮る壁」から「関係を生む装置」として大壁を設け可視化した。生駒山に連なる微地形を活かし、展示スペースを座る、眺める、立ち止まる場所のある回遊通路とし日常性を生み出している。

伊熊 昌治

研究背景

卒業設計に取り組むにあたり、自身の地元である近鉄瓢箪山駅周辺を対象とした建築を計画した。地域の歴史を伝えてきた①郷土資料館や②文化埋蔵センターが老朽化などを理由に閉館し、地域の記憶が日常生活から切り離れつつある現状に問題意識を持った。東大阪市には条里制をはじめとする都市の痕跡が現在も残されているが、それらは暮らしの中で見過ごされ、十分に共有されていない。そこで本計画では、建築を通して地域の歴史を可視化し、現在の暮らしと結び直すことを設計の出発点とする。



①東大阪市文化埋蔵センター



②郷土資料館

東大阪市にある①東大阪市文化埋蔵センターと②郷土資料館である。どちらも令和5年3月末に老朽化、耐震性能の不足を理由に閉館している。
①<https://www.city.higashiosaka.lg.jp/0000003611>、②<https://www.city.higashiosaka.lg.jp/0000003607> から引用

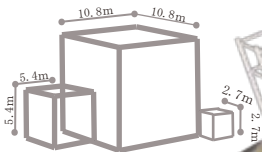
提案

条里制、鉄道、坂という異なるレイヤーを建築に取り込み、展示として保存されてきた地域の歴史を日常の移動や滞在の中で体験できる空間を作ることを提案する。

秩序をつくるモジュール

池島町の条里遺構

東大阪市池島町周辺には条里制の遺構が比較的明瞭に残されており、③の地図には瓢箪山町周辺にも同様の痕跡が記されている。しかし瓢箪山町では坂地形や鉄道の影響により連続性が失われ、条里制は断片的に残るのみとなっている。池島条里遺構の辺り約108mをもとに人スケールへと落とし込み10.8m以下の基本モジュールとして建築全体に反映させた。



敷地を掛ける大屋根

大屋根は、条里制の構造を建築に取り込む装置として計画した。10.8メートルを基準とした屋根構成により過去の都市秩序を現在の活動空間へと読み替え、近鉄奈良線によって分断された敷地を一体化する。グリッドフレームの大屋根の下では異なる目的をもった人々の居場所が同時に生まれ、建築の内外が連続することで、敷地全体が歴史と現在をつなぐ公共空間として機能する。

計画敷地 / 大阪府東大阪市瓢箪山町周辺



Google earth から引用

特徴

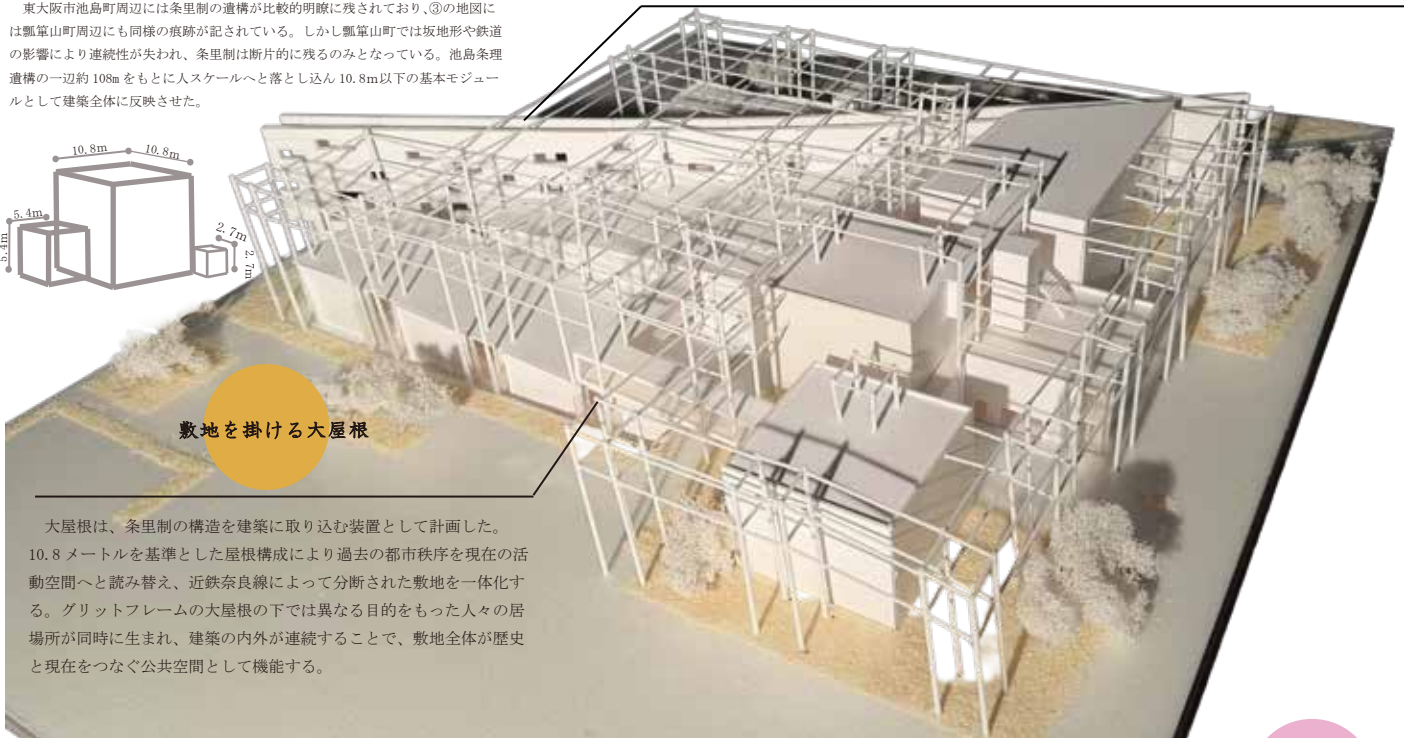
- ・条里制の痕跡が崩れながら残る都市構造
- ・生駒山へとつづく坂地形
- ・近鉄奈良線という現代の鉄道インフラ

3つの要素が重なり合う地点に位置している。異なる時代の構造が同時に現れていることにこの場所の大きな特徴がある。

分断する壁
レイヤー・間に建つ大壁・隙間

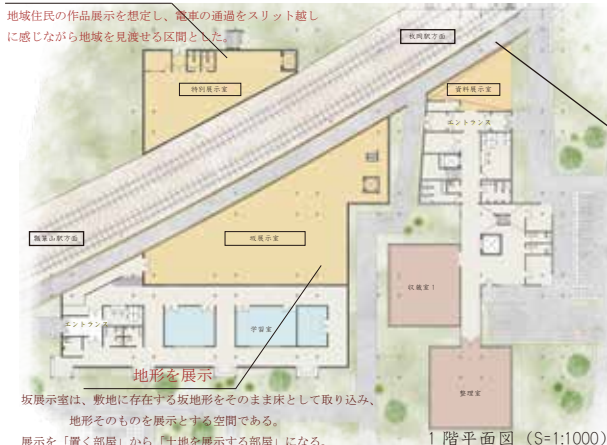


大壁は「遮る壁」ではなく、「関係を生む装置」として機能する。スリットや開口を設け、展示や人の活動が街から垣間見える構成としている。展示室の一部は壁と接続し、内部の様子が外部へにじみ出ること、歴史が建築の中に閉じこもるのではなく、街の日常の風景の一部となることを意図している。視線や動線、音や気配が交差することで、中間領域を生み出している。そして近鉄線によって分断された敷地の「間」に建ち、展示・道・鉄道といった異なる要素を重ねて可視化する建築である。



地域と鉄道を取り込む

地域住民の作品展示を想定し、電車の通過をスリット越しに感じながら地域を見渡せる区間とした。



坂展示室は、敷地に存在する坂地形をそのまま床として取り込み、地形そのものを展示とする空間である。展示を「置く部屋」から「土地を展示する部屋」になる。

1階平面図 (S=1:1000)

歴史を伝える博物館

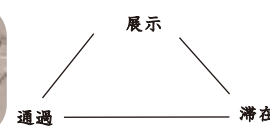
敷地と地域をつなぐ空間構成

展示を見る場所

回遊通路や大壁沿いに座る・眺める・立ち止まる場を点在させ、人の動きが重なり合うことで、建築を地域の日常を受け止める居場所としている。



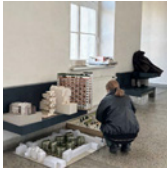
まちをつなぐ通路



居場所としての建築

地域に寄り添う建築、道としての建築

本計画における「寄り添う」とは、地域の地形や鉄道、歴史を変えずに引き受け、日常の行為と重ねながら人のスケールで空間として翻訳することである。強く主張するのではなく、すでにある風景や生活の中に入り込む建築として、地域に寄り添うことを目指した。



ひろわれた日常 土井萌愛

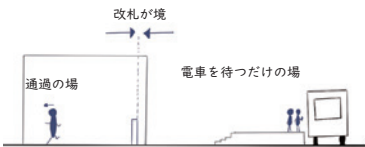
本研究は、無人駅という特性を活かした建築による地域資源の可視化を目的とする。地域には海や農業、祭りなど多様な資源が存在する一方、日常の中で見過ごされ、共有されていない現状がある。改札を持たず誰もが自由に入りにできる無人駅を通過点ではなく滞在・交流の場とし、展示や体験、日常的な利用を通して地域資源に触れる機会をつくる。住民同士あるいは住民と来訪者が資源を共有し誇りや学びを得られる機会を創り出すことで、次世代への知識・技術の継承や地域課題の発見・解決のきっかけを生み、地域の魅力と活力を高めることを目指す。

改札を持たない無人駅という開放性に着目し、通過点にとどまっていた駅を地域資源を共有する拠点へ再編した提案である。海や農業、祭礼など土地の履歴を資源として捉え、それらを展示・直売・体験の場へ建築的に翻訳している。また、線路で分断されていた高低差を橋と一体化した動線計画で接続し、駅を地域の結節点として再編している。無人駅の公共性を再考し、地域に根差した新たなコモンスの可能性を具体的に提示した計画である。
加嶋 章博

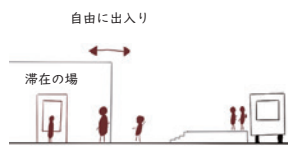
研究背景

ゼミⅢの授業において、寝屋川市の水路や段蔵といった地域資源に着目し地域資源の見える化に関する検討を行った。日常生活の中では意識されにくい各地域には固有の魅力や資源が存在しており、それらをかきこみ効果的に伝えるかが課題であると感じた。当時はシートや動画を用いて可視化を試みたが、大学で学んできた建築という手段によっても地域資源の見える化が可能ではないかと考えるようになった。ここでいう地域資源とは、自然・文化・産業・人々の営みなど、その土地の価値や魅力を形づくるあらゆる要素を指す。こうした背景のもと、地域資源を日常的に意識できる場として無人駅に着目した。無人駅は改札を持たず、利用目的に関わらず誰もが自由に入りにできる、境界のない公共空間である。この特性を活かしつつ、地域の人々の日常や資源を自然に可視化する場の提案が可能であると考え、本研究に至った。

<従来の駅>



<提案する駅>

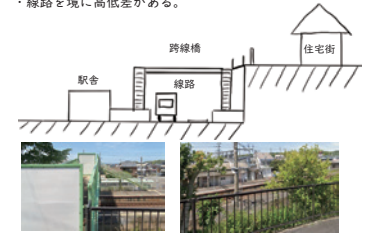


計画敷地 / 和歌山県田辺市芳養町 JR 芳養駅周辺



<特徴>

- ・現在の駅は無人駅であり改札がないため誰でも自由に入出入りすることができる。
- ・周囲には漁港や田畑、住宅街が広がる。
- ・獅子舞やお神輿などの伝統行事があり地域住民同士の結びつきが強い。
- ・線路を境に高低差がある。



計画概要

1. 地域資源の見える化

和歌山県田辺市芳養町にもたくさんの地域資源がある。地域資源としては梅やみかんなどの農作物、お神輿や獅子舞といった地域で受け継がれてきている伝統行事、漁業や林業とその地域資源の周辺の風景や暮らしが挙げられる。それらの資源を建築によってどのように見える化するかを考える。



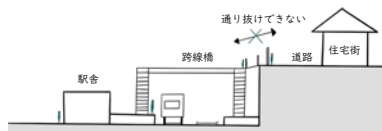
例えば、この敷地の近くには海があり、その海では漁業が行われている。この地域の風景は海があり、漁業が行われてきたためできた風景であり、その風景こそがこの地域の資源の1つであると言える。建物自体からも地域らしさを感じられるようにしたかったため、海の波をモチーフとしたこの形とした。



また、この周辺の地域では林業が行われており、良質な豊富な木材資源を有していることも地域資源として挙げられる。それらを目で見たり香りを感じることで地域らしさを感じることができるようにするため和歌山県で育てられた木を用いて建物を木造とする。

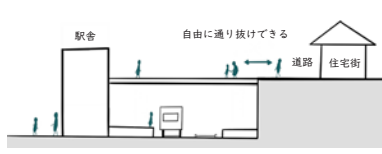
2. 高台と低地を繋ぐ駅

<現在>



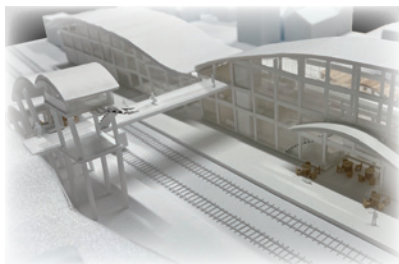
- ・駅周辺は線路を境に高低差がある。普段は通り抜けず大回りをしなければならない。
- ・跨線橋は階段のみである。高齢者が多い地域で足が悪い人も多くいると考えられるため、跨線橋を通らないと向かいのホームに行けないのは駅の利用者が増えない理由の一つではないかと感じた。

<提案>

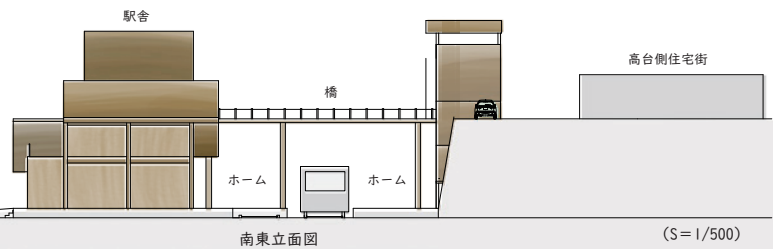


- ・駅舎側から高台にある住宅街側までスロープでつながっているため気軽に行き来することができるようになる。
- ・駅が無人駅で改札がないという特徴を持つため向かいのホームへ移動する跨線橋の役割と高台の住宅街側へ向かう道の役割を1つのもので担うことができる。

提案



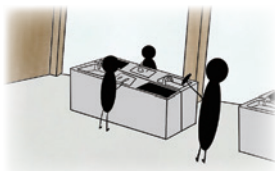
橋は海側の住宅街と高台側を繋ぐ。駅を利用する人も利用しない人も誰でも通ることができる。高台側には小学校がある為通学路としても利用できる。2つのホームを移動する際にも利用する。橋の上からは電車が来る様子を見学することもできる。



南東立面図

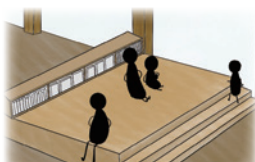
(S=1/500)

シェアキッチン



地域の人同士の交流や地域の人々が持つ技術の継承を行う場。料理教室、加工品づくり、イベントの際にキッチンとして利用する。

図書スペース



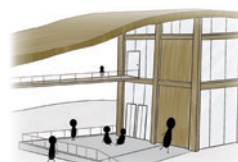
地域に住んでいる人誰もが気軽に利用できる。本は貸出ではなくこの駅内で読むことを想定。

直売所



地元で採れた野菜や果物、加工品を新鮮なまま届ける直売所。生産者が直接持ち寄り、その日のおすそめを並べる。

広場

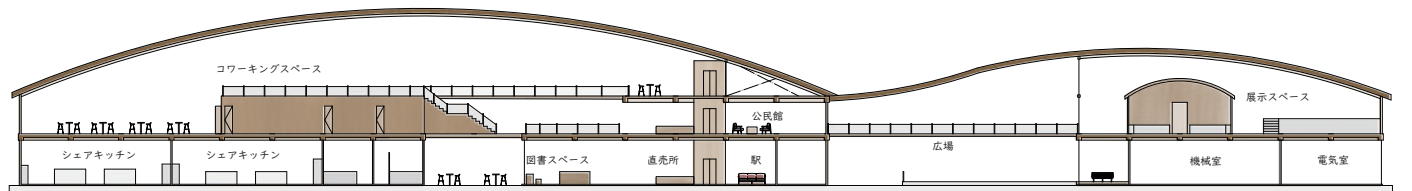


多くの人が通る広場。広く、自由に使える空間となっており、地域のイベントの拠点として利用できる。

展示スペース



地域に関するものを常設展示。必要な時以外倉庫に入られている物を展示して地域のものに触れられるようにする。



断面図

(S=1/500)



でんしゃなき島のせんろみち 中郷 陽咲

本研究では、かつて淡路鉄道が通っていた廃線跡「せんろみち」に注目し、その空間を人々の記憶・文化・日常をつなぐ場として再生することを目的とする。線路跡や駅跡に中継地点を設け、地域資源を体験できる拠点や休憩所を設置。例えば玉ねぎ小屋をモチーフとした空間デザインを施し、自転車などでの回遊を通じてかつての輸送路を現代的に活用する。地域住民が世代を超えて集える場所を「当たり前前の風景」の中に創出することで、淡路島の魅力を再認識し、若者が「また帰ってきたい」と思えるきっかけとなる場づくりを目指す。

淡路鉄道の廃線跡「せんろみち」を、失われたインフラではなく地域資源を読み解く場として再編する提案である。線路は消えたが、築堤や橋台、呼称として残る記憶が土地の連続性を今も支えており、その線的基盤に着目する。玉ねぎ小屋や淡路瓦、人形浄瑠璃、だんじりとといった地域資源を回遊の軸として再構成し、記憶を体験へと展開した。かつての輸送路を交流基盤へと再生し、若者が地域の価値を再認識する契機を建築的に提示した計画である。 加嶋 章博

研究背景

淡路島には現在鉄道は通っていないが、1966年までは洲本と福良を結ぶ淡路鉄道が人と物の移動を支えていた。廃線後は多くが道路として整備され、一部は築堤や橋脚などの形で今も農地や集落に残っている。こうした跡地は「せんろみち、でんしゃみち」として世代を超えて親しまれているが、鉄道の存在そのものを知らない若い世代も多く、地域の記憶として十分に共有されているとは言いがたい。また、淡路島には玉ねぎ小屋や淡路瓦、ため池、人形浄瑠璃など多彩な地域資源が存在するが、日常に溶け込みすぎてその価値に気づかれにくい現状がある。多くの若者が大学進学などを機に島を離れ、そのまま戻らない傾向がある中、地域資源への誇りや愛着が育まれる機会が求められている。

計画敷地 淡路鉄道廃線跡

南あわじ市は、南北に長い地形を有する淡路島の南部に位置し、兵庫県約2.7%を占めている。市の南部および西部は、それぞれ紀伊水道および播磨灘に面し、北部には先山山地、南東部には論鶴羽山、西部には南辺寺山塊が広がっている。また、中央部には三原平野が展開しており、地勢的に平坦な地域を形成している。さらに、紀伊水道には、周囲約10キロメートル、人口約400人を有する沼島が浮かんでいる。

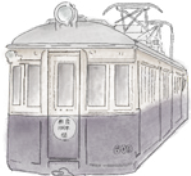


せんろみち

かつて淡路島を走っていた淡路鉄道。その廃線跡は、今も人々に「せんろみち」「でんしゃみち」と呼ばれ、地域に深く根づいている道です。道沿いには、橋台や築堤などの遺構が残り、電車が走っていた記憶を静かに伝えています。一方で電車を知らない子どもたちの中には、「将来電車が通る道」だと信じていた子もいます。電車が消えたあとも、この道は人々の暮らしの中で呼ばれ続け、誇り続けられてきた。「せんろみち」は、地域にとって大切な言葉の資源です。

せんろみちを未来につなぐ

この「駅」は、かつて淡路島を縦断していた淡路鉄道の記憶と、今も残る「せんろみち」「でんしゃみち」にふれる地域の交流拠点である。敷地内には旧・神代駅のホーム遺構が残り、当時の雰囲気を体感できる場となっている。鉄道の歴史や地域の暮らしとの関わりを伝える展示に加え、島内各地に点在する築堤や橋台、「せんろみち」の現在の風景も紹介する。世代によって異なる呼び方も、地域文化の一部として表現する。ただの展示施設ではなく、過去と今、そして未来をつなぐ「橋頭点」になる場とする。



かもり

KAMORI

ながた おのころま

だんじりを身近なものに

この地域では今もだんじり祭りが盛んに行われているが、少子高齢化の影響で担い手が減り、使われなくなっただんじりも少なくない。そこで、祭り以外でもだんじりにふれる常設展示の場を設け、地域の伝統を日常に近づけたい。展示は懐かしさと誇りを呼び起こし、役目を終えただんじりに新たな意味を与える「語り継ぎの場」となる。子どもには学びの場、来訪者には文化の入口、地域には伝統を未来へつなぐ拠点となることを目指す。

すもと

SUMOTO

てらまち



玉ねぎ小屋にかつての劇場を

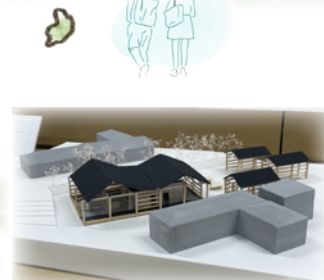
かつてこの地には人形浄瑠璃の劇場があり、駅周辺は芸能と人の往来が交わるにぎわいの場だった。今では田園風景が広がるが、劇場の面影は薄れつつあるが、土地には文化の記憶が残っている。そこで、使われていないたまねぎ小屋を活用し、劇場と展示室として再生する構想を立てる。芸能だけでなく、この土地に息づいてきた歴史や記憶にふれる場とし、人形浄瑠璃を「遠い伝統」ではなく、日常の中にある文化として再び根づかせたい。



じんだい

JINDAI

いちむら かしゅう



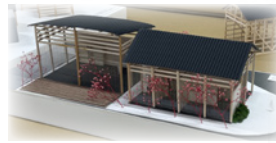
ひろた

HIROTA

おさめ ながた

瓦の可能性をひろげる

この「ひろたえき」は、淡路島を代表する伝統工芸・淡路瓦の魅力や、展示と体験を通して広く発信する場とする。瓦の産地を離れたこの場所だからこそ、ものづくりの背景にある技術、素材、歴史をじっくりと紹介し、地域の文化を改めて見つめ直す拠点。施設では、淡路瓦の成り立ちや製造工程をわかりやすく伝える展示に加え、実際に土にふれて瓦の成形や装飾を体験できるスペースを設ける。観光客だけでなく、地元の子もたらや住民が、楽しみながら伝統にふれる「学びと交流の場」を目指す。駅という機能を活かし、淡路の文化に出会い、ふれ、次へと「文化の中継点」となることが、この施設の役割である。



第19回卒業研究作品展ゲスト講評会（卒業設計部門）奨励賞



使わない時間のデザイン - 雨が暮らす住宅群 -

矢口 遼斗

本計画では、忠岡町に特徴的に分布する袋小路を再解釈し、使わなくなった後も記憶に残り続ける新たな袋小路のあり方を提案する。その手掛かりとして雨に着目した。設計の軸は「中間領域におけるコミュニティの形成」「雨が行動の変化を強いること」の2つである。さらに五感で感じる雨の現象を細分化し、さまざまなスケールで雨に触れることが出来る空間に設計した。

「雨の日に起きたことをなぜかよく覚えている気がする」という、自身のふんわりとした想いからはじまった矢口さんの卒業設計は、「中間領域」「コミュニティ」「袋小路」「集まって住むこと」「空き家」など、卒業設計においてやや使い古された感のあるテーマに対して真っ向から向き合っている。雨の日にだけ起こる出来事や「雨」という現象を手がかりに認知する状況を手帳にリサーチした結果をもとに魅力的な造形群に昇華した提案である。 小林 健治

背景

私は3歳頃まで、現在の自宅とは違う家に住んでいたらしい。しかし、その記憶は一切残っていない。現在住んでいる家で過ごした記憶も、前の自宅のように無かったことにはしたくない。

だから私は、誰も住まなくなった後も記憶の中に存在し続けるような「使われていないこと自体を否定せずに受け止める建築」のあり方を考えたい。その手がかりとして着目したのが雨だ。

計画趣旨

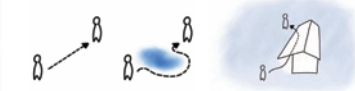
私は雨には記憶を引き止める力があるのではないかと考える。良くも悪くも、雨の日の記憶をなぜかよく覚えている。そんな実感が誰にでも少しはあるのではないだろうか。

なぜ雨の日の記憶は心に残るのか。それは、雨が降る度に、その記憶に触れることになるからではないか。記憶は保存されているだけだと薄れてしまう「思い出す」という行為のきっかけを、無意識のうちに担ってくれているのが雨なのではないか。雨がそこで過ごした記憶や思い出をそっと呼び起こす。そんな存在になれたなら、誰も住まなくなった家もただの“空白”ではなく、豊かな“余白”として捉え直せるのではないかと。そう考え設計した。

設計の軸

1. 雨が行動の変化を強いること

雨の日は、私たちの行動を自然に変える。いつも通る道を選び、屋根のある道を選ぶ。少し遠回りをしてでも水たまりを避ける。このような、日常のささいな行動の変化こそが、記憶として心に刻まれる瞬間だと私は考える。



2. 中間領域におけるコミュニティの形成

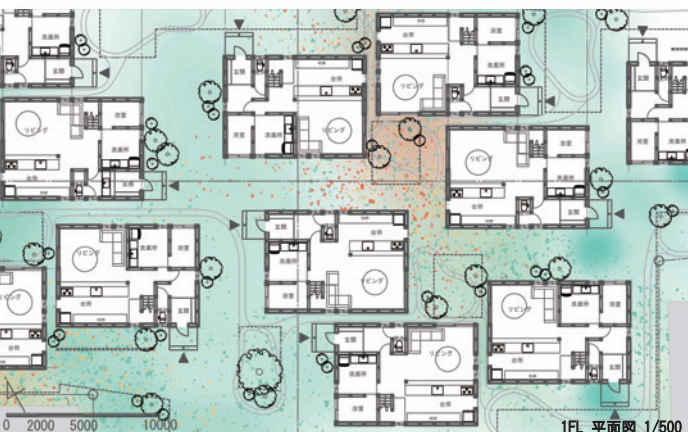
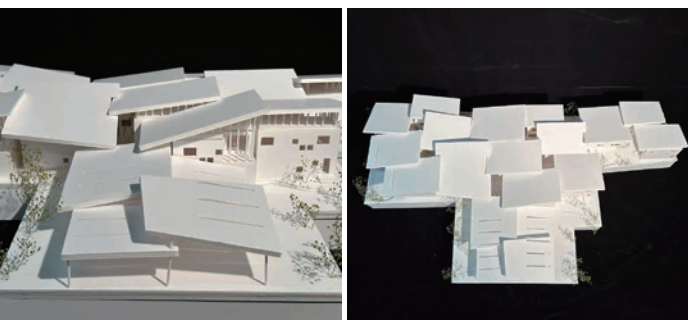
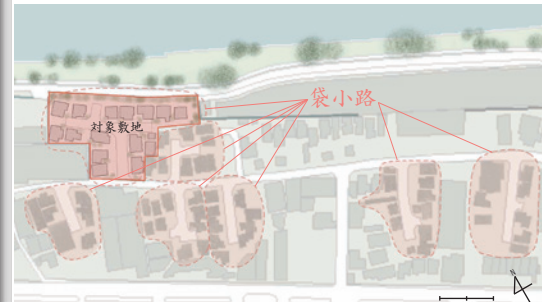
現状の袋小路には中間領域がほとんど見られない本来ならば人の交流が生まれやすいこの空間も、雨の日にはその機能を失う。住民は濡れないよう屋内と車を往復するのみとなり、外部での関わりが極端に減少する。こうした「雨の日の断絶」にこそ、建築的介入の余地があると考えた。



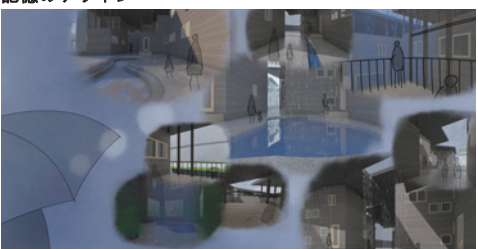
計画敷地

忠岡町の袋小路は意図的な都市デザインではない、だがその偶然の道は、地域コミュニティの基盤になっている。私はこの“偶然に生まれた袋小路”を再解釈し、積極的な意味を持つ空間へと再構築したい。

この地域の課題点は、人口減少により、将来的に人の気配が確実に薄れることである。特に計画敷地が位置する場所は、忠岡町が定める中心拠点区域からも外れている。その事実を無理に変えようとするのではなく“使われない時間”をどう価値に変換できるかを問う。



使わない時間のデザインの意味
記憶のデザイン



“建物を使わなくなった住人”に着目した考え方。雨が降る度に思い出が呼び起される反復を意図的に設計する雨という自然の現象を媒介にして、その場所の体験を住人の記憶に残し続けることを目指している。“使わない時間”においても、その場所が確かに存在し続けるためのデザイン。それが記憶のデザインである。

雨によるデザイン



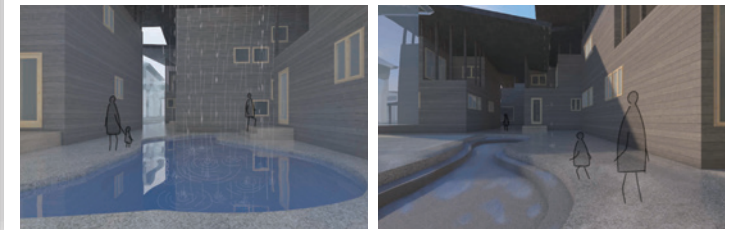
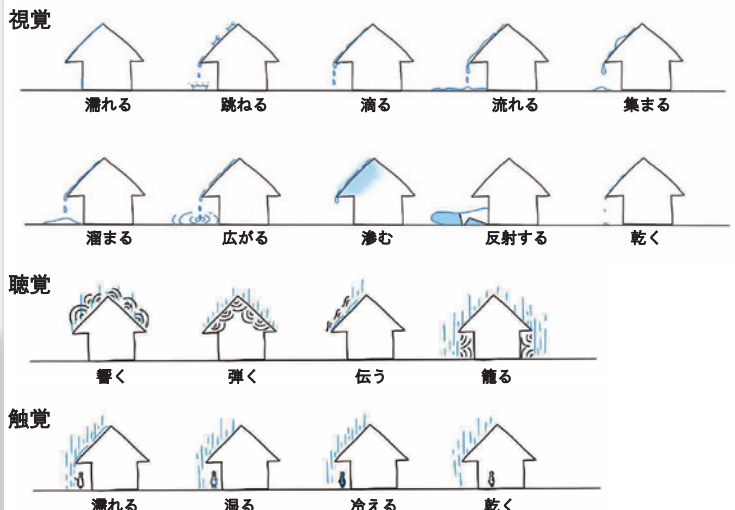
“建物を使っていない時間”に着目した考え方。建物が使われていくかどうかに関係なく、雨が降ればその形を更新していく。土地そのものが雨によって描かれていくような状態を生み出す。人の操作が加わらない時間にも雨が場所を変化させ、敷地の表情を積み重ねていくプロセスそのものをデザインとして扱う。

気配のデザイン



“建物を使った後”に着目した考え方。雨が降った日はその場所を使っていた人の足跡や動線の痕跡が滲み出るそして雨が降る度にその痕跡が積み重なっていく。人がそこにいなくても、そこにいた気配が目に見える形で残る。本計画が示したいのはそんな人が去った後に残るデザインである。

五感で感じる雨の現象



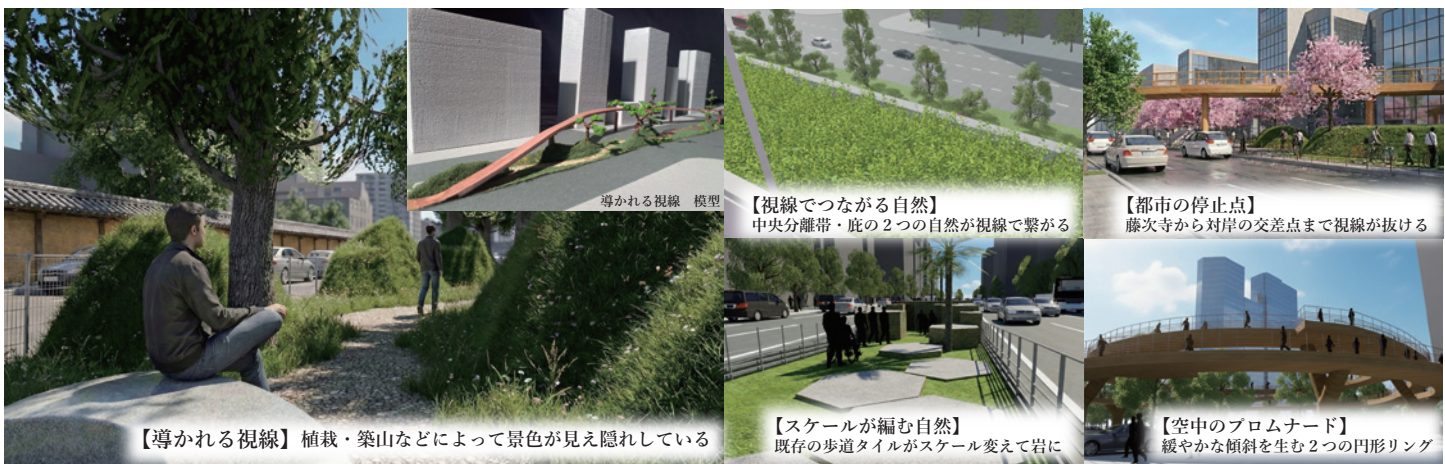


緑のつながり ～桂離宮から読み替える現代のまち～

國澤晃一

本計画は、都市空間の中で失われがちな自然とのつながりを回復することを目的とする。牧野植物園で感じた、境界を越えて広がる自然の力強さを都市に呼び戻すため、谷町筋を天王寺公園と大阪城公園を結ぶ「自然軸」の結節点として再構築する。中央分離帯や歩道橋など単一機能の都市要素に新たな価値を与え、街全体を植物園のように捉えることで、歴史や文化とも重なり合う風景を創出する。自然が日常の移動や活動と交差し、都市の景色そのものを更新する場を提案する。

桂離宮の自然観を、自然と建築が連続するグラデーションとして都市に引き寄せた着眼が鮮やかだ。谷町筋という直線の大通りを一つの生態系として読み替え、野鳥の行動圏を手がかりに300～500m間隔で拠点を編成していく。建物を植生のように読み取り、そこへ接木するように形態と配置を決めていった。単体では奇抜に見える断片が、通りの喧騒を想像すると不思議と馴染む。その感覚を都市の説得力にまで押し上げた。 白須 寛規



【導かれる視線】植栽・築山などによって景色が見え隠れしている

導かれる視線 模型

【視線でつながる自然】中央分離帯・庇の2つの自然が視線で繋がる

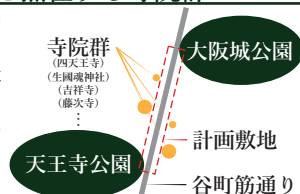
【都市の停止点】藤次寺から対岸の交差点まで視線が抜ける

【スケールが編む自然】既存の歩道タイルがスケール変えて岩に

【空中のプロムナード】緩やかな傾斜を生む2つの円形リング

② 2つの象徴的な緑を繋ぐラインと点在する寺院群

今回の計画敷地である谷町筋は、都市の中で存在感のある自然を有する天王寺公園と大阪城公園の間に位置している。本計画ではそれらを繋げる役割を担うことで、敷地境界線に縛られた自然を境界を超えて日常的に感じられるようにすること提案する。また、通り沿いにある寺院群に焦点を当てることで、文化軸としての価値を高めることを目的とする。



③ 建築と自然の歴史的関係性について

都市と自然の関係性を探るにあたって、建築と自然の関係性を人の認識と共に調査した。

○古代～中世

自然は信仰の対象であり、畏れ敬う存在であった。建築は自然の秩序に従い、地形や森と一体的に成立する。
ex) 伊勢神宮に見られるように、自然そのものが御神体であった。



○近世 (江戸時代)

自然は暮らしに寄り添う、身近な存在であり、人と共存の関係。建築と庭は連続し、緑側や開口部が人と自然の距離を調整する。
ex) 桂離宮：自然の一部として振る舞う空間体験が生まれている。



○近代 (明治～高度経済成長期)

自然は征服・克服すべき対象として扱われた。都市化により自然は整理・排除され、人工的環境が定着する。
ex) 帝国ホテル：自然は抽象化された構成要素となる。



○現代 (1990年代～現在)

自然は共生・修復・再統合の対象として再評価されている。グリーンインフラなど、都市と自然の再接続が進む。
ex) アクロス福岡や豊島美術館は、その新たな関係性を示している。



○未来

これら先の未来における自然の価値観は、修復された自然との共存になるのではないかと定義し、この設計を進めていく。



④ 桂離宮の分析 (近世の建築の調査)

都市の中で自然の操作を行うにあたって、人と共存の関係にあった近世の建築である桂離宮を調査することとした。桂離宮では主に4つの要素に分析することができた。

- ① 建築と自然に明確な境界がない
- ② 動線と体験の設計
- ③ 自然素材の造形と調和
- ④ 空間の余白と静けさ

- 1: 視覚的連続性
- 2: 歩行体験の設計
- 3: 自然由来の素材利用
- 4: 機能的な余白 (都市要素へ変換)

○桂離宮に含まれるフラクタル性

フラクタル性：同じような形が拡大・縮小しても繰り返し現れる構造。
ex) 雪の結晶 (六角形)、樹木 (幹・枝・小枝・葉脈)

・人の脳と自然の相性
・視覚的なリズムとスケール感
・秩序と偶然の間にある美しさ

人々に心地よさを与える

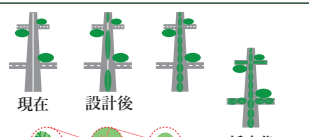
【桂離宮】
・池の形...直線的でなく、入り組んで波打つような自然な形。
・植栽の配置...空間の密度に強弱をつけるような配置。

⑤ 都市スケールでの提案

- 緑のまとまりを300～500m間隔で配置
- 1: 鳥や昆虫が生態回復の形成に必要な緑の拠点の間隔幅
- 2: 都市スケールのリズム間隔 (交差点区間, 区画単位)
- 3: 人が日常的に自然を体験できる目安 (WHOや欧州の都市計画で採用されている目標値)

○将来的なフラクタル性

本計画で谷町筋に配置された1本の緑の筋は、将来的に横方向へ広がり、街区の細道や個人宅の庭先とつながり、都市の中に点在する様々な緑と連続的に結びついていく姿が想像される。まるで、枝のように広がる姿は都市空間全体にフラクタル的な秩序とリズムをもたらす。



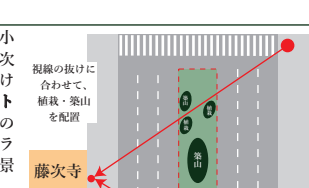
⑥ 敷地スケールでの提案

- 導かれる視線 (中央分離帯)
- 幅を広げた中央分離帯に築山と植栽を吉祥寺への視線を完全に遮らない位置に配置し、日常の移動の途中で寺が見え隠れする体験を与える。桂離宮に見られる「余白」は、建築と自然の両方を際立たせる装置として機能している。その考え方を応用し、吉祥寺の正面に大きな空間の余白を設けている。築山や植栽で見え隠れしていた吉祥寺が突然開けた空間の中で現れることで、これまでの風景とのギャップが生まれ、その存在が強く印象づけられる。



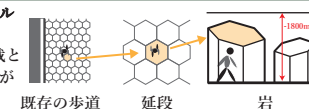
○都市の停止点 (駐輪場)

駐輪場を単なる機能施設ではなく、都市の中に現れる小さな「オアシス」として再解釈する。また、街から藤次寺へと視線が抜ける構成を作っている。その視線の抜けは、交差点など人の動きが一瞬止まる日常的なポイントに重ねて配置しており、立ち止まった瞬間にふと寺院の存在が立ち上がる。築山や植栽の配置は、この視線のラインを手がかりに組み立てられており、街の雑多な風景をやわらかく整理しながら、視線を寺院へ導いている。



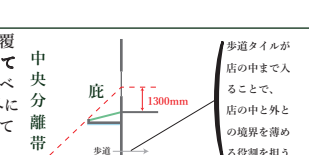
○スケールが編む自然 (地下駐車場)

既存の歩道にある六角形タイルのパターンが、スケールを変化させながら半地下の空間へと展開している。-1800mmという数値が、半地下の空間に存在する植栽と石や壁の隙間から見える既存の街路樹と視覚的なつながりを持たせている。



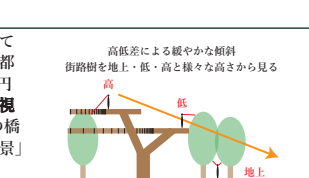
○視線でつながる自然 (歩道)

既存建物に新たな庇を設け、その上部を芝生と植栽で覆うことで、建物内部から2つ自然のレイヤーが繋がって見える構成としています。視線の基準高さをフロアレベルから1300mmに設定し、建物の中にながら、外に広がる自然を感じられる新しい街路風景をつくり出しています。



○空中のプロムナード (歩道橋)

異なる高さを持つ2つの円形リングによって構成されています。高低差は外側に対して緩やかな傾斜を生み、都市構造物から植栽へのつながりを持たせます。また、円形リングを繋ぐスロープなどによって、歩くにつれて視線の高さや見える景色が変化し、単なる移動のための橋ではなく、都市と自然を同時に体験する「回遊する風景」として機能します。





共助と共生 - 暮らしの可視化と窓の共有化 -
松浦菜奈

現代において求められている共助とは、制度や仕組みに依存するだけでなく、日常的に互いの生活に少し踏み込む関係性を通して、制度を補完し、実効性をもって機能するものであると考える。本設計では、暮らしの可視化と共有化に着目し、窓を媒介とした建築・空間的手法によって住まい手同士のつながりが自然に生まれる住宅群を提案する。日常の中で生活の一部を共有することで愛着を育み、その延長として共助が立ち上がる住環境を目指す。

共助と共生という今日的な課題に対し、「設計で何ができるか」を問う姿勢が明確だ。既存住宅のプランを読み取ることから始め、境界が生む欠点に気づいたところで方針が立ち上がった。境界の奥行きを上げ、開口の可能性を差し込むことで関係が生まれる余地を増やしている。また屋外に屋根をかけて半屋外を押し広げ、壁で切り取られないつながりを支える操作を行なった。繊細な部分の集積だが、その積み重ねがかえって汎用性を高めている。

白須 寛規



研究背景

かつての集落や共同体では、農耕や生産活動を通して生活が共有され、共助は日常の中に自然に組み込まれていた。しかし産業社会以降、自助と公助が中心となり、地域内での共助の役割は縮小していった。一方、人口減少や少子高齢化が進む現代では、自助・公助の双方に限界が生じており、その間を補完する存在として共助の重要性が改めて高まっている。そのため、現代社会に即した新たな共助のあり方を、暮らしの場から再構築する必要がある。



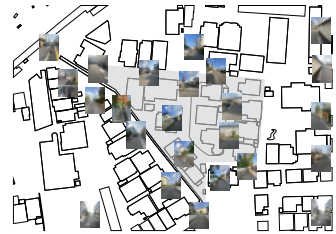
目的

現代社会では、人間関係の希薄化が進む中で、制度として共助の仕組みが整えられつつある一方、それを実効的に機能させるための基盤となる日常的なつながりが十分に育まれていないことが課題である。そこで本研究では、住宅およびその周辺空間に着目し、「可視化」や「共有化」といった空間・建築的手法が、人と人とのつながりや場所への愛着を育み、共助の関係を誘発する可能性について明らかにすることを目的とする。



計画敷地

本計画敷地である阪急富田駅南側の住宅街は、歴史的建造物が点在する一方、近年は新築住宅の増加や住民の入れ替わりにより、新旧住民が混在する地域となっている。また、区画整理が十分に行われていないため、古い住宅と新しい住宅、空地や高低差のある敷地が混在し、生活圏は近接しているものの、住民同士の関係性が希薄化しやすい環境である。さらに、高齢化や単身世帯の増加、大規模災害時の対応を考えると、日常の中で支え合える関係性を地域に内包することが求められる。本計画は、この敷地特性を踏まえ、住まいやその周辺空間を通して、暮らしの中に自然と共助が立ち上がる基盤を探る。



提案

このような環境において、**つながり**と**愛着**が共助の基盤になると考えた。住民が住まいや周囲の人に対して愛着を持つことで互いに関心を抱き、日常の中で小さなつながりが生まれていく。

そこで本計画では、愛着とつながりを生み出す手法として「暮らしの可視化」を提案する。ここでいう可視化とは、単に生活が見えることではなく、住人の**気配**や**暮らし方**が感じられ、想像できる状態を意味する。

この可視化を実現するために「**窓の共有化**」という設計手法を採用し、**窓を媒介として生活の一部を共有**することで、日常の中に小さな接点を生み出し、**つながり**と**愛着**が共助の基盤となる住宅群を目指す。

加えて、各住居の辺を延長線上に伸ばし、屋内空間や、屋根を設けた。そうすることで、住居同士のつながりが物理的に可視化され、そこに住む住民たちはつながりを感じる事ができる。

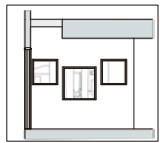
本提案は、制度や義務によって成立する共助ではなく、暮らしの可視化と窓の共有化を通じて、日常の中から共助の基盤となるつながりと愛着を育む周辺環境を含んだ住宅群を提示するものである。

4 ボックスシート



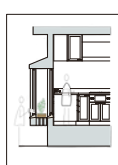
ボックスシートの中を住居部とする事で、仕事と生活が適度に交わる環境をつくる事ができる。ガラス張りのボックスシートという半開放的な空間を書斎にすることで、通常離れがちな生活の一部でもある仕事を地域の人の暮らしの中にも届け込める。外部からの視線や気配を感じながらも、自分の作業に集中できるこの環境は、完全な隔離もなく、完全な共有でもない中間的な位置づけである。その結果、働く時間と地域の人の気配と縁がよくなり、孤立感を軽減しつつも適度な距離を保つことができ、暮らしの共有化ができる。

5 風景が絵画になる小窓



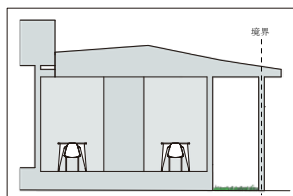
住宅街に面している壁にいくつかの小さな小窓をくり抜くことで、外の景色はただ眺める対象ではなく、室内に取り込まれる一部となる。それぞれの小窓は時間帯や天候、季節によってその表情を絶えず変化させる。このように、外部の環境を生活空間の断片として取り込むことで、住まい手は日々の暮らしの中で「外」と「内」とを切り離さずに感じることができる。その結果、外の出来事や自然の変化を自分の生活の一部として共有しているような感覚に陥り、住まいが周囲の環境や地域とゆるやかにつながることになる。

2 窓辺の小さな畑

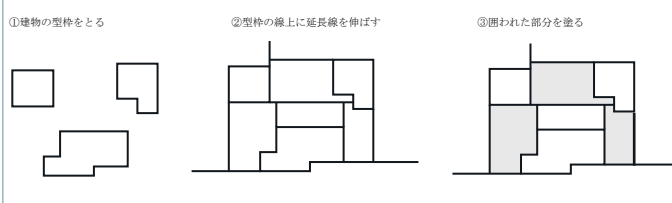


住宅街の外側に向けて、窓を設置した。この窓は内側に引き違いのガラス戸を設けており、それに加えて外側に同様のガラス戸を設置している。窓と窓の間に植物を置くことで、内と外の両方からプランターにアクセスすることが可能となり、植物を外側・内部に関わらず、双方で育て合うことができる。さらに、時間の経過とともに変化していく植物の成長を地域の人が共有することで、植物の成長を媒介として、自分たちの成長の時間も共有できる。

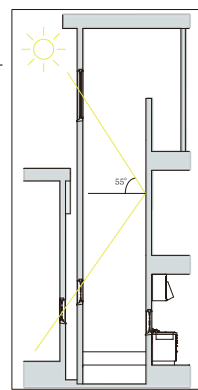
10 スクリーンフェイス



鉄格子のフェンスは通常、敷地内と敷地外を明確に分ける境界として機能する。しかし、そのフェンスを敷家並みの景観をよくすることは良い住環境をつくるという観点から、「家の窓」から「境界敷地の窓」にまで解釈を広げてみる。敷地内と敷地外を明確に分ける境界として通常、鉄格子のフェンスが使用されることが多い。しかし、フェンスでなくとも敷地内外を分けることはできる。元々敷きつめた壁を切り離し、上下左右に平行移動させる。そうすることで、視覚的・物理的には敷地内に入ることができるが、心理的に考えたときに入るとは困難であると考えられる。このことから、ただ単にスクリーンフェイスというもので敷地内外を分けるのではなく、物理的・心理的に分けることも可能である。

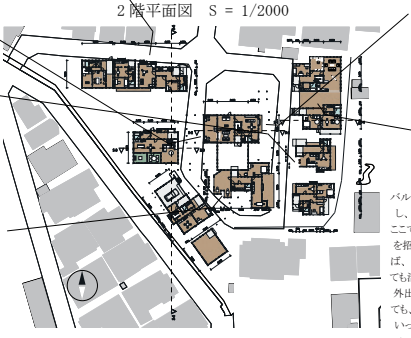
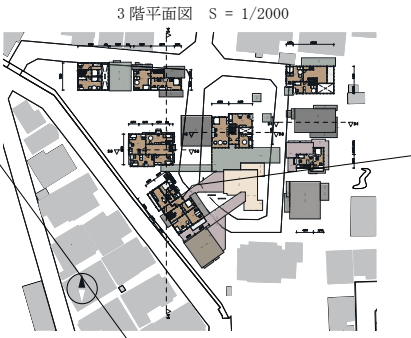
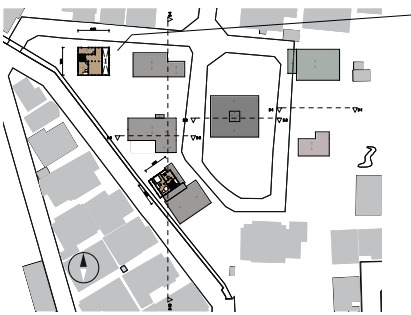


各住居の延長線上に屋内空間や、屋根を設けることで、住居同士のつながりが物理的に可視化され、つながりを感じることができる。

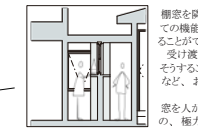


7 反射する光

極小敷地に住宅が密集する環境では、隣家が近いためプライバシーが守りにくく、採光不足や騒音などの問題が起こることがある。それを解決するために、トップライトから自然光を得て、白い壁により光が反射する。反射した柔らかな光は、直射日光と異なり眩しすぎないため、書斎や勉強部屋、アトリエなど安定した光を必要としている場所に向いている。この仕組みを利用させ、3階建ての住戸から自然光を取り入れ、隣家の1階へ光を導く。



3 欄窓



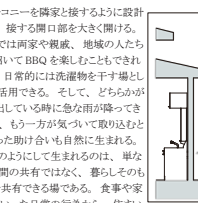
欄窓を隣接する住宅と共有することで、欄としての機能を活かし、収納物を両住戸で共有することができれば、日用品やちょっとした道具を受け渡す小さな共有の場として活用できる。そうすることで、好きなものやハマっているものなど、お互いについていることができるきっかけになる。窓を人が通すためのものが受け渡すことができるの、極小小窓を大きくする。そうすることで、防犯面は解決する。

1 出窓

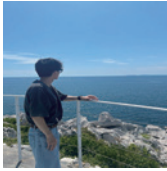


出窓の外側にベンチを設置する。そうすると、家事の合間に少し腰を掛けることで、近隣の人々と自然に会話が始まり、休憩時にこのベンチを利用することで、通りを行き交う人や隣人との交流が日常の延長線上で生まれたりする。さらに、台所や窓際で作業をしている時、すぐそばに人の気配が感じられると、「自分ひとり」で生活をしているという孤立感から解放され、「同じ時間を誰かと共有している」という意識を持つことができる。その感覚は、日々の暮らしの中で見えにくい家事労働に対する心理的な支えとなり、生活をする中で、心のゆとりや安心感を生み出す。

6 外部とのつながり



バルコニーを隣家と接するように設計し、接する開口部を大きく開ける。ここでは両家や親戚、地域の人々を招いてBBQを楽しむこともできれば、日常的には洗濯物を干す場としても活用できる。そして、どちらかが外出している時に急な雨が降ってきたり、もう一方が気づいて取り込むといった助け合いも自然に生まれる。このようにして生まれるのは、単なる空間の共有ではなく、暮らしそのものを共有できる場である。食事や家事といった日常の行為から、住まいは互いに支え合う関係を生み出し、生活の豊かさや安心感を高める。



斜面に寄り添うランドフォーム建築—ワインと自然が交わる場の提案

田川泰地

本研究は、アクトランド八尾の斜面地を読み取り、地形に寄り添う「ランドフォーム建築」によるワイナリー複合施設の提案を行う。傾斜や日射、風の流れといった環境特性を空間構成に組み込み、段状のフロアや屋外テラスによって自然と連続した体験を生み出すことを目指した。また散策路や広場などの公共空間を建築と一体的に計画し、ワイン・自然・人が緩やかに交わる新しい交流の場の創出を試みる。

生駒山の裾野に広がる敷地周辺地域は枝豆や葡萄の産地である。大阪平野の夜景が一望できるスポットもあるが、ほとんど知られていない。そこで、既存の傾斜地とみちを活かし、葡萄畑とワイナリーを巡りながら、展望テラスに導く遊歩道と建築を提案した。ワインの製造が見学できるワイナリー、緩やかなみちと随所に配置した休憩スポット、テラスからの美しい夜景は誰もが楽しめ、この地に眠る魅力を引き出すであろう。

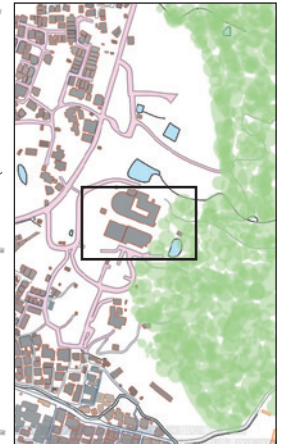
大谷 由紀子

1. 研究背景・目的

大阪東部に位置するアクトランド八尾は、斜面地という特性を持ちながら、その地形的価値が十分に活かされていない。一方で、近年は地域資源を生かしたワインづくりや、自然と人の関係を再構築する屋外公共空間への関心が高まっている。特に斜面地は、日照・通風・眺望といった環境ポテンシャルを内包し、農・食・滞在を複合させる場としての可能性を有する。本研究は、アクトランド八尾の敷地を対象に、斜面地形とワイン文化を中心として、自然体験と公共性が交わる新たな屋外公共施設のあり方を探ることを背景とし、地域活性化を目指す。

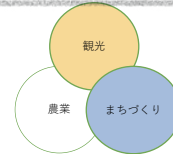
2. 敷地概要

大阪府八尾市思智 中町 4 丁目 55
周囲は住宅地や商業施設、公共施設が混在する都市型エリア・敷地は比較的広く、イベントスペースや駐車場が確保されていて周辺には河川や緑地は少ないが、敷地自体は開放的で地域の集会所やレジャー利用に適している。レジャー施設（遊具や休憩スペースなど）・学びや文化活動の拠点としての活用が想定されている。



3. コンセプト

建築を敷地に「置く」のではなく、斜面と一体化させて「地形化」することで、ワイナリーそのものをランドフォームとして再構築することを目的とする。建物は地形の高低差に沿って段状に展開し、屋根や床、テラスはぶどう畑や既存の自然環境と連続する歩行可能な地表となる。これにより、訪れる人は斜面を登り、巡り、滞在する中で、ワインの生産過程や土地の風土を身体的に体験できる。生産機能と公共空間を分断するのではなく、視線や動線によって緩やかに重ね合わせることで、日常的に立ち寄れる開かれた場を形成する。自然・建築・人の関係を再編し、風景として成熟していく公共的ワイナリーを提案する。



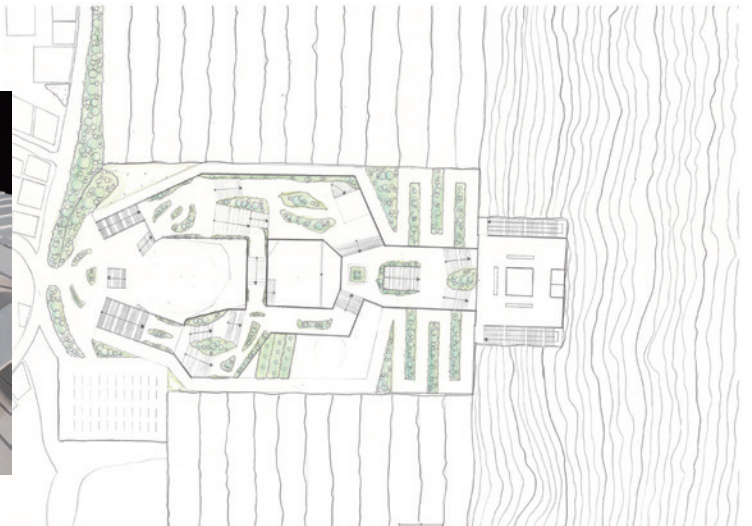
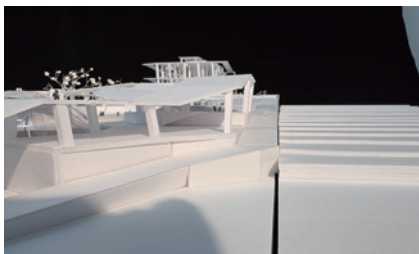
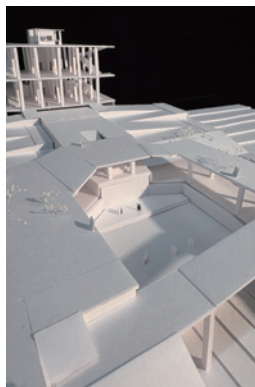
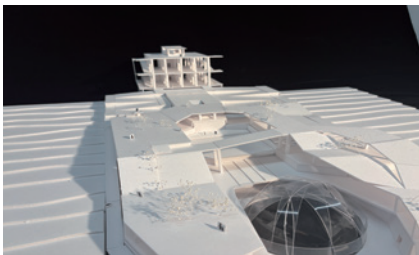
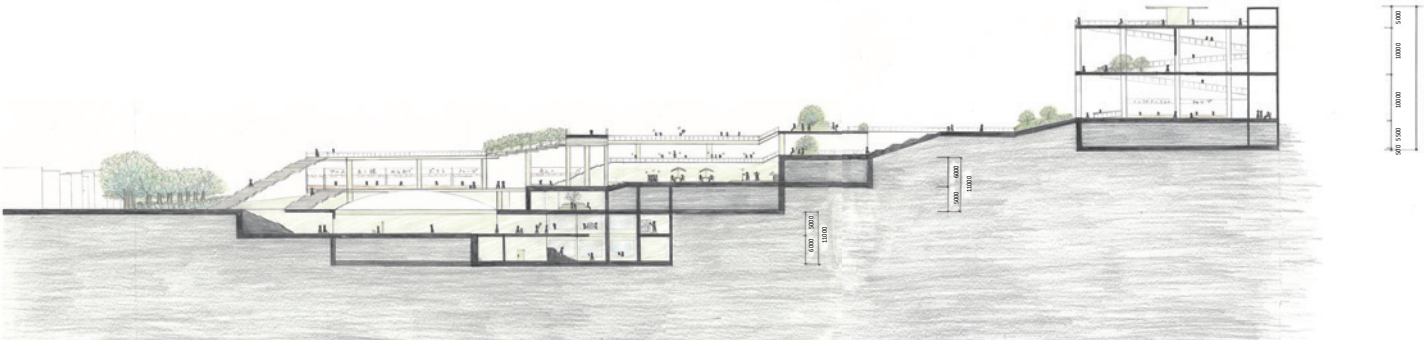
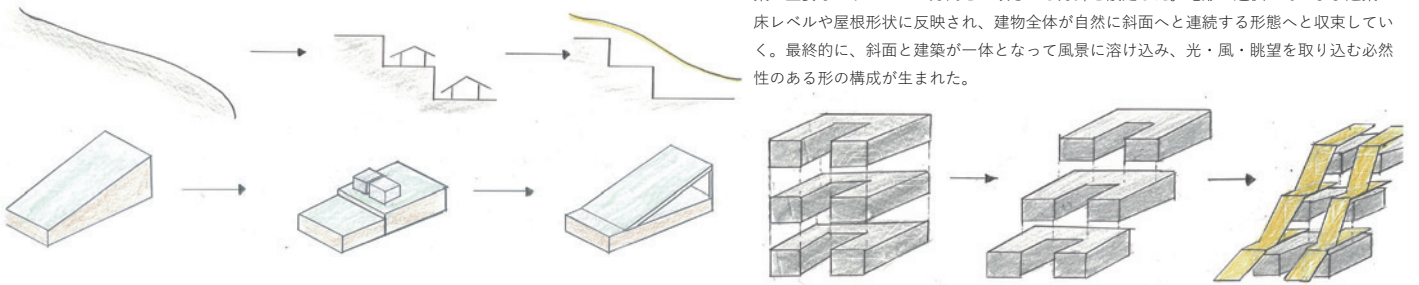
4. 提案

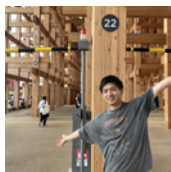
地形の再生

斜面を平坦に造成するのではなく、既存地形の勾配・谷筋を読み取り、それらを建築の構成要素として積極的に受け入れることで、土地固有の環境を守りながら新たな価値を生み出す。建物の配置や高さを段状に調整し、本来の地形を残しつつ景観への圧迫感を軽減する。

建築物全体を斜面に添わせる形へ導くまでの工程

斜面地の特性を最大限活かすため、建築物全体を斜面に寄り添う形へと導いた。まず、敷地の勾配・方向性・高低差を詳細に読み取り、地形に無理をかけず建物をどの方向に伸ばすべきかを分析した。次に、日射条件・風の流れ・眺望軸を重ね合わせ、地形の傾きと建築の主要なボリュームの方向を一致させる方針を設定した。地形の起伏がそのまま建築の床レベルや屋根形状に反映され、建物全体が自然に斜面へと連続する形態へと収束していく。最終的に、斜面と建築が一体となって風景に溶け込み、光・風・眺望を取り込む必然性のある形の構成が生まれた。





あわいの建築～新しい市街地再開発の提案～

宮下 巧

従来の再開発は、住宅・商業・業務を積層したり、独立的に配置することで、面的な連続性や回遊性を欠き、交流や多様な活動が生まれにくい。枚方市光善寺駅周辺でも同様の計画が進み、広場や余白空間は十分に活用されず、地域の記憶である井戸の継承もなされていない。本計画では、単なる機能集積ではなく、人や用途、場、時間が交差する4つの「あらい」をキーワードに都市に組み込み、偶発的な出会いと多様な活動を育む新しい市街地再開発を提案する。

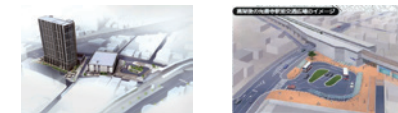
都市にはオープンスペースが必要と言われていた。京阪沿線で現在進行中の駅前再開発計画に対して、資本主義世界での開発にないボリュームを落とした再開発のあり方を問う意欲的な計画である。「あらい」という言葉をキーワードに、「あらい広場」を中心にスロープ、ブリッジを設け、既存の道の痕跡を活かし繋げ、国道で分断された駅前までの道を繋げ、人と人、人と物、商業空間と住空間、職空間を繋げる複合計画である。 伊熊 昌治

01. 研究背景 - 従来の市街地再開発について -

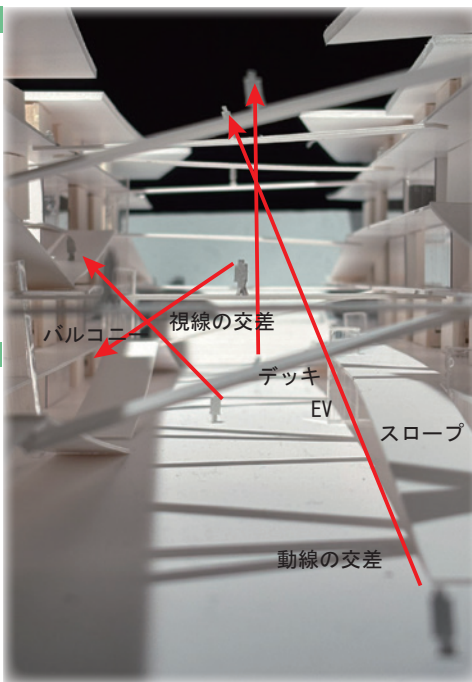
再開発では集合住宅や商業・業務施設を組み合わせることで、多様な都市活動を一地域に集約することが期待されている。しかし従来の再開発は、機能を単に積層した構成や敷地ごとに独立した建物配置が多く、都市としての面的な連続性を欠いている。その結果、歩行者の回遊性は乏しく、交流や活動の重なりが生まれにくい。さらに用途の混在や人々の交差、既存と新しい価値の共存といった都市の多様性も十分に実現されず、空間は均質化している。

02. 問題定義 - 光善寺駅の市街地再開発について -

枚方市光善寺駅周辺では市街地再開発が進められているが、建物は従来型のように積層・点在配置されている。駅前広場も緑地やバスターミナルが設けられるのみで、滞在や交流の場としての魅力に乏しい。さらに建物間の余白空間は活用されず、発掘された井戸も継承されていないなど、地域の記憶が断絶されている点が課題である。



<https://www.city.hirakata.osaka.jp/0000025451.html>
<https://www.hira2.jp/town/archives-50335415.html>



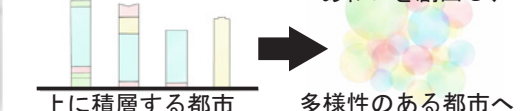
03. 設計敷地概要 - 光善寺駅周辺

光善寺市街地再開発事業の敷地は、国道170号線と京阪電車の線路に挟まれた場所に位置する。京阪電車の開業以降、沿線に住宅地が形成され、高度経済成長期には国道整備により国道側にも市街地が広がった。現在も細い生活道路や路地が残る一方、住民の高齢化が進んでいる。また建物の密集により閉塞感のある空間となっている。



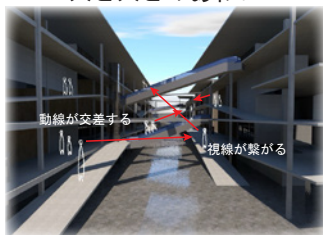
04. 計画概要 - 新しい市街地再開発の提案 -

都市は多様な人や建物が混在し、本来は出会いや文化が生まれる場であると考えられる。しかし従来の開発は用途分離と効率性を重視し、その可能性を弱めてきた。そこで今計画ではあらいというキーワードを使い提案する。あらいとは間にうまれる関係性のことであり、ここでは間の空間ことをさす。広場や通り抜け空間などの「あらい」を設け、「人・用途・場・時間」の間に生まれる関係性を重ね合わせ、光善寺駅周辺の再開発に新たな都市像を提案する。 あらいを創出し、



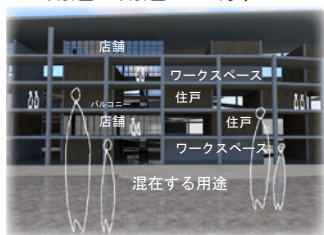
05. 提案 - あらいを創出 -

人と人とのあらい



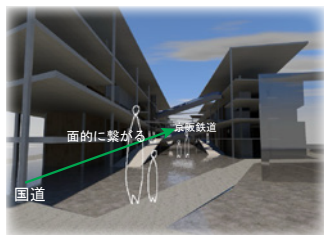
動線の交差 視線が繋がる
 一方に流れる広場では多様性は生まれにくい。複数の道が平面・立体的に交わることで人の動きが交わりが重なり、偶発的な出会いや交流が生じる。

用途と用途とのあらい



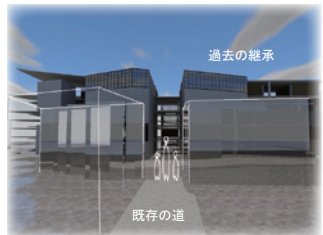
混在する用途 変化する建築
 用途を単体で配置する都市では活動が限定される。住宅・商業・業務を混在させることで人の行動や時間帯が交差し、多様な都市環境が生まれる。接続し、二つの住宅地の回遊性と交流を生む。

場と場とのあらい

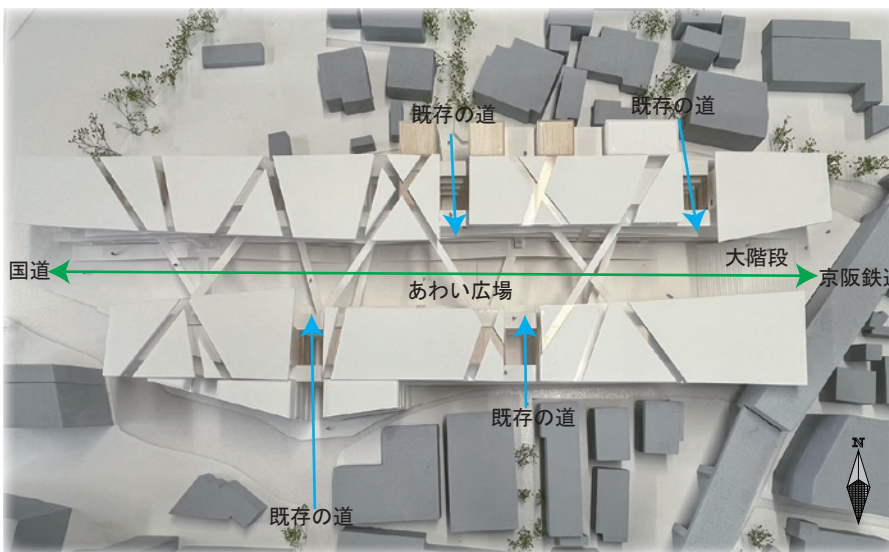


面的に繋がる 繋げる建築
 京阪沿線と国道側の二つの住宅地は交通インフラにより分断されている。本計画では国道と鉄道とを面的に繋ぎ、二つの住宅地の回遊性と交流を生む。

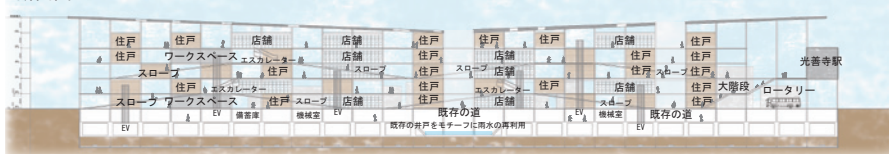
過去と未来とのあらい



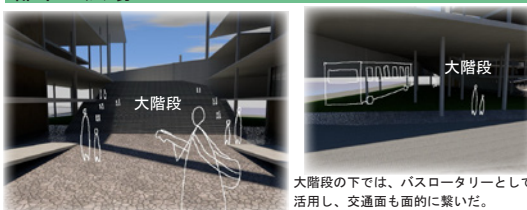
過去の継承 未来に繋がる
 井戸や既存の道を活用し、光善寺の記憶を継承する。歴史を基盤に用途が更新される、可変的で面的な都市空間をつくる。



断面図 1/2000

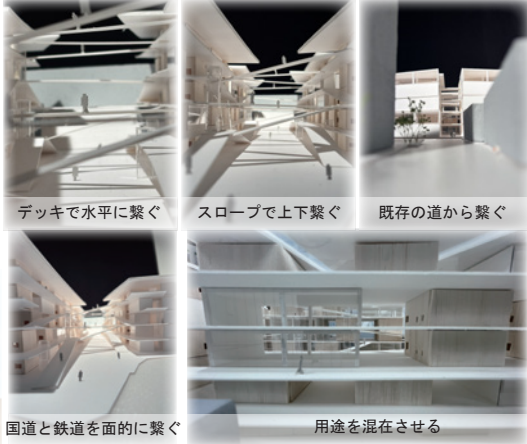


都市の広場



大階段の下では、バスロータリーとして活用し、交通面も面的に繋いだ。

中央には仮設ステージを設け、音楽や地域行事など多様な活動を行う。駅へと続く大階段は客席や居場所となる。「あらい」の空間こそ、緑や固定ベンチだけに依らない都市の広場であると提案する。





連続する帯 境界をゆるめる高架下の居場所

佐藤帆純

現代の都市には、学校・職場・家庭など役割を前提とした場所が多く存在する一方で、特定の目的や立場を求められずに「ただ居る」ことができる空間は少ない。そこで、高架下という通過を前提とした都市の余白空間に着目し、壁柱の配置や間隔、視線や境界の操作によって、人との距離や関わり方を選択できる居場所を創出する。用途や行為を固定しない連続的な空間操作を通して、日常の中で役割から一時的に解放される滞在のあり方を提案する。

居場所のない子供たちという問題意識から出発したが、結果的に年齢を限定しない居場所へと定着している。「用途を決めない場」を成立させることに苦勞し、何度もやり直していたことが設計の密度を高め、空間の説得力に直結している。都市の中で使われていない高架下を選び、そこにある 200mm 厚の壁柱を増幅させるような手法が鮮やかだった。小さな居場所を連続させながら、高架で分断された都市構造に一石を投じる提案になっている。白須 寛規

01 研究背景

「居場所」の欠如

近年、人が自分の居場所を自然に感じられない状況が生まれている。社会的つながりの不足や関係性の断片化が進む中で、日常の中に安心していられる空間をもてない人が増えている。また、現代の生活は「目的」や「役割」を中心に構成されている。人は常に何かを果たすことを前提に空間を行き来している。その一方で「自分らしく存在できる時間や場所」を確保しにくくなり、居場所の欠如につながっていると考えられる。

02 目的

日常の「居場所」をつくる

本計画は、目的や役割を前提とせず、理由がなくても滞在できる「居場所」としての空間をつくることを目的とする。「何かをしなければならない場所」ではなく「ここにいていい」と感じられる状態を、建築によって成立させることを目指す。役割や対馬から一時的に解放され、他者との関係性を自ら調整しながら過ごせる空間を通して、日常の中に安心していられる居場所を創出する。

03 敷地概要

都市の余白である高架下

計画地は京都市伏見区に位置し、複数の鉄道路線や名神高速道路が通る交通利便性の高い地域である。住宅地や学校、商店街、公園などが近接し、日常的な人の往来が多い一方、河川や丘陵地など自然環境も残されている。

敷地周辺の高架下では、柱や壁により見通しが悪く圧迫感があり、信号のない横断歩道によって歩行者と車両が交錯する危険な状況が生じている。また、駅周辺施設への動線も限定され、高架下は通過せざるを得ないが滞在しにくい場所となっている。



高速道路の柱



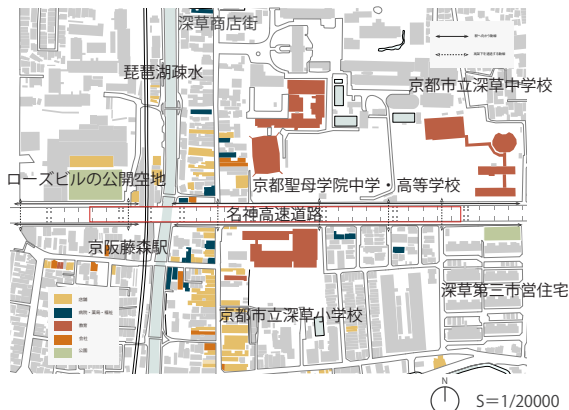
高速道路下の通路



深草小学校と高速道路



公開空地



S=1/20000

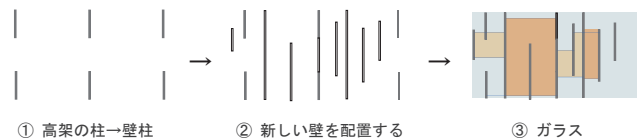
04 計画概要

境界や役割を固定しない空間

計画では、休憩所、ライブラリー、コインランドリー、イベントスペース、ギャラリー、キッチンといった複数の機能を配置する。ただし、それらは特定の立場や行為を利用者に強制するものではない。明確な使い方を定めるのではなく、行為のきっかけとして存在し、利用者が自由に関わり方を選ぶことができる。用途を持ちながらも、役割を固定しないことで、「訪れる人/迎える人」といった関係性を生まれにくくし、誰もが対等に滞在できる場を目指す。

05 設計プロセス

既存の壁の間に新しい壁とガラスを挿入する



① 高架の柱→壁柱

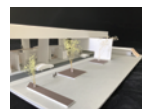
② 新しい壁を配置する

③ ガラス

既存の高架の壁柱の 15 メートルのスパンの中に人が滞在できる空間をつくり出す。壁柱をずらしながら反復的に配置することで、大きな高速道路の高架という構造体に人の居場所をつくる。

壁柱の間に元の壁の厚さと同じ 200 ミリの壁を挿入する。3000 ミリから 15000 ミリのさまざまな長さの壁を平行にランダムに挿入し、壁と壁の間隔が多様な居場所をつくり出す。

挿入した壁と元の壁の間をガラスでつないだ凹凸の空間。ガラスで閉じることで空間に内と外が生まれ、狭い少数しか入れない場所や広く大人数でも使用することのできる場所ができる。



大階段のある居場所



量のある居場所



間のある居場所

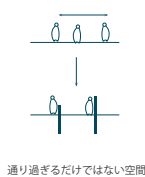


作品のある居場所

06 提案

居場所と感ずるための 3 つの要素

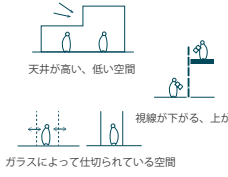
- 1 日常の人の動きがあらわれる
- 2 役割、境界を固定しない
- 3 人との距離感を自由に選択できる



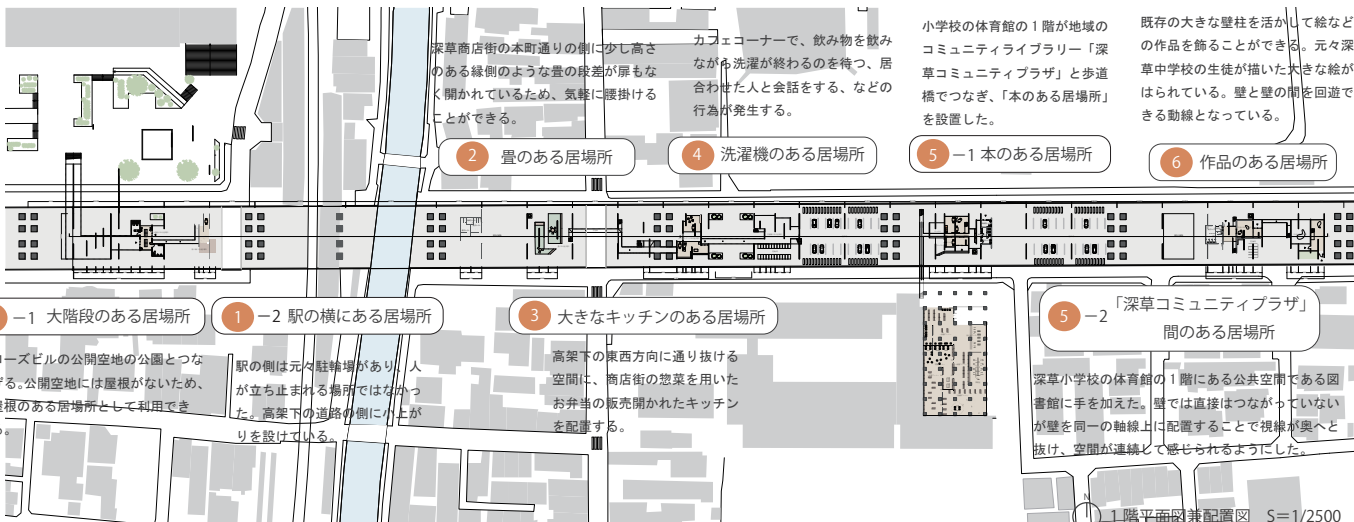
通り過ぎるだけではない空間



人と人を分けない、境界をゆるめる



天井が高い、低い空間
視線が下がる、上がる空間
ガラスによって仕切られている空間



① -1 大階段のある居場所

① -2 駅の横にある居場所

③ 大きなキッチンのある居場所

⑤ -2 「深草コミュニティプラザ」間のある居場所

ローズビルの公開空地の公園となつた。公開空地には屋根がないため、屋根のある居場所として利用できる。

駅の側は元々駐輪場があり、人が立ち止まれる場所ではなかった。高架下の道路の側に小上がりを設けている。

高架下の東西方向に通る抜ける空間に、商店街の惣菜を用いたお弁当の販売開かれたキッチンを設置する。

深草小学校の体育館の 1 階にある公共空間である図書館に手を加えた。壁では直接はつながっていないが壁を同一の軸線上に配置することで視線が奥へと抜け、空間が連続して感じられるようにした。

深草商店街の本町通りの側に少し高さのある縁側のような量の段差が厚もなく開かれているため、気軽に腰掛けすることができる。

② 量のある居場所

カフェコーナーで、飲み物を飲みながら洗濯が終わるのを待つ、居合わせた人と会話をする、などの行為が発生する。

④ 洗濯機のある居場所

小学校の体育館の 1 階が地域のコミュニティライブラリー「深草コミュニティプラザ」と歩道橋をつなぎ、「本のある居場所」を設置した。

⑤ -1 本のある居場所

既存の大きな壁柱を活かして絵などの作品を飾ることができる。元々深草中学校の生徒が描いた大きな絵がはられている。壁と壁の間を回遊できる動線となっている。

⑥ 作品のある居場所

1 階平面図兼配置図 S=1/2500



| 担当教員 |

専任

白須寛規

非常勤講師

小野龍人

武田憲人

西井洋介

西倉美祝

| STAFF |

Hironori SHIRASU

Tatsuhito ONO

Norihito TAKEDA

Yosuke NISHII

Minori NISHIKURA

課題

**世界を編み直す建築
境界からひらく可能性**

概要 この最後の設計演習では、スタジオ制を採用し、担当建築家の指導のもと建築の考え方や設計プロセスを学ぶ。特徴は、「何を解決するか」「何を作るか」を自ら設定する点で、卒業設計と同じ枠組みで取り組む。敷地は提示される15の敷地候補から各自が選定し、スタジオ内で情報を共有。敷地の特性や課題、建築の方向性について積極的に議論を重ね、半期をかけて一つの建築としてまとめ上げる。設計の意図や課題へのアプローチを明確にし、独自の視点を反映した提案を目指すことが求められる。

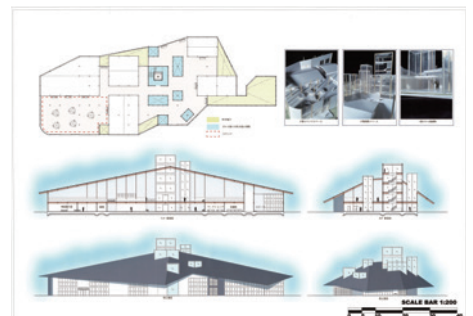
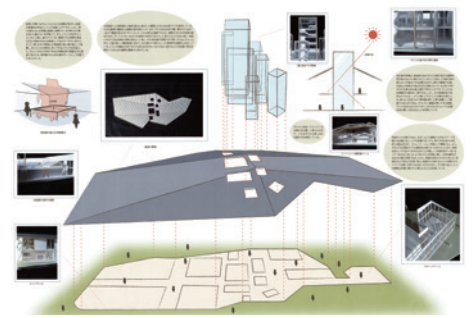
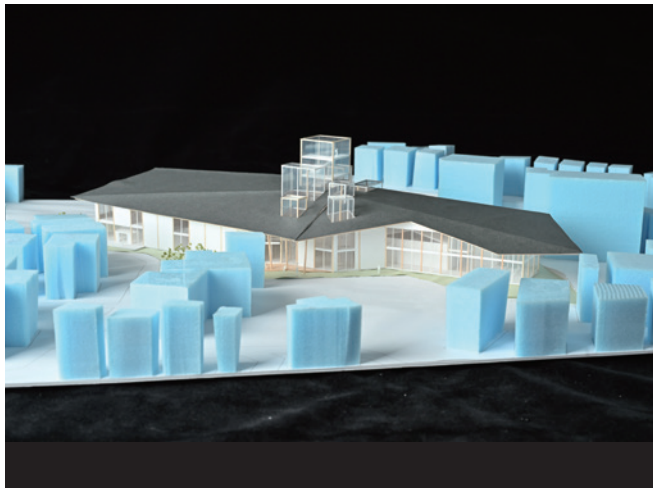
歴史とともに 包み込む

～人に寄り添い
広げる地域拠点～

内田 章太郎

地域の歴史を観光資源として活かしつつ、住民の日常生活の場にもなることを目指した計画。開放的な大屋根が、外部から訪れる人々と日々利用する地元の人々とともに迎え入れるための空間をうまく表現している。その大屋根を貫く複数のガラスボリュームが外部の光を導き、人々のコミュニケーションの場を明るく照らしている。山並みに合わせた大屋根のシルエットと、そこから突き出したガラスチューブの対比が特徴的で、この施設が内包する空間のバランスをよく表している。

小野 龍人



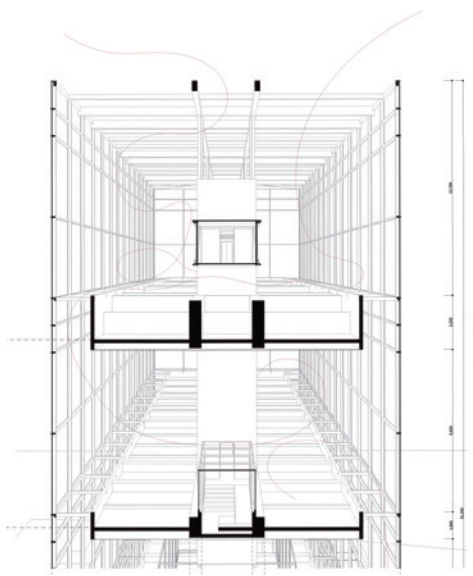
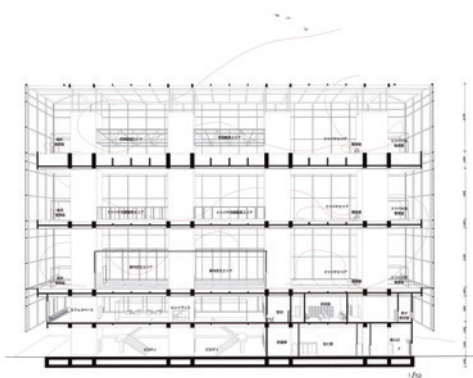
飛来が編む 都市の緑と蜂舎

～ポリネーションを促し、
人が入り込む層状蜂建築～

山本 龍之介

蜂の養蜂空間という設定を、リアリティをもって可能な限り都市的に拡張し、建築としてまとめた力作。ランドスケープを建築空間として扱うことで、土木的な力強さと光や土といった自然の柔らかさを併せ持った建築として魅力的な印象を与えている。蜂のためのインフラが、人間の目にどのように感じられるかということ、想像力をもって取り組み、建築の表現に落とし込むことができおり、設定から表現への道筋がはっきりと感じられる。

小野 龍人



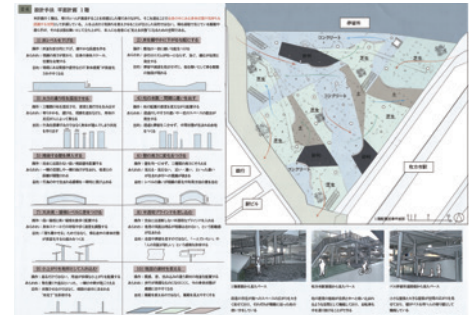
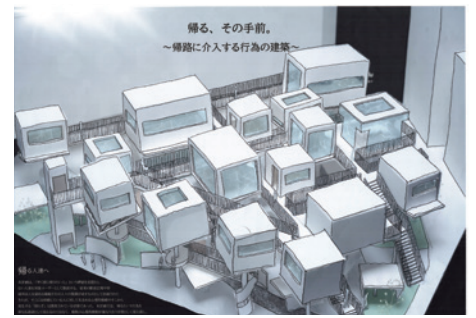
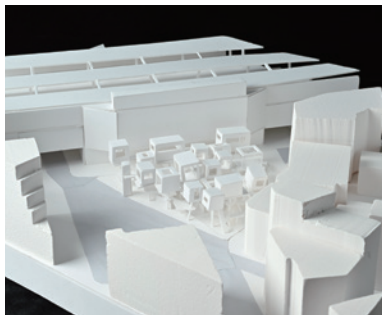
帰る、その手前。

～帰路に
介入する行為の建築～

梅原 聖大

駅前の広場にて、グランドレベルのオープンスペースと上部の商業施設を設計した提案。帰宅する人たちの細やかな行動パターンをリサーチにて大量に収集し、滞留と移動の間には実は様々なモードが存在することを発見。設計者はそれを「帰ることの奥深さ」と表現し、杓子定規に滞留 or 移動の二項対立とならないような細やかなデザインを、林立する柱とシェード、地面の舗装、柱周りの什器にて実現。人の行動のピオトープのような設計案である。

西倉 美祝



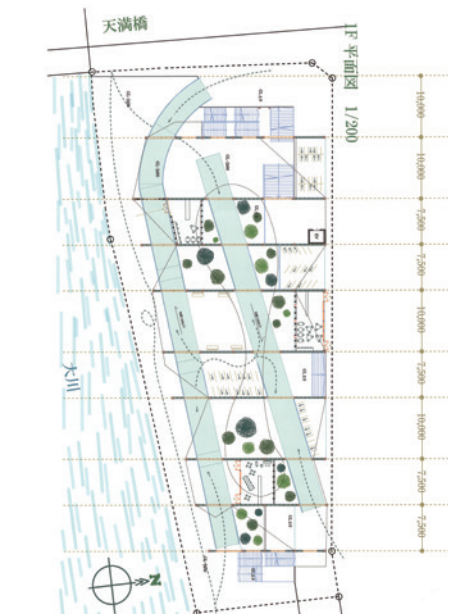
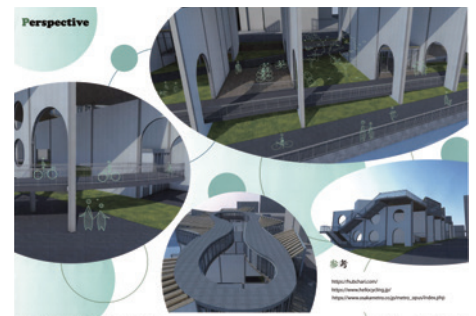
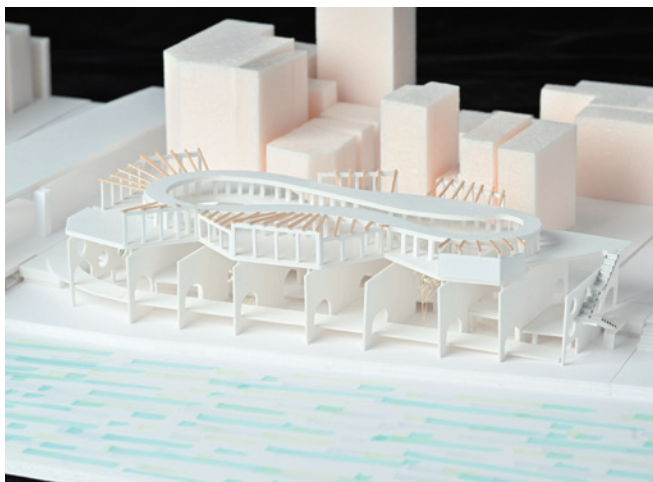
CHARIWAY

～自転車の
動員と再動員～

市川 凜平

自転車道と建築をセットで設計することで、周辺エリアのモビリティを抜本的に変化させる案。自転車利用者が多い一方、川に並行して伸びる上下2本の道を自転車で行き来できないという敷地周辺の問題点に着目し、敷地内で上下2本の道を自転車用のスロープで繋いだ。スロープは川に直交して建つ何枚もの壁を貫いており、壁の上に雲のように浮かぶスラブ(上に商業施設)の下を、風景のページをめくるように、自転車が抜けていく。

西倉 美祝



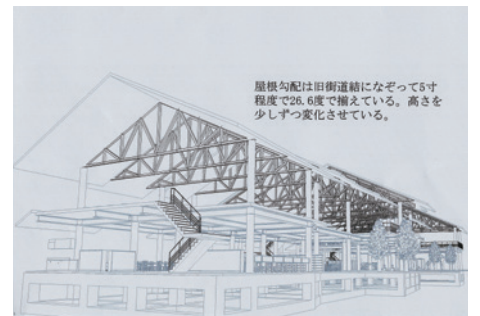
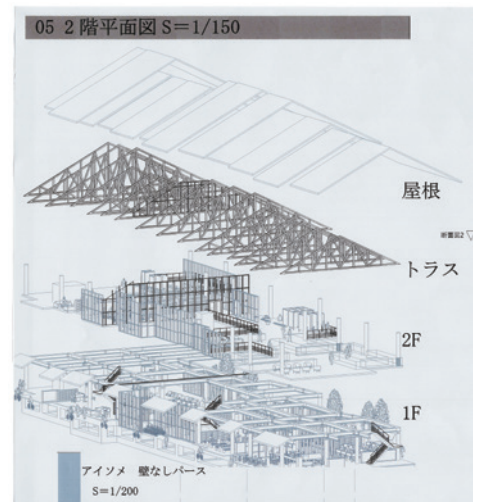
アーカイブス

コンテキストを読み解き、
コミュニティの場を形成する

木場 俊輔

枚方市駅北西側のすでに旧街道沿いらしい伝統的な街並みが失われている場所を敷地とするアーカイブ施設の提案である。旧街道に向けて分節された平入の切妻屋根の連続でファサードを形成し、既存の歴史資料館とは違った形で地域の歴史を繋いでいく計画となっている。旧街道が裏通りとなっている現状にむけて再び人の往来が回復することを期待しながら同時に、旧街道と反対の隣地境界側に新たな「裏通り」となる空気をデザインしている。再開発されていく周辺に先行して空気を計画することで、隣地も含めた周辺の未来に働きかけている射程の広い作品である。

武田 憲人

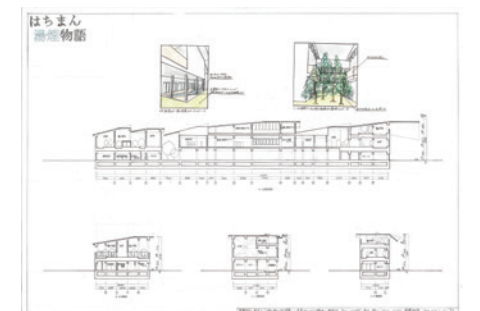
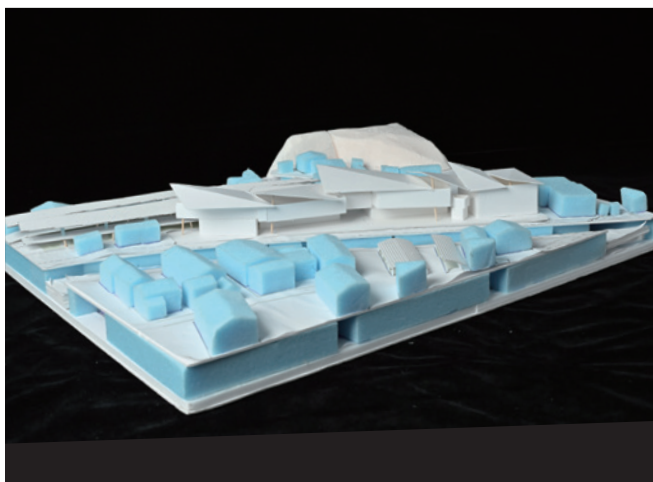


はちまん湯煙物語

森田 楓人

京阪八幡市駅に並行する細長い空地が敷地である。八幡宮を祭る男山と三川合流の水辺の景色に挟まれた場所に対し、ベッドタウンである地域の現状を踏まえ駅利用者が気軽に立ち寄れる温浴施設を中心とした複合施設を提案している。隣地側駅舎に対しメインのボリュームを持ち上げることで施設内からの南北の視線の抜けを確保し、同時に露天風呂のプライバシーを確保している。特徴的な屋根形状を持ち背景の山並みとの調和も保ちながらエリアのランドマークとして印象付けられる建築となった。密度の高い手書き図面とスケールの大きな模型によるプレゼンテーションも高く評価された。

武田 憲人



MUSIC ROAD

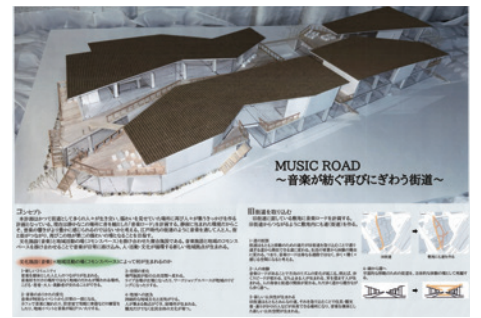
～音楽が紡ぐ
再びにぎわう街道～

後藤 桜希

京街道の宿場町 枚方宿の中心地、宗左の辻に接する敷地において、かすかに残る歴史的コンテクストを手がかりに、現代の街道を再編し、音楽と地域活動による文化拠点を構想した提案である。敷地内へ京街道を引き込み、周辺の小路と接続し、毛細血管のように広がる立体的な街道を形成。その動線上に音楽に関わるプログラムを配置し、街路と建築内部空間を連続的に編み上げている。立体街路を歩き交う人々の活動が具体的に想像できる点が本提案の魅力である。

空間構想の強度に対して、まちの活気をより明確に伝える表現へと深化することを期待したい。

西井 洋介

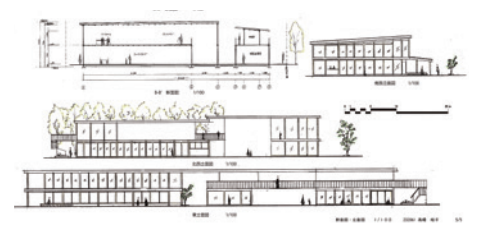
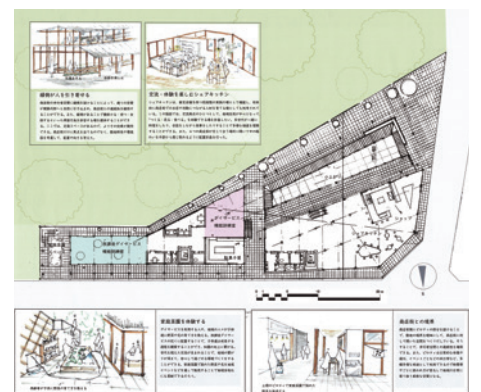
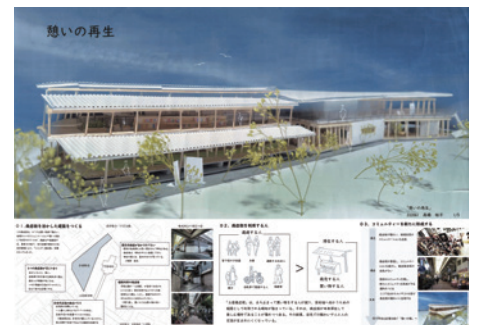
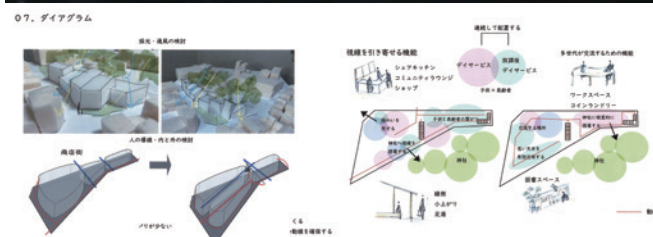


憩いの再生

高橋 桜子

地域の多世代の日常的な営みを受け止めることで、商店街に持続的な滞留と活動を生み出そうとする提案である。シェアキッチンやコインランドリー、放課後デイサービス、駄菓子屋といった身近な機能を、縁側や路地、ピロティといった半屋外空間によって編み合わせ、既存商店街のみならず南東側の守居神社へと関係性を拡張している。木造軸組とガラスによる軽やかな構成は、内部の活動と周辺の営みを重ね合わせ、新たな都市の風景を生み出している。定石的な提案であるが、思考を着実に積み重ね、建築として丁寧に結実させた点を高く評価したい。周辺環境との関係に関して、より深い思考と表現を期待したい。

西井 洋介



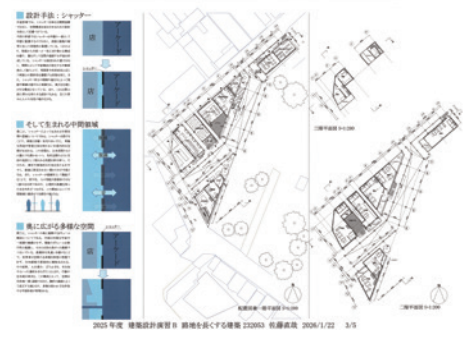
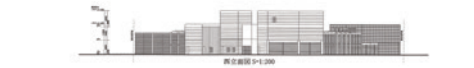
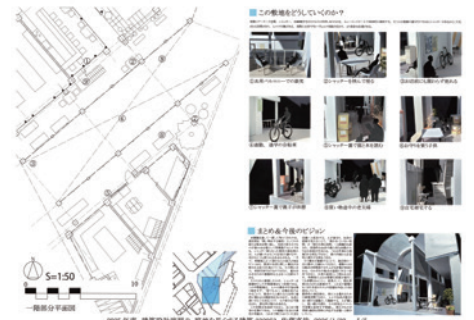
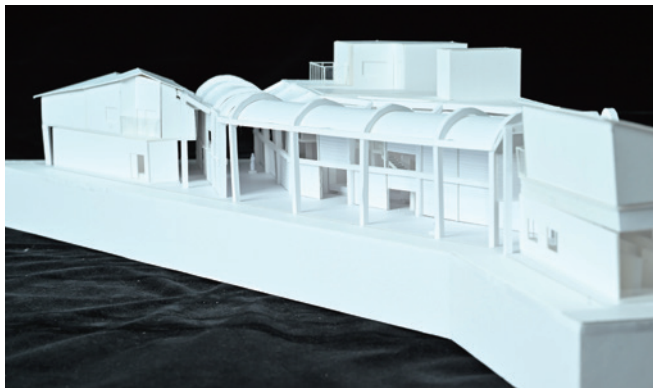
路地を長くする建築

～この街には
既に居場所がある～

佐藤 直哉

古くからの商店街を「人の居場所がある場」と捉え、シャッターを衰退の象徴ではなく、そこに生まれる独特の居方の可能性として読み替えた点が秀逸である。既存の意匠を反復し境界を曖昧化することで、店舗とアーケード双方からの滲み出しを促している。単純な活性化ではない未来像を示し、少子高齢化社会へと問いを返す意欲的な提案となっている。1/30 模型では人物姿勢や小物のリアリティから鋭い観察眼がうかがえる。

白須 寛規

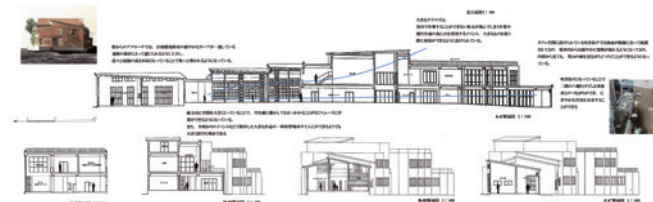
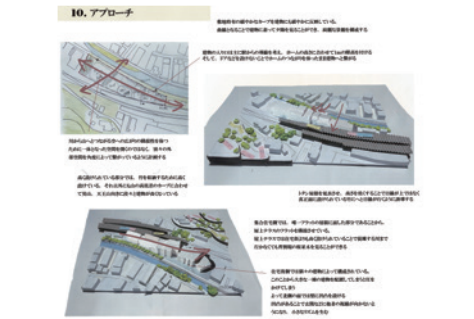
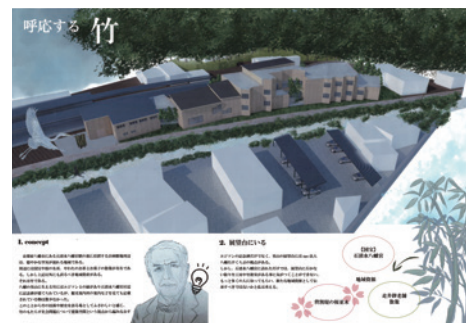
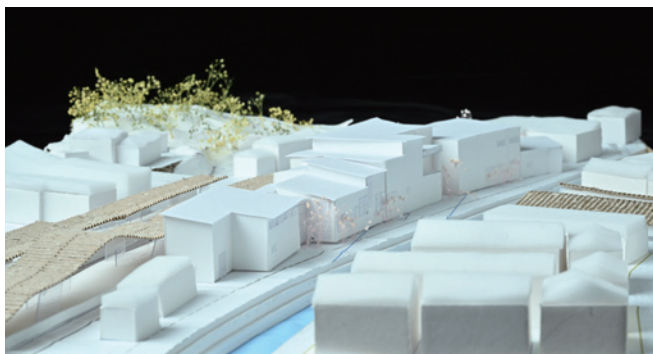


呼応する竹

立花 遥香

対象地域の調査で見いだした魅力を起点に、そこから広がる活動を明確に構想できている点が評価できる。圧倒的なスタディの量を背景に、想定した各場面を丁寧にかたちへ落とし込んでいる。その積み重ねが形態の豊かさとして現れつつ、動線は流れるように自然である。会話の気配まで感じられるほど場面が緻密に描かれており、線路沿いの施設として周辺に溶け込んでいる。日常の延長として使われる姿を、朗らかな活気とともに示した。

白須 寛規



3

年生前期

| 担当教員 |

専任

小林健治

非常勤講師

北條豊和

水上和哉

矢田朝士

山口尚之

| STAFF |

Kenji KOBAYASHI

Toyokazu HOJO

Kazuya MIZUKAMI

Asashi YADA

Naoyuki YAMAGUCHI

課題

学校の再構築

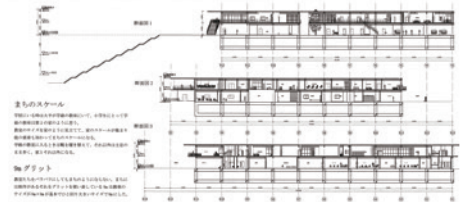
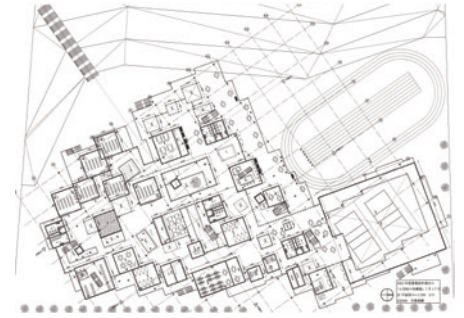
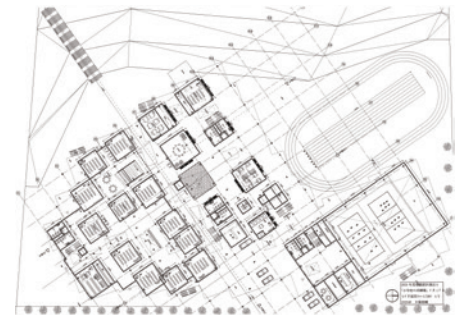
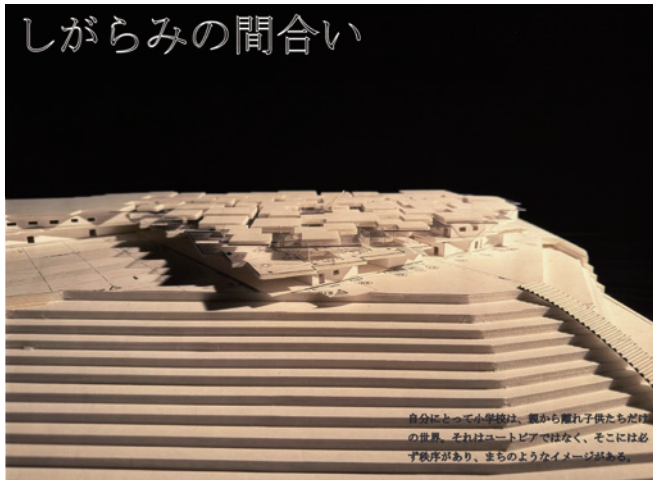
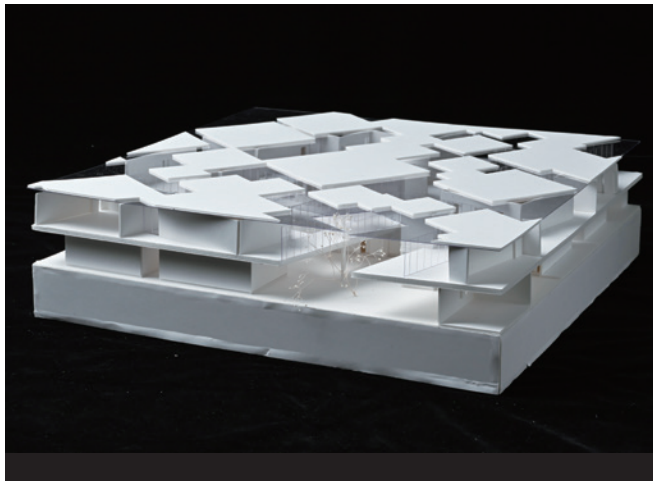
概要 いま「教育」には大きな変化が起きている。だが、その方向は一樣ではない。その社会背景を課題の出発点とし、課題前半では、自身が通っていた学校の記憶、地域で気になる風景などに対して環境行動学的なワークに取り組み、グループでの分析を通じて、目指すべき学校像を示す。課題後半では、グループで示した学校像を実現する学校空間を個人で計画する。敷地は枚方市の高台に位置し、20m 以上の高低差を有する。既存の空間の分析から導き出したイメージを再構築し、建築（実態）として提案する課題である。

しがらみの間合い

木場 俊輔

本計画は異なる複数の領域を設定し、その「間」をどのように生み出すのかという点について、その操作を仮説・実証するという、いわば空間実験にトライしたような作品である。街区の軸線を意識し、鳥瞰的に河岸段丘端部の敷地特性を活かし、外観的にも内部の空間的可能性を滲ませている。屋根レベルを基準として架構がねじれる考え方は層が増えるごとに調整事項が累進的に増大するが、それにより生まれ来る空間的豊かさを信じ敢えてチャレンジし続けたことが大変素晴らしい。今後の設計者人生もこのような姿勢で建築に邁進してもらいたい。

北條 豊和



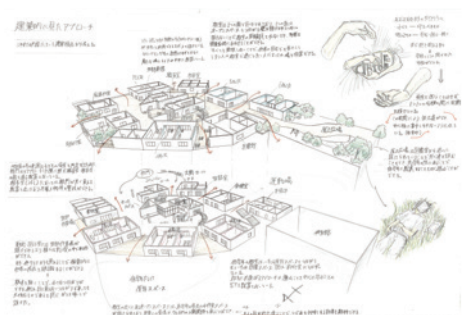
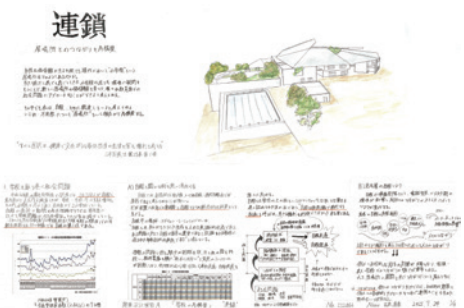
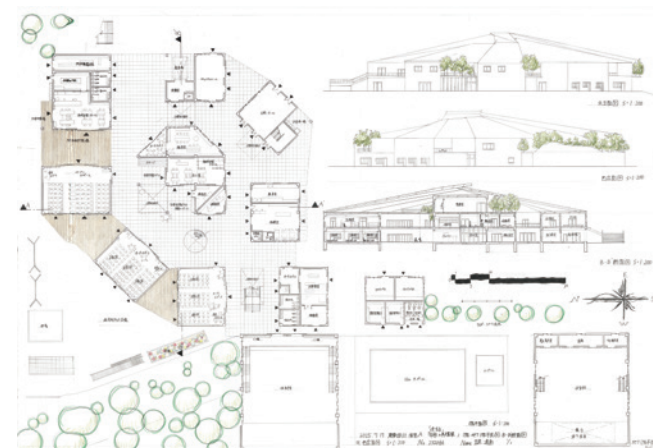
連鎖

居場所とのつながりを再構築

立花 遥香

教育や社会が抱える課題に対して「居場所」をテーマに掲げ、学校を再構築する提案である。教室（1学年3クラス）をユニットとし、角度を変えながら囲み配置することで、空間に適度な抜けを確保し、心地よいスケール感をもつ空間を計画している。計画全体としては、平面的な検討に終始している印象が強く、高さ方向、特に開口部のデザインに関しては検討の余地が感じられるものの、紙面と模型から設計者の真剣さが伝わってくる力作である。

小林 健治

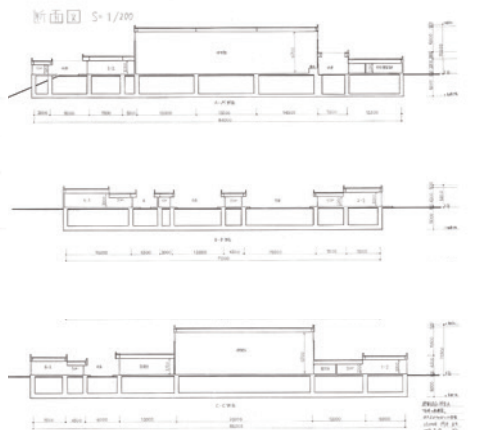
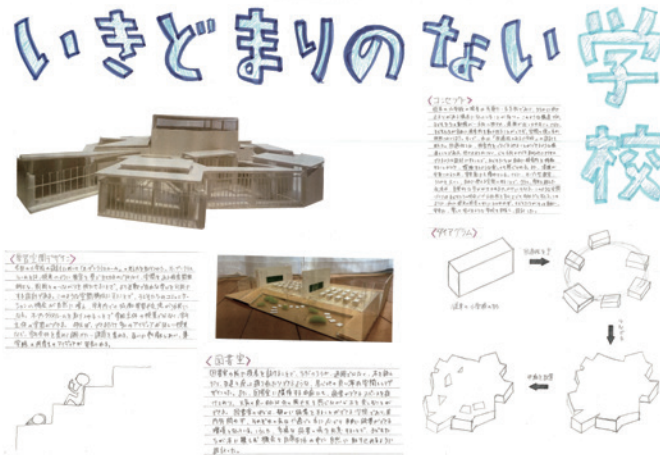
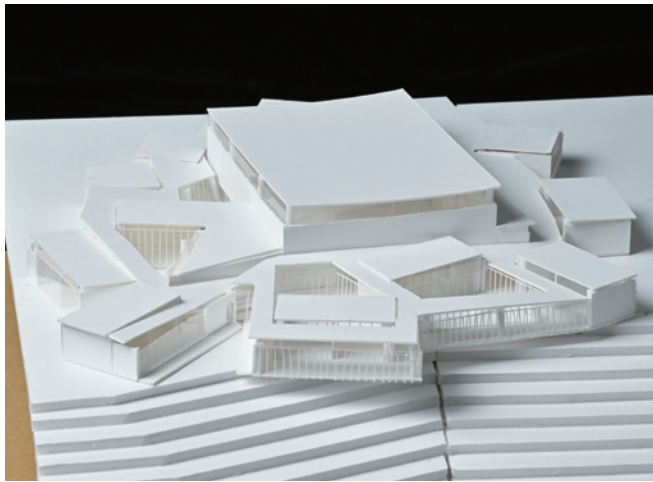


いきどまりのない学校

岡本 万生

体育館を中心に据え周りに諸室を円環状に配し一つの群造形としてまとめあげている。それはいわば中心に教会と広場をもつイタリアの中世の小さな街のようだ。広場として開放された体育館はそこで生まれる様々なアクティビティを想起させ、学年ごとに設けられた中庭や変化に富む廊下が、街の小さな広場や豊かな街路のごとく多様な居場所を補完している。一方で斜面利用の空間的提案も設けられるものの、周辺との関係が希薄に感じる。

山口 尚之

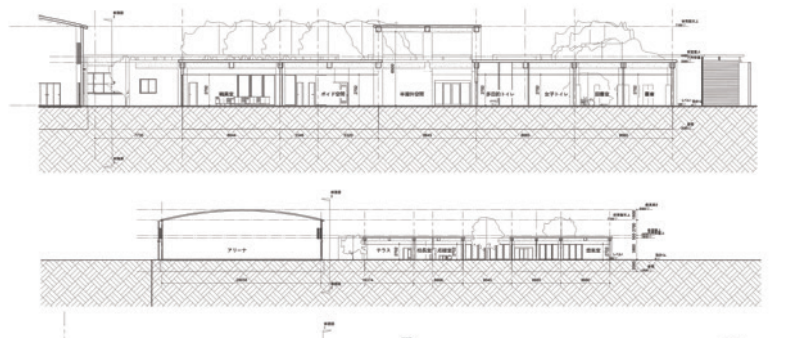
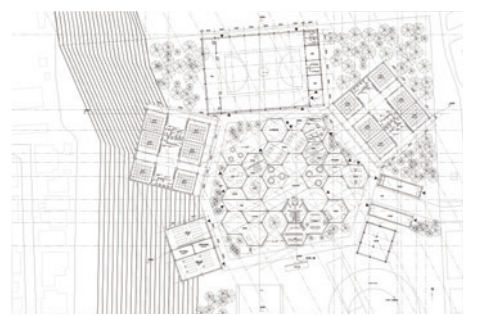
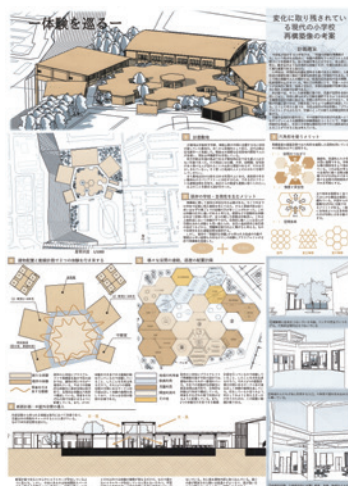


体験を巡る

佐藤 直哉

「児童の体験の再構築」をコンセプトとし、空間の能動性と受動性というテーマに取り組んだ、意欲的な提案である。中央の「能動的な空間」は多方向のつながりや回遊性を意識して六角形を採用し、外側の「受動的な空間」はあえて従来型の画一的な教室配置を採用することで、その双方の空間により、豊かな体験を生み出すことが意図されている。2つの異なる空間の「間」がもう少し丁寧にデザインされていると、尚魅力的な提案になったと思われる。大変興味深いテーマであり、ぜひ今後の設計課題においても今回の学びを活かして頂きたい。

水上 和哉



はみだして、なじむ。

山本 和香奈

「教室と廊下」「屋内と屋外」という対立軸を掲げ、学校の再構築に取り組んだ提案である。教室群で建物全体を囲みながら、上下階の外壁線とスラブ端を一致させないことで、教室と廊下、屋内と屋外の境界があいまいな空間をつくりだしていることが模型でよく表現されている。その一方、L型に向かい合う教室（1学年2クラス）の間をオープンスペースを筆頭に、図面表現からは提案内容が表現されていない点が残念である。図面表現に対するこだわりと敷地全体や周辺に対する提案を今後期待したい。

小林 健治



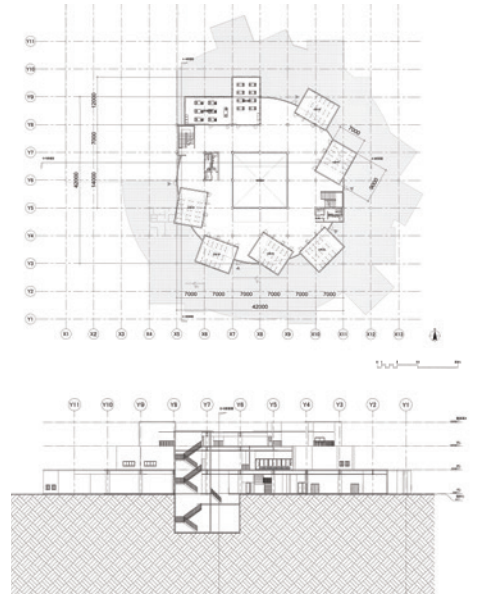
1. 「空間の再構築」

この小学校建築では、「空間の再構築」をテーマに「教室と廊下」「屋内と屋外」の対立軸を掲げ、学校の再構築を提案しました。また、学校の教育の場を再構築し、その中心となる空間についてアプローチしました。

従来の学校では、教室と廊下は別々の空間として存在していましたが、この提案では、教室と廊下を一体化し、一つの空間として扱います。これにより、教室と廊下の境界があいまいになり、開放的な空間が生まれます。

また、屋内と屋外の境界を曖昧にするために、外壁線とスラブ端を一致させないことで、室内外の空間が連続的に感じられるようになります。

このように、空間の再構築を通じて、学校の教育の場を再構築し、子どもたちが学びやすい環境を提供することを目的としています。



2. 提案する学校の在り方

「教室と廊下」の対立軸を掲げ、学校の再構築を提案しました。また、学校の教育の場を再構築し、その中心となる空間についてアプローチしました。

このように、空間の再構築を通じて、学校の教育の場を再構築し、子どもたちが学びやすい環境を提供することを目的としています。

3. 「教室と廊下」の対立軸

教室と廊下を一体化し、一つの空間として扱います。これにより、教室と廊下の境界があいまいになり、開放的な空間が生まれます。

4. 建築のアイディア

外壁線とスラブ端を一致させないことで、室内外の空間が連続的に感じられるようになります。

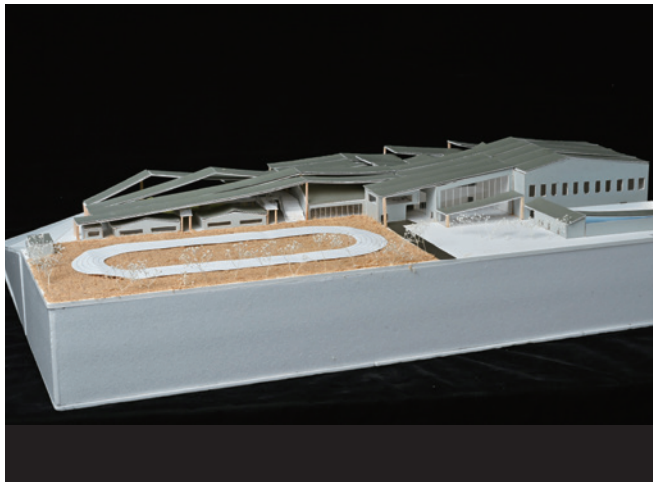
学びの起こり

～原体験が生み出す
新たな形様～

梅原 聖大

「学校の再構築」に対して建築空間の体験による解を設定し、切妻屋根とその下に分節配置された建物によりリズム感と変化のある多様な場所が用意されている。建築そのものが持つ可能性を追求し子供達に楽しさを提供しようとする姿勢に好感が持てる。ただし、建物群が整然と配置された建築の集合体のみで完結している空間構成は体験空間としての広がり少なく勿体無い。また、建物と斜面との関係性がなく、平地を分断する配置計画は再考すべきであろう。

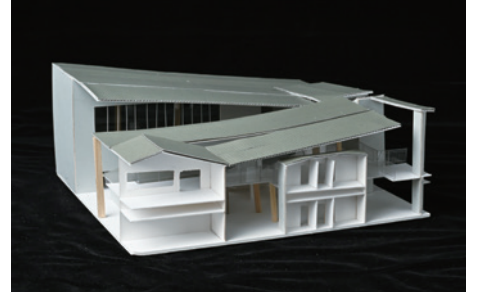
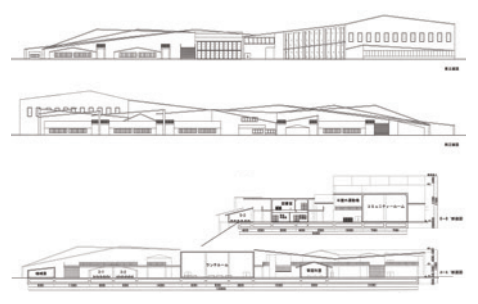
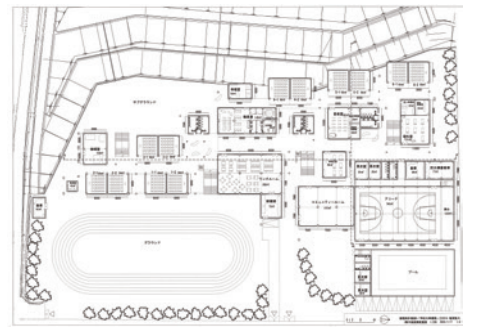
矢田 朝士



学びの起こり
～原体験が生み出す新たな形様～

この提案では、学校の再構築を通じて、子どもたちが学びやすい環境を提供することを目的としています。また、学校の教育の場を再構築し、その中心となる空間についてアプローチしました。

このように、空間の再構築を通じて、学校の教育の場を再構築し、子どもたちが学びやすい環境を提供することを目的としています。



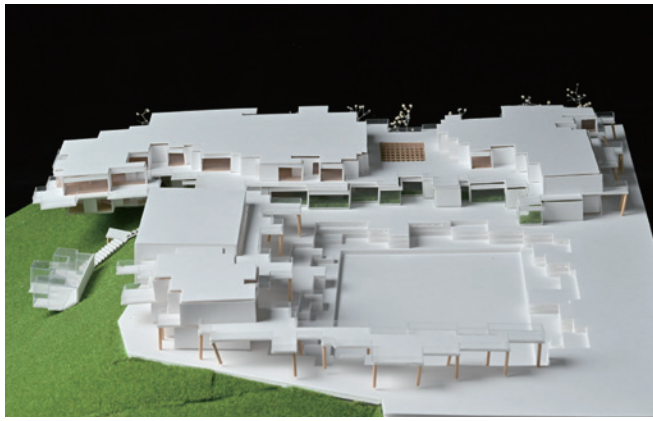
凹凸

～小学校の再構築～

内田 章太郎

とても楽しい空間の計画である。空間構成において、平面・断面双方の凹凸によって空間にリズムと変化をつくりだし、従来の「建物」と「外構」の別々になりがちな風景に一体感をもたしている。校舎のコの字型配置と観客席として使えるグラウンドがランドスケープとして上手く計画され、正門側との関係性においても素晴らしい。ただ、教室周りの計画が雑であること、斜面地へ飛び出した建物が計画との整合がないこと、グラウンドからの眺望があまり考慮されなかったことが残念である。

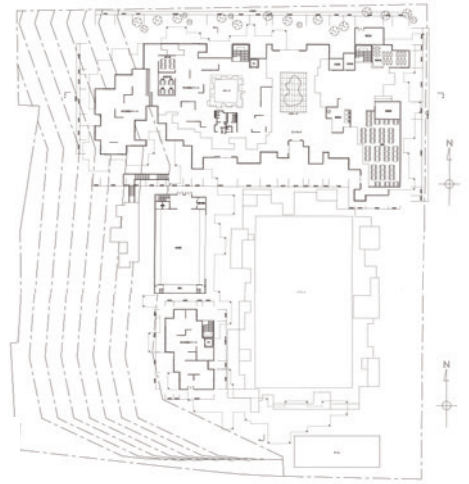
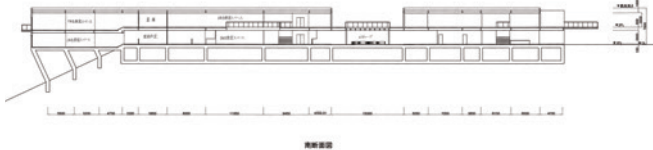
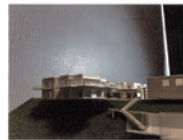
矢田 朝士



斜面の活用



今回の小学校の敷地には、大きな斜面があるので何か利用できないかどうかが考える。考えた結果、温室兼展望室を設けることにした。まずなぜ、温室兼展望室にしたかという斜面から見える景色を教室からだけでなく見ることが出来るスペースがあれば生徒の記憶に残ると思うからである。また、小学校ではアサガオなどの植物を育てるので、育てるなら専用の施設で景色が良い場所で育てることで水やりを忘れることが少なくなったり、友達と話しながら植物に対して関心が生まれる。



ダイアグラム



部分模型



デザインが直線的なので建物の外側と内側の境界線を柔らかくするため、窓の配置を設計。まん丸な形、細い、長い、短い、大きい、小さいが生まれること。ただ採光を受ける空間から採光を受けるためのスペースを必要とする空間になっている。また、床材を木材にすることでより自然を感じられるようにした。

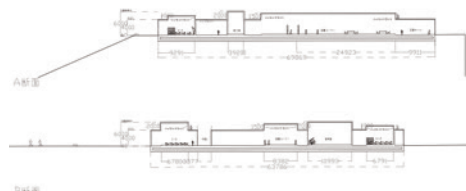
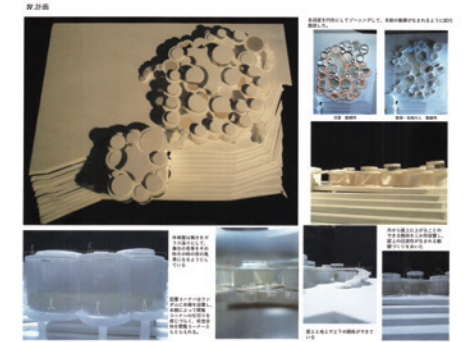
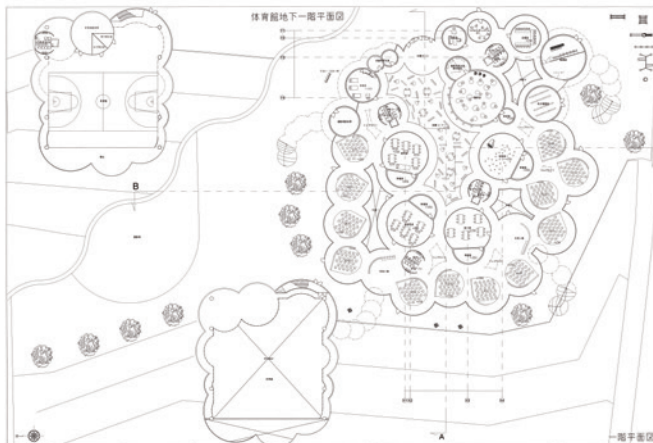
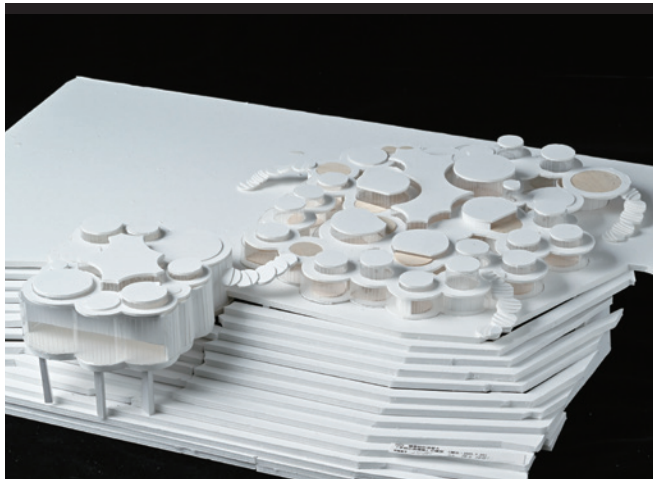
平日以外の休日の小学校の活用方法について考える。学んだことをアウトプットするステージを創発的なステージとして活用することで地域のみんなとの交流が生まれて地域の中心に存在するよう小学校になるようにデザインする。ステージ部分はふきぬけにすることで見れるスペースを狭くするとより劇場に似た空間を吹き抜けで後述する。

Bubble school

藤井 晴樹

建築の再構築は終わりなくまたその形も変化していくという着目点で「泡」をイメージしたが、エスキースが進むにつれスタディの難易度が高まっていく現象に本人も驚いたことであろう。リサーチを徹底的に行うなどそのプロセスに目を見張るものがあるが、最も評価すべきはエスキースに臨む姿勢である。小学校として動線やゾーニングの基本を押さえた上で、断面検討を入念に行ったことがその空間に表れている。建物計画に注力するあまり敷地全体を一体的に建築し切れなかった点がやや残念であるが、仮に奨励賞があるならば本作品にそれを与えたい。

北條 豊和





年生後期

第1課題

ピロティとテラスのあるコミュニティ・ライブラリー

概要 市民に開かれた公共施設としての図書館のあり方を再考し、そこに包摂される多様なアクティビティにふさわしい空間および家具を提案する課題である。寝屋川市駅から続く大通りと公園に挟まれた、多くの人々の往来・滞在が見込まれる敷地に、市民が気軽に立ち寄り、心地よく過ごす複合公共施設「コミュニティ・ライブラリー」を計画する。さまざまな目的で幅広い年齢層の市民が訪れる、本が並んでいる「だけ」の場所ではない、市民に開かれた屋内外のパブリックスペース（都市の公共空間）の創造を目指す。

第2課題

まちの美術館

吹き抜けのある市民のためのアートパーク

概要 特徴的な常設展示品にふさわしい展示空間を提案し、加えてイベントを行う企画展示、および市民のワークショップや作品発表の場をあわせもつ美術館を提案する課題である。

敷地の特徴を踏まえつつ、市民が気軽に、そして身近にアートや美術に触れ合い、楽しむことができる「アートパーク」を計画する。美術館内の展示空間はもちろんのこと、市民にとって魅力的な屋内外のパブリックスペース（都市の公共空間）のあり方が問われる。

| 担当教員 |

専任

加嶋章博

小林健治

非常勤講師

井戸健治

貴志泰正

岸下真理

富田祐一

藤田慶

門間香奈子

好川拓

| STAFF |

Akihiro KASHIMA

Kenji KOBAYASHI

Kenji IDO

Taisei KISHI

Shinri KISHISHITA

Yuichi TOMITA

Kei FUJITA

Kanako MONMA

Taku YOSHIKAWA

五段テラス美術館

中田 隼登

当作品は地下を深く掘り下げ、建築ヴォリュームの半分近くを地中に配置し、地上階の建築ヴォリュームの1~2階部分を4層に分節し4階建てに見せるとともに、階段状にセットバックすることで、景観配慮が重要な中之島の敷地に対して、建築ヴォリュームの低減に効果を発揮している。屋上は市民に開かれた階段状の広場となっており、建築全体が市民のアートパークとしての機能も併せ持つ設えは好感が持てる。建築計画の巧みさと共に、図面も丁寧に書き込まれており、完成度の高い作品となっている。

富田 祐一

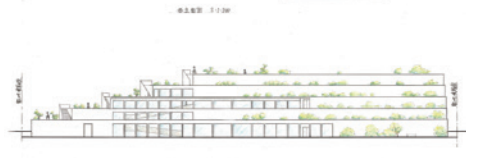


五段テラス美術館



項目	数値	単位	備考
地上階	17,120	㎡	1階
地下階	17,120	㎡	2階
合計	34,240	㎡	

この建築は、中之島の歴史と文化を継承し、市民の芸術的創造性を育む、建築と自然の調和のとれた空間を創出する。建築の中心となるのは、市民の交流と創造性を促すためのオープンスペースである。このオープンスペースは、市民の交流と創造性を促すためのオープンスペースである。このオープンスペースは、市民の交流と創造性を促すためのオープンスペースである。



Built Through

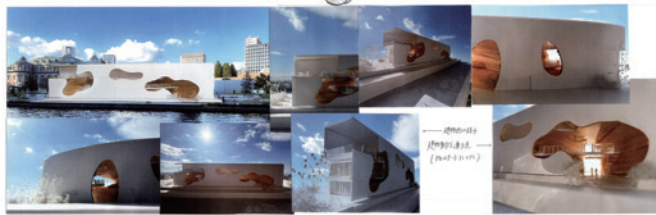
伊藤 真衣

着想の段階では実際に利用できる空間とするためには課題が多かったが、それを毎週の地道な努力の積み重ねで着実にクリアしていったことを高く評価したい。インパクトのあるキャッチーな外観は視覚的な効果のみならず、ボリュームを貫く孔のなかに多様で魅力的な空間を作り出し、敷地の南北を繋げることに成功している。すでに備えている自身が設計したいものを実現する意志の強さに、今後その場所にふさわしい建築をより深く読み取る力が加われば、さらに素晴らしい設計者になれると思う。

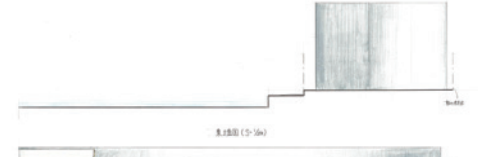
貴志 泰正



Built Through



項目	数値	単位	備考
地上階	17,120	㎡	1階
地下階	17,120	㎡	2階
合計	34,240	㎡	



The Open-Ended Museum

—非完結な美術館—

久保 心音

様々な大きさの箱を敷地いっぱいランダムに配置し、それらを曲線状のガラスヴォリュームで繋いだ計画である。ガラス張り、フレーム構成、ホワイトキューブなど箱の性格は多様で、交差する構成も見られるが、乱雑になりがちな要素を意外にも端正にまとめており好感が持てる。曲線的な動線に沿って移動することで、各オブジェクトに出入りしながら内外が交互に立ち現れ、多様な空間体験を生み出す魅力的な提案となっている。

井戸 健治



The Open-Ended Museum
—非完結な美術館—

設計概要
本美術館は、美術館としての機能と地域として市民の中心となることとを両立させる「非完結な美術館」として設計した。敷地いっぱいにランダムに配置された様々な大きさの「箱」を、曲線的なガラスヴォリュームで繋いだ計画である。ガラス張り、フレーム構成、ホワイトキューブなど箱の性格は多様で、交差する構成も見られるが、乱雑になりがちな要素を意外にも端正にまとめており好感が持てる。曲線的な動線に沿って移動することで、各オブジェクトに出入りしながら内外が交互に立ち現れ、多様な空間体験を生み出す魅力的な提案となっている。

全体配置図 S=1:600

階	面積 (㎡)	床高 (m)	柱間隔 (m)	柱径 (mm)
主階	178.5	178.5	—	—
2階	261.5	188.0	180.0	180.0
1階	240.2	210.0	200.0	200.0
地下1階	240.2	174.0	400.0	400.0

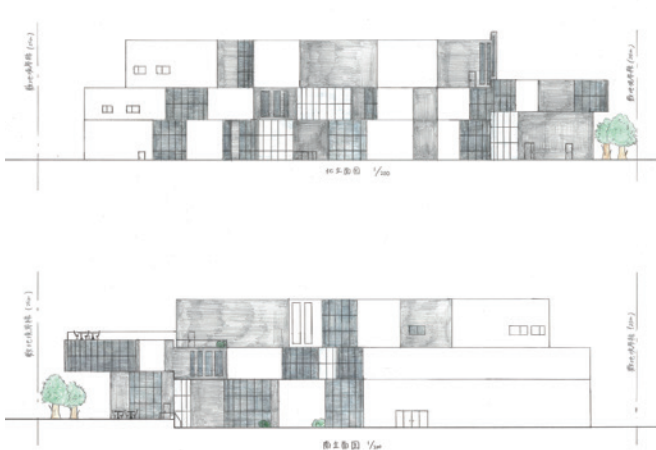


DAILY ART

阪野 妃菜

敷地に対して45度傾けたグリッド上に平面を雁行させ、各階をずらして重ねた案。雁行した平面構成は、各所に多様な表情をもたらしながら、内外に溜まりの空間を生みだし、ポケットパークやテラス、アプローチ空間等、市民の居場所や美術鑑賞にふさわしいスケールの場を提供している。内部空間は、シークエンスを感じながら展示を巡る魅力を持っている。それを活かした内部の設計や構造計画の検討ができること、さらに良い提案となると考えられる。

門間 香奈子



設計趣意
本美術館では、敷地いっぱいにランダムに配置された様々な大きさの「箱」を、曲線的なガラスヴォリュームで繋いだ計画である。ガラス張り、フレーム構成、ホワイトキューブなど箱の性格は多様で、交差する構成も見られるが、乱雑になりがちな要素を意外にも端正にまとめており好感が持てる。曲線的な動線に沿って移動することで、各オブジェクトに出入りしながら内外が交互に立ち現れ、多様な空間体験を生み出す魅力的な提案となっている。

この建物は、市民の居場所や美術鑑賞にふさわしいスケールの場を提供している。内部空間は、シークエンスを感じながら展示を巡る魅力を持っている。それを活かした内部の設計や構造計画の検討ができること、さらに良い提案となると考えられる。

波に入る

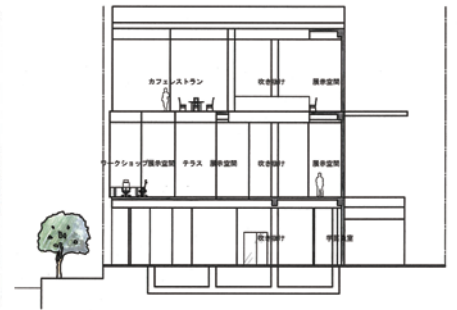
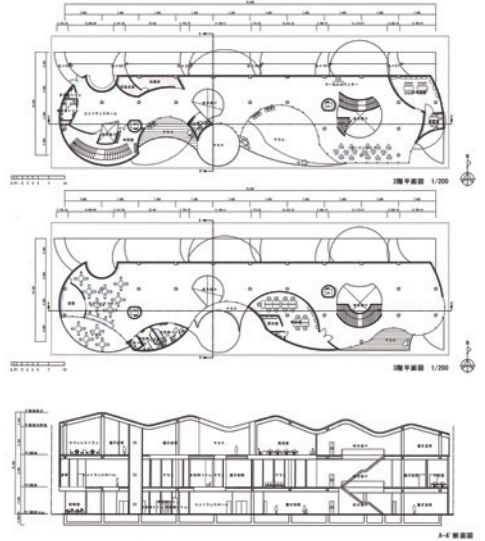
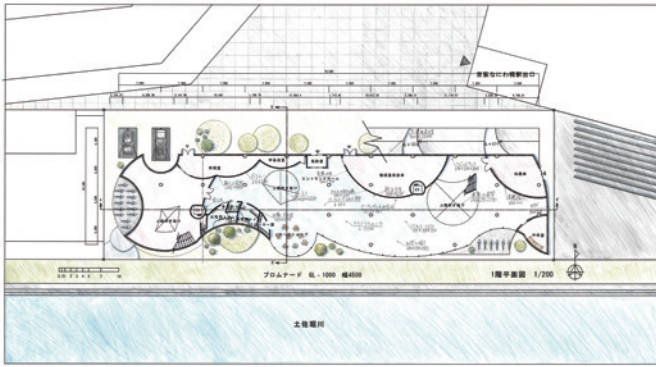
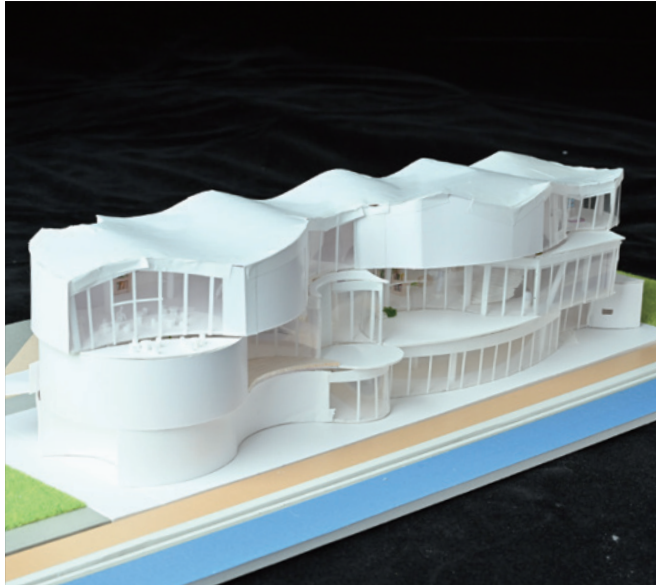
波江 七海

波打つような外壁がずれながら三層に重なることで、ピロティやテラスが生まれ、内外に多くの居場所をつくり出す建築です。円弧を継ぎ合わせることで生まれる連続と切断のリズムは、流れや溜まり、意識の引っかかりといった感覚を来訪者に与えており、この案の大きな魅力となっています。

内部に円弧状の吹き抜けを設け、空間にリズムを与えている点も評価できますが、直線的なスロープを用いず、ファサード全体を泡（波）のような形態としていれば、中央の吹き抜けに頼らず成立した可能性も考えられます。また本案では内部空間の提示が重要であり、内観パースや動画、模型写真があれば、提案の説得力はさらに高まることでしょう。

外部環境への接続を含め動線計画には検討の余地があるものの、スタディ模型を用いた丁寧な検討や、平面・断面ともに波形の屋根を作り切った点、図面表現や文章から、建築をより良くするために時間をかけた姿勢が強く伝わってくる力作で、素晴らしい案だと思います。

藤田 慶



B-B' 断面図

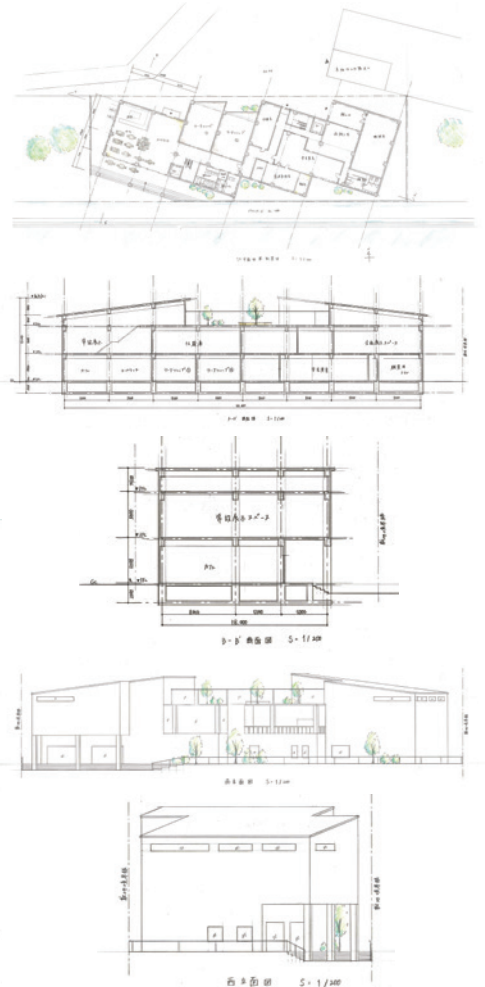
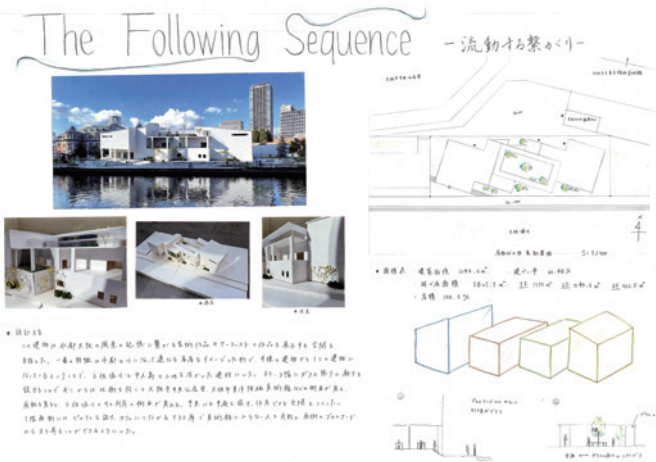
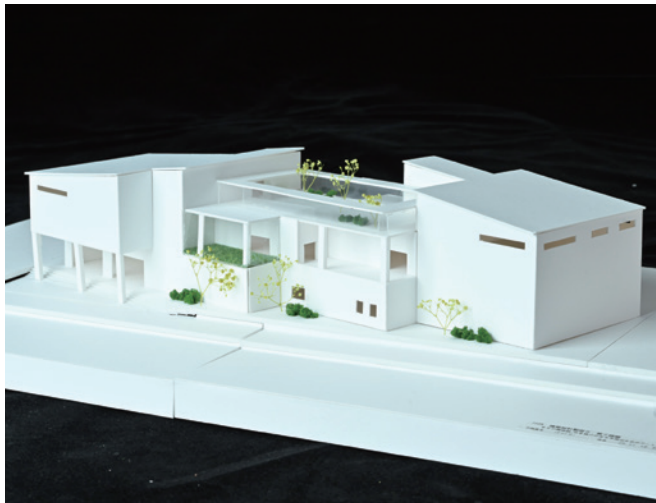
The Following Sequence

一流動する繋がりー

森行 珠紀

建物全体を家屋をイメージした4つのボリュームに分節した案。建物の両端に展示室を配し来館者はその間を行き来することで多様な体験ができる計画となっている。やや力技ではあるが動線計画の決定的な破綻は回避できており、建物内での来館者の動線が建物外観の佇まいに現れているところが魅力的である。2階に設けられた屋外展示や屋上の中庭を囲むガラスの回廊などアートパーク的な要素も押さえ、まとまりある計画となっている。

好川 拓

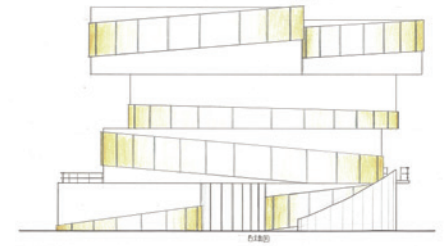
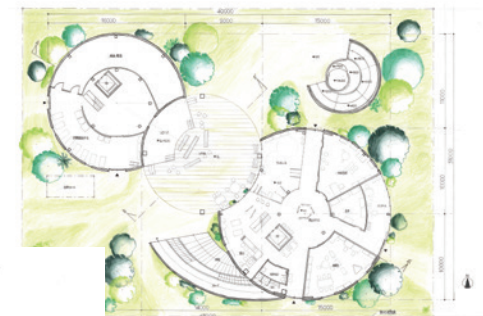
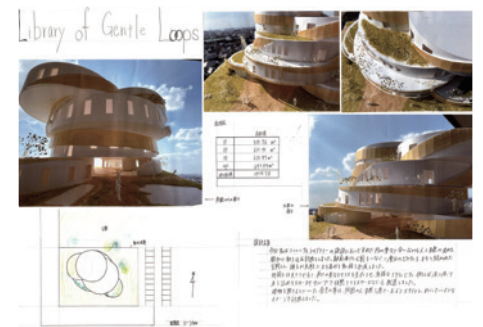
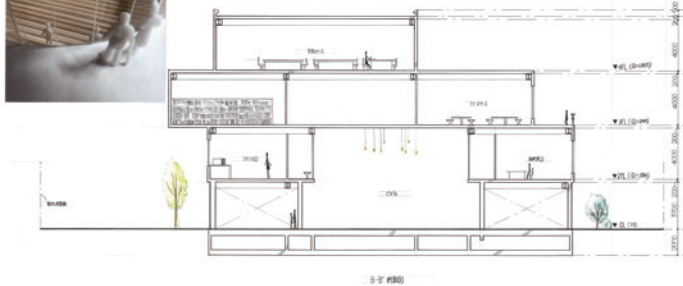


Library of Gentle Loops

伊藤 真衣

円は自己完結した強い形である。その円を離し、ずらし、重ねることで、強さを保ちながらも多中心で周囲に開かれた建築の提案に成功している。1階平面図では、外構のテラスや階段、植栽を、同じ円のモチーフで等価に扱い、敷地全体を設計することで、街との境界を魅力的なものにしている。また、内部空間においても円を活かしたいくつかの提案がなされており、毎週のエスキスに真摯に取り組み、難易度の高い設計に果敢に挑戦した秀作である。

門間 香奈子

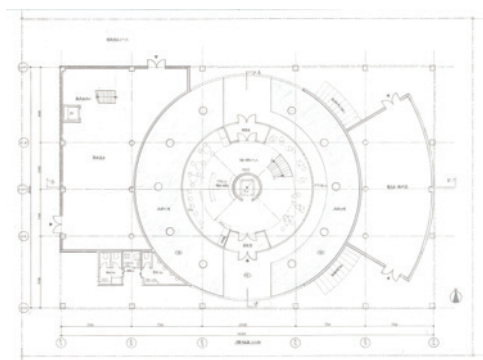
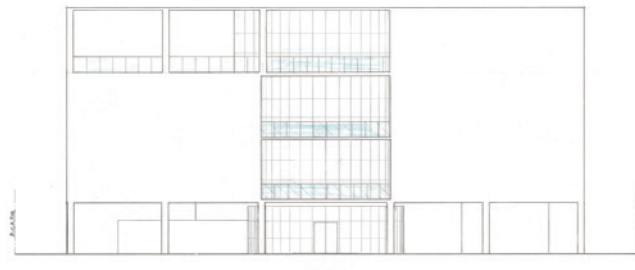


LOOP

呉 世根

シンプルな箱型ボリュームの中心に縦動線（階段とエレベーター）を抱き込んだ円筒空間が据えられており、その空間が1階の水盤のあるピロティーや各階のテラスと内部空間を繋ぐ役割を果たしている。円形を用いたプランニングや、レベル差を用いた3階・4階の断面構成も巧みであり、内外共に立体的で豊かな空間が計画された良案である。少し内向きな建築に見えるので、周辺環境との関係性にも想いを巡らせると、より良い建築になるのではないだろうか。

岸下 真理



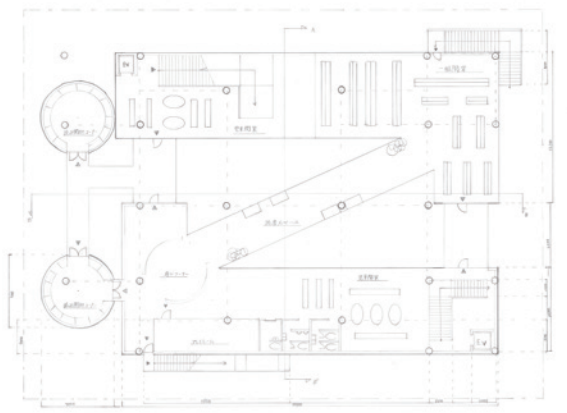
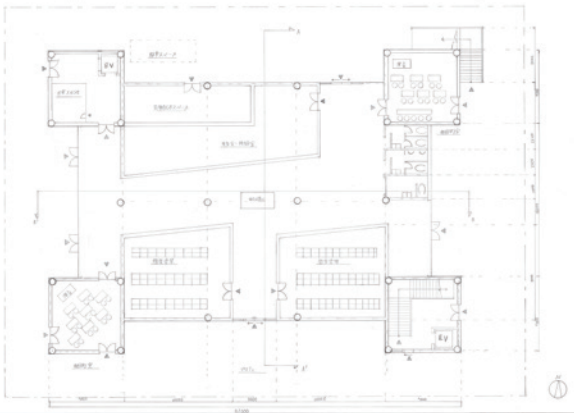
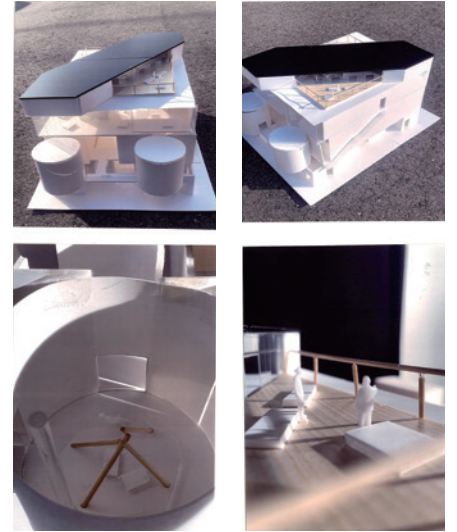
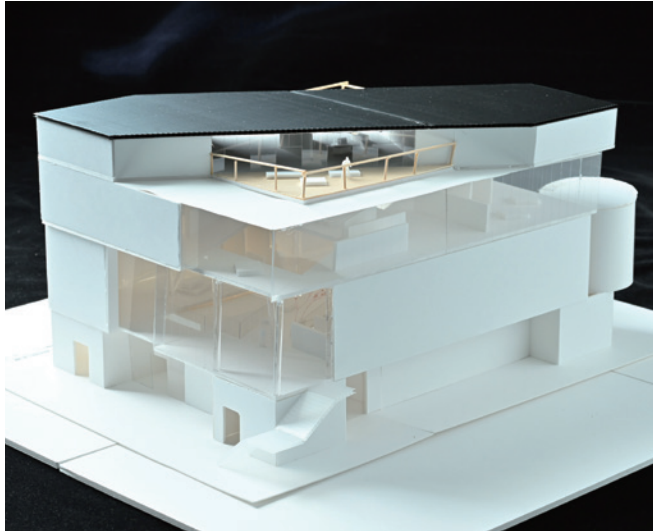
Layer Shift

川端 晃生

タイトルの“Layer Shift”は、3D プリントの世界では否定的な意味で用いられる不具合のようなのだが、レイヤーのズレを肯定的に捉え、各レイヤー（階）で全く異なる平面計画が、変化のある外観と多様な空間体験を生み出すことに成功している秀作である。

強いて言えば、外観の全体像が大きなボリュームに見えなくもないため、開口部の設け方や素材の切り替え方などで、動きのある軽やかな内部空間が外部にもより表れる工夫ができれば、さらに優れた計画になるように思われる。

貴志 泰正

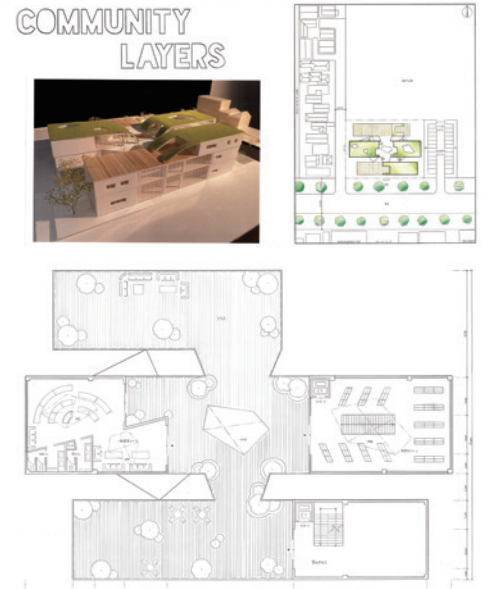
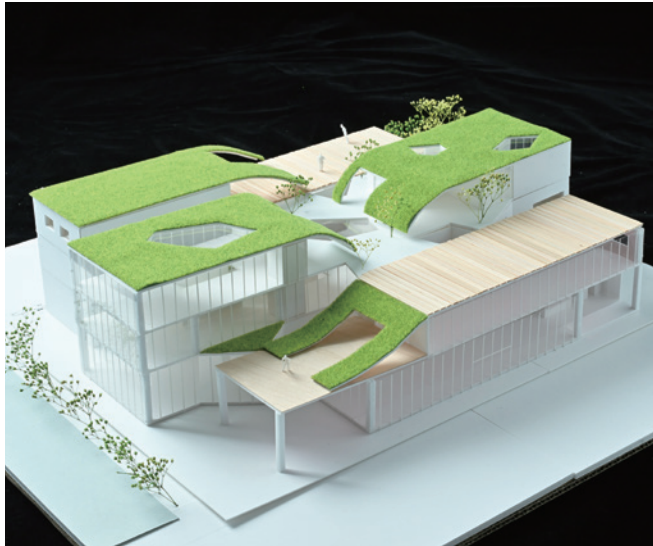


COMMUNITY LAYERS

久保 心音

当作品は建築ヴォリュームを大きく3棟に分け、平行に並べて屋根の高さを変化させることで、建築ヴォリュームの抑制を行い、低層建築の多い周辺環境への影響を低減させている。プランニングにおいてもこの形態を活かした計画を行っており、個性的な建築形態と合わせることに成功している。改善点としては、当初の外観デザインは大地がめくり上がるイメージの案であったが、プランを納める段階でそのデザインが希薄になってしまっている。今後は外観デザインとプランニングとの整合性に留意した設計を意識してもらうことで、より良い作品ができると考えます。

富田 祐一



南側立面図

まちのリビング

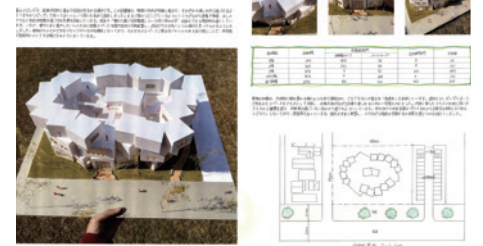
中村 綾乃

各々にキャラクターを持つ多数のキューブを多方向に積み上げた明快な構成が深い。平面図からは、キューブのズレによって生まれた小さなピロティやテラスに居場所が確保されていることが読み取れる。各キューブに設けられた窓は、大きさ・形状ともに施設的というより住宅のアイコン的な窓となっており、内部空間のアットホームな雰囲気形成に寄与している。本棚やデスクといった家具も、場所ごとに一つずつ異なる形状が考えられている点が素晴らしい。階高や天井高さなど断面的なアイデアの追加や、リビングのように人々が過ごす様子や風景をパースで示すことで、さらに説得力のある案になると思うが、総じてデザイン密度と完成度の高い作品である。

藤田 慶



まちのリビング



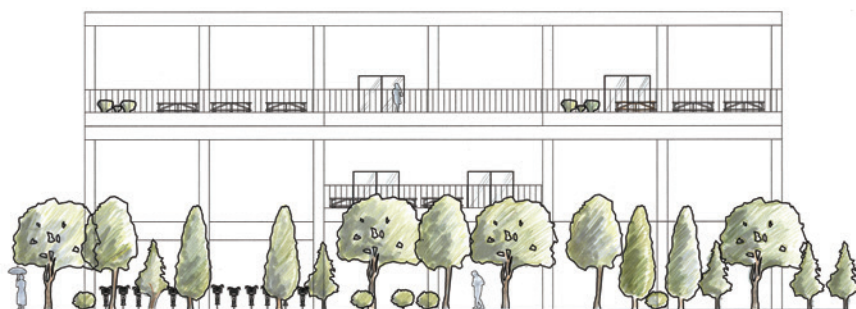
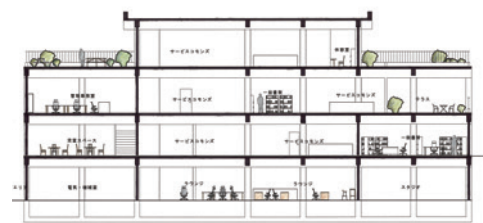
Block Book

～まちに開く読書テラス～

波江 七海

各諸室が明快に整理されたうえで、それらが水平・垂直に連続した構成を取り、テラスやピロティと隣接することで、どこにいても開放性を感じられる。近隣環境を丁寧に読み取り、街に開かれた公共性の高い空間が形成されている。家具配置による緩急のある場所が塩梅よく用意されており、用途に応じた距離感が保たれている。図面・模型表現もある。今後は象徴的な場や吹き抜けに代表される立体的広がりが加われば、空間体験にさらなる奥行きが生まれるだろう。

加嶋 章博



つながる ライブラリー

～ピロティとテラスのある
コミュニティ・ライブラリー～

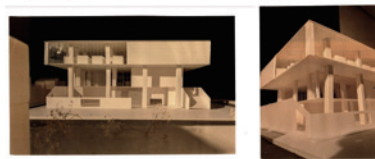
根本 樹

公園に面した2階の屋外テラスが魅力的な提案。ピロティから大階段でテラスにアプローチする上下移動を含んだ回遊性や、ピロティから公園への視線を確保しながらロビー空間によって一旦切り離すことで生まれる内外を巡る回遊性など、シンプルな形態操作で様々な空間体験が生み出されている良案。図書館としての計画も無理なく解けているが、家具による空間の作り方にはもう少し工夫の余地があると思うので今後の課題として欲しい。

好川 拓



つながるライブラリー～ピロティとテラスのある
コミュニティ・ライブラリー～



〈計画図〉

「つながるライブラリー」は、公園に面した2階の屋外テラスが魅力的な提案。ピロティから大階段でテラスにアプローチする上下移動を含んだ回遊性や、ピロティから公園への視線を確保しながらロビー空間によって一旦切り離すことで生まれる内外を巡る回遊性など、シンプルな形態操作で様々な空間体験が生み出されている良案。図書館としての計画も無理なく解けているが、家具による空間の作り方にはもう少し工夫の余地があると思うので今後の課題として欲しい。

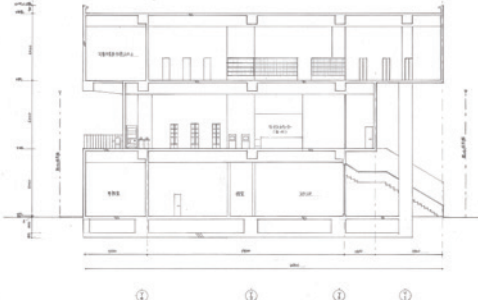
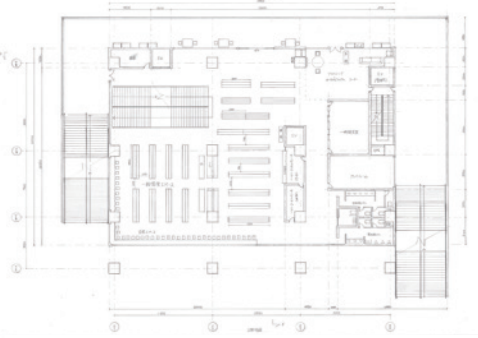
〈断面〉



〈アイデア図〉



階数	面積 (㎡)	容積率 (%)	延床面積 (㎡)	容積率 (%)
1階	105.2	25.2	105.2	25.2
2階	111.2	26.7	111.2	26.7
3階	118.2	28.2	118.2	28.2
合計	334.6	80.1	334.6	80.1



内に開かれた箱

光と通りが貫く、
秩序の中の開放

野村 優奈

3×3×3のグリッドを基本とした空間構成により、中央の天窗からの自然光が吹き抜けを介して各スペースに行き渡り、同時に視線の抜けも確保され、内部空間に一体感と広がりをもたらしている。吹き抜けの配置も、1～2階では南北軸線上の中央、2～3階では対角線上の両角と変化があり、テラスも公園側や南東側に設けられている。シンプルな直方体から出発しながら、立体迷路のような構成によって魅力的な空間が実現されている。

井戸 健治

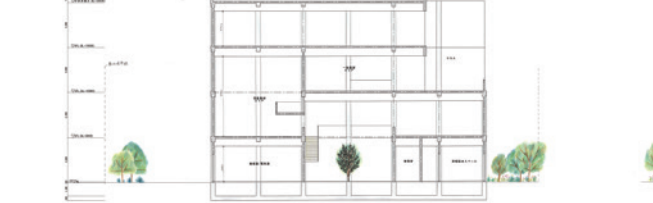
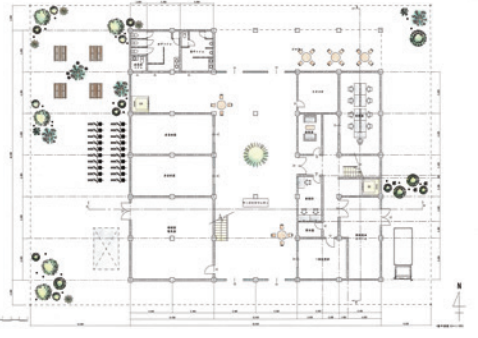


一北東にある2、3階の吹き抜け部分の写真。2階の壁は本で埋め尽くされている。吹き抜けということもあり、開放感を感じられる。

一4階上部から撮った写真。中央が全て吹き抜けのため、光を取り入れられ、上下のつながりも感じられる。

一正面から撮った写真。1、2階の中央は通路、吹き抜けにし、通り抜け出来るよう設計した。

一2階から撮った写真。2つに分かれた2階は2つの通路で繋がっている。また、対角線の位置に2つの吹き抜けもある。





2
年生前期

第1課題

中之島公園を臨むワークプレイス

概要 働く空間はデスクが並ぶ画一的な空間から、ワーカーたちがパフォーマンスを上げ、気持ちよく働く空間が求められている。本課題は大阪都心の中之島に建築設計事務所のオフィス（自社ビル）を計画する。敷地南側には遊歩道、大川、中之島公園、北浜オフィス街があり、抜群の立地を活かすと同時に、4階建ての上下のつながり、家具レイアウトに意識して、所員のコミュニケーションを促進する計画とする。また、エントランスはまちに開かれた心地よいスペースとし、創造性を高めるオフィス空間の提案を目指す。

第2課題

SU Visitor Center 通り抜けのできるキャンパス

概要 摂南大学寝屋川キャンパスは校舎側から横断歩道を渡ると、スタジアム、コンビニ、緑地、バス停、駐車場が整備され、Campus Open 計画として学生・教職員・地域住民の学びや交流を促す場づくりが推進されている。本課題はその一環として、バス停やコンビニに隣接する敷地に、地域に開かれた摂南大学ビジターセンターを計画し、通り抜けできる動線を設けることとする。学生、教職員ならびに地域住民にとってのコモンズとなる建築および屋外空間の提案を目指すものである。

| 担当教員 |

専任

大谷由紀子

加嶋章博

非常勤講師

出江潤

京智健

戸田智

古川晋也

堀賢太

守行忠勝

好川拓

| STAFF |

Yukiko OTANI

Akihiro KASHIMA

Jun IZUE

Tomotaka KYO

Satoshi TODA

Shinya FURUKAWA

Kenta HORI

Tadakatsu MORIYUKI

Taku YOSHIKAWA

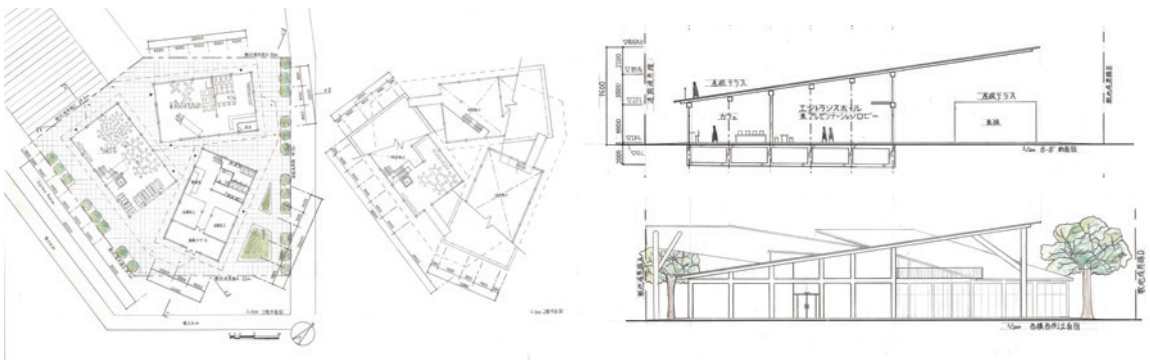
LINK

中村 和希

同じプロポーションで機能の異なる3つの棟を、正三角形を描くように屋根を重ねながら配置した案。この構成により、受け流すようなファサードと、隙間から受け入れる形をつくると同時に、大学と地域が重なる所に相応しい象徴性を持たせることに成功している。

内部空間同士の繋がり方や外部空間の滞留性への設え、内外の繋がりなどに課題はあるが、都市に対して奥行きを持って対峙することの有用性を感じる良作である。

古川 晋也



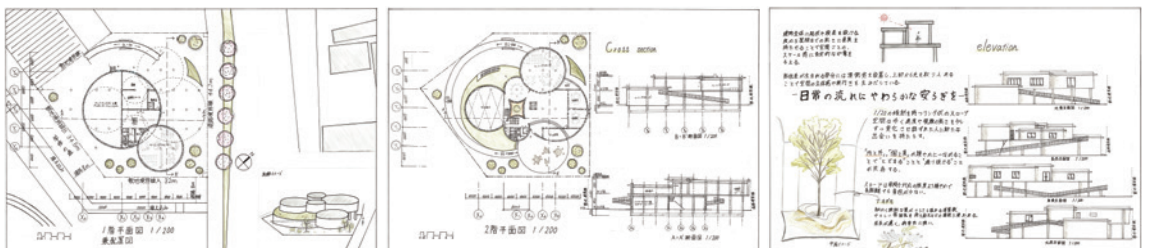
円縁 —えんえん—

波江 七海

様々な大きさや高さの円柱を平面的・断面的に重ねて多様な空間をつくるという構想やそれらの空間を繋ぐ経路となるスロープの計画など意欲的なアイデアを建築としてまとめ上げた力量は評価に値すると思います。一方出来上がった空間をよく見ると曲線と無縁の部屋割りであったり高さの差異が小さかったりとアイデアの可能性を活かしきれていない所も見られました。

円や曲線が生み出す空間の特性をより深く探れていけばもっと良い作品になったのではないかと思います。

戸田 智



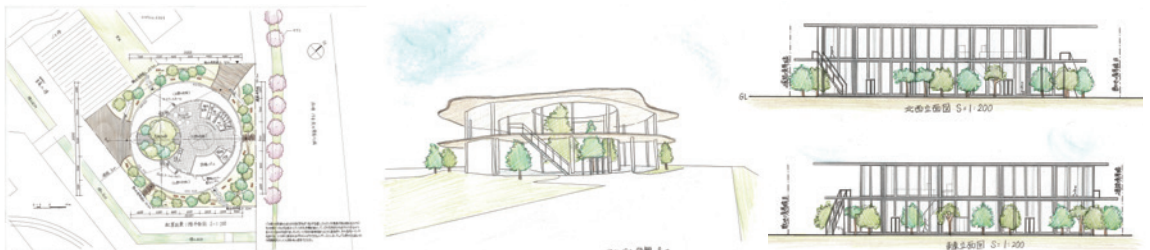
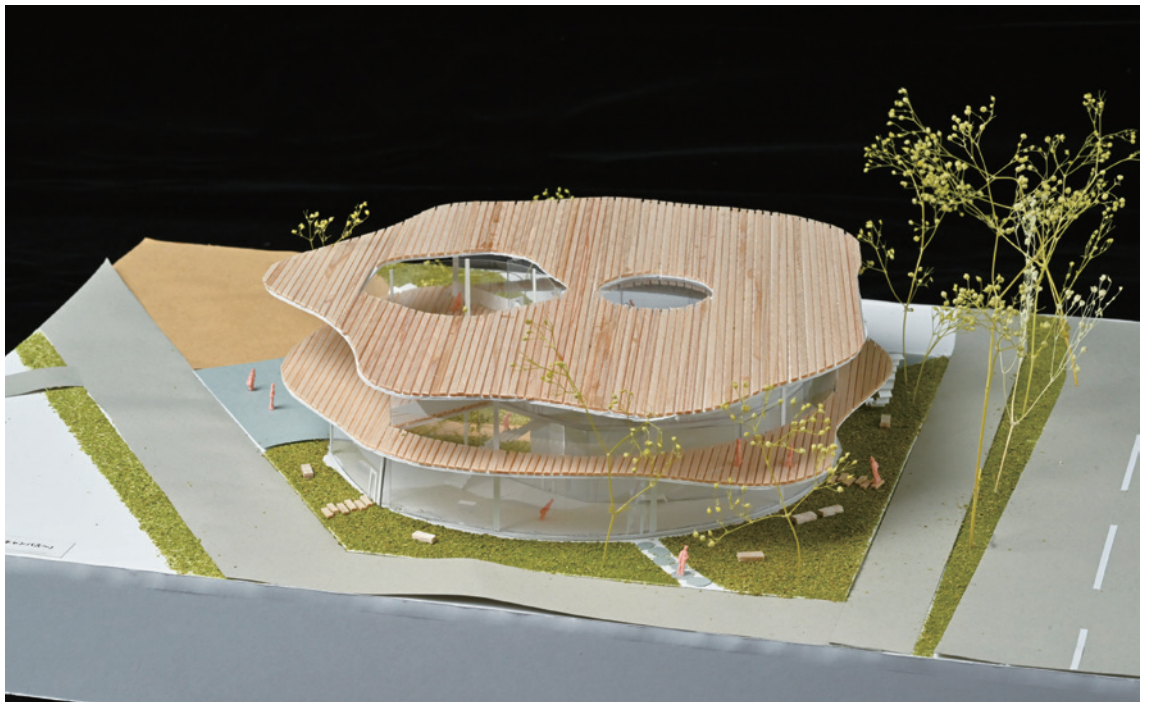
学びの遊び場

中村 綾乃

「多重の円」を用いることで生まれる、通り抜けを意識した全周への正面性と、多層性を地域と大学の重なり場に生かした案。配置には、s大通りからの直行軸を用いることで大学への正面性を弱め、都市との繋がりをより意識させている。また、揺らいだ円を含む複数の円は、重なりによる互いに干渉場所の多様性と豊かな奥行きを作っている。

かたちとその操作を、プログラムと空間性に素直に活かしている点を特に評価したい。

古川 晋也



斜めに架かる 緑がのぼる屋根

伊藤 真衣

最初のエスキスの後、与件を洗い出すだけでは埒が明かないと悟ったのか大屋根のアイデアが出てきた。配置計画や大きな構成はほぼファーストイメージだが、それを成立させるため何度も検討を重ね、最終的に建物の「裏」を作らない計画に着地しているところは評価したい。府道側から見た緑化された大屋根はアトラティブで、その佇まいは「周辺に開かれたビジターセンター」として好感が持てる。図面表現もメリハリがあって良い。

好川 拓

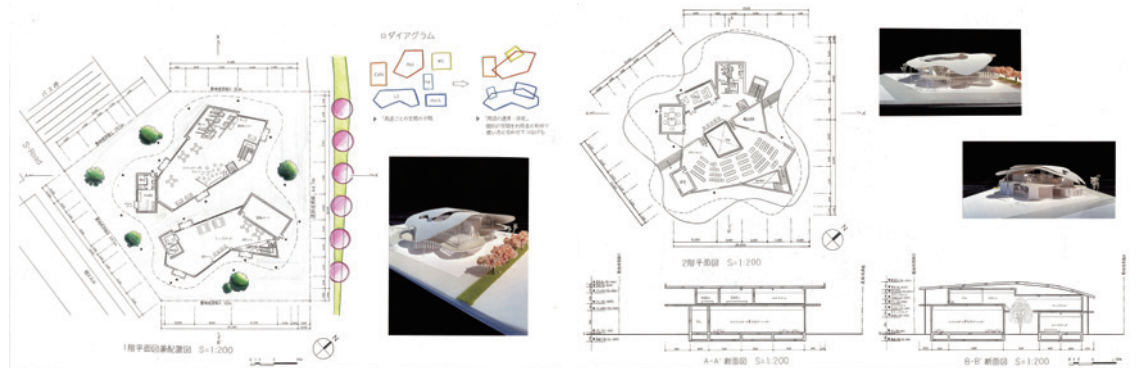


Weave

久保 心音

学生ホール課題は、学生同士および周辺住民との交流を、建築を通して活性化することをテーマとする。本計画では、大屋根が生み出すピロティによってグラウンドレベルを包み、全方位からのアプローチを可能とした点が評価できる。また、室内空間を一体的に構成し、利用者間の交流を促そうとする姿勢も読み取れる。一方で、開口部の閉鎖性の解消や1・2階の連携を高めれば、より地域に開かれた提案となったと思われる。今後の成長を期待している。

出江 潤

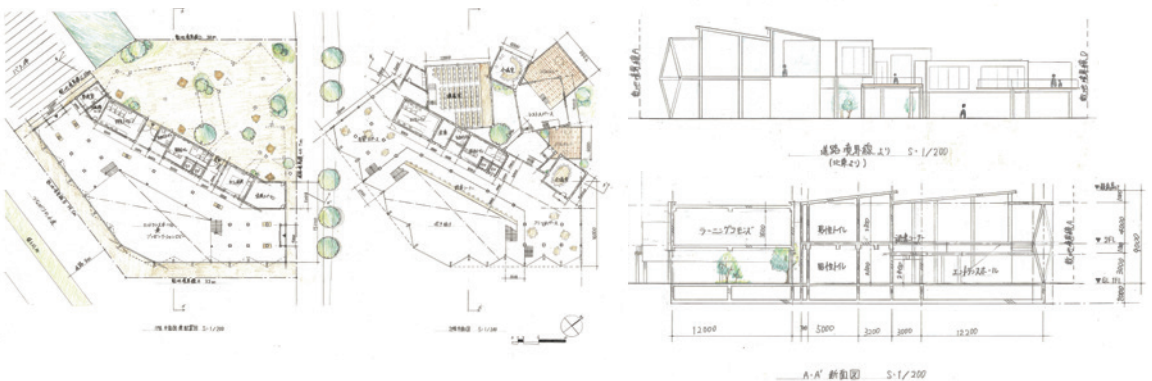


まちとまなびの 交点

中田 隼登

帯状に配置した設備・コア部分を用いて、通りぬけルート/大人数が利用するエリアと比較的少人数で利用するエリアを分節するプランニングは、制約の多い与条件に対してうまく応答している。敷地北西の外構・ピロティは心地のよい滞留空間として機能している。裏のない敷地において全ての面に顔となるファサードデザインを試みていることは評価できる。特にハイサイドライトを含めて凹凸のあるメインファサードの作りこみは意欲的である。

守行 忠勝

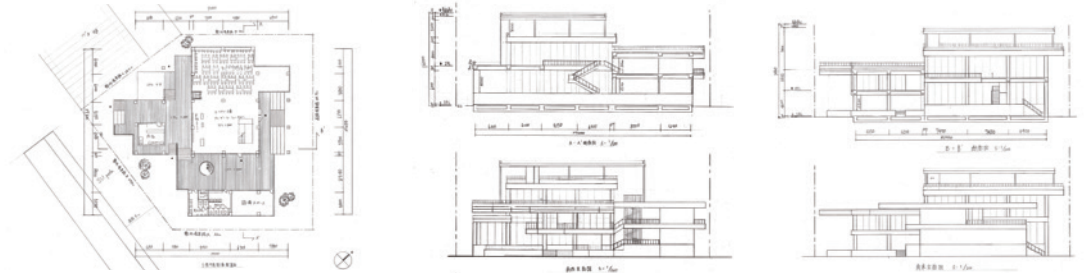


ヒカリの階段

土田 花野子

スキップフロアにより、空間がゆるやかにつながり、自然と歩きたくなるような計画である。レベル差により視線が交錯し、雁行した空間により対流と居場所が生まれることで、歩いていると活動が自然と見えてくるような豊かな空間を形成している。また、外部を奥まで引き込むことで、風が通り抜け、立ち寄りやすくなるような工夫がされている。平面にややまとまりがあり、内部が暗くなると考えられるので、建築中央に吹抜や中庭などをつくることで、光が差し込み、より視線や人が行き交う建築になるだろう。

堀 賢太

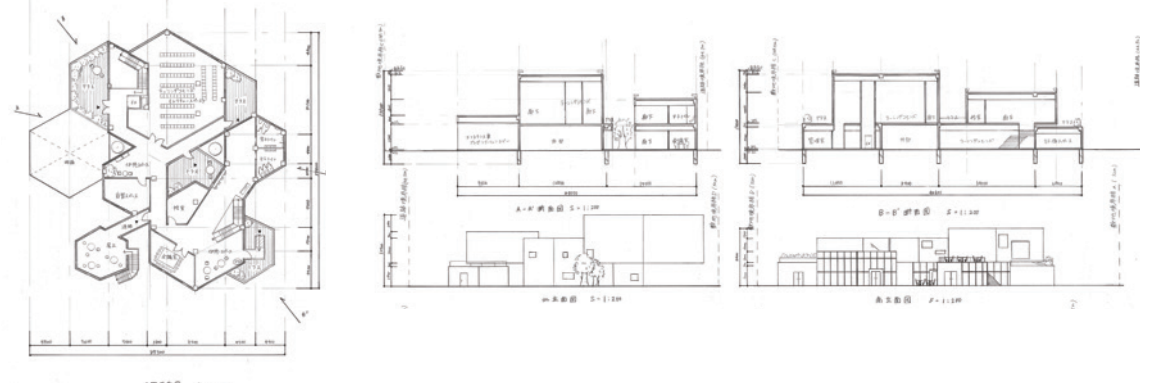


たまりばの巣

阪野 妃菜

六角形の反復によってスペース同士に緩やかな交差を生み出し、アクティビティを誘発するような提案である。1階の通り抜けは様々なシーンが同居し、多角形の壁によって発生した空間の余白は、人の居場所になるよう計画している。一方、2階は六角形に廊下を組み合わせた複雑な構成がやや閉鎖的な印象を与えている。六角形の反復を立体的にも作用するように上下階のつながりを持たせ、建物全体でより活動が広がるような更なるブラッシュアップを期待したい。

京 智健



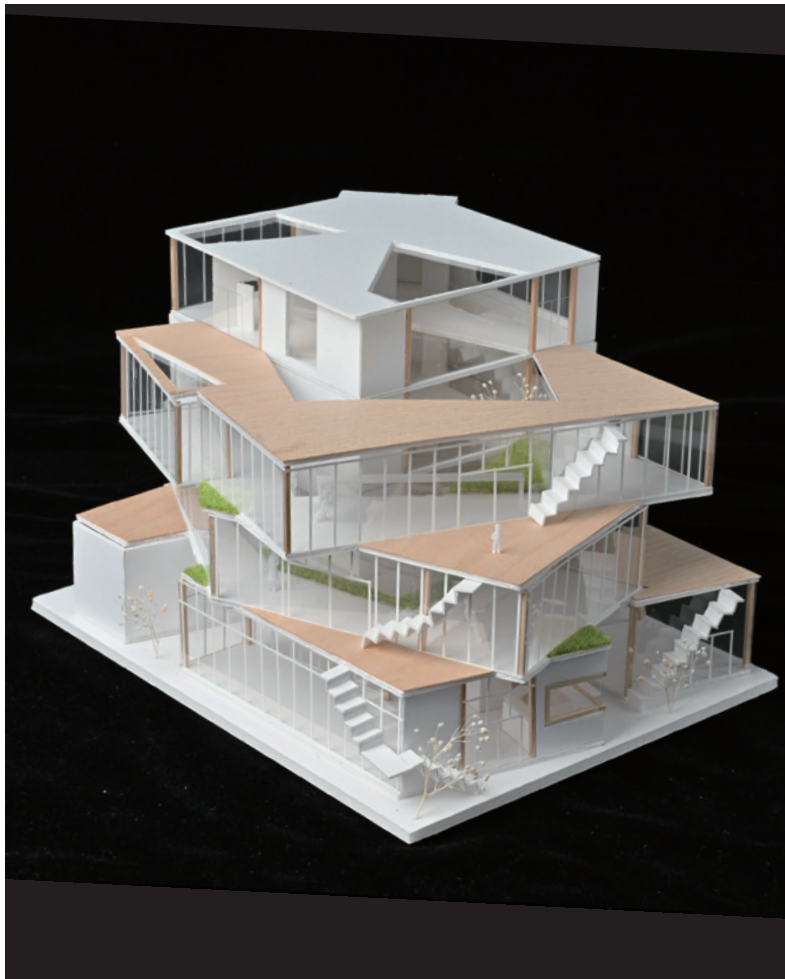
PATH

WORK →
PATH「道」「通路」+
WORK「仕事」「働くこと」

久保 心音

各フロアに回遊性を持たせつつ、層のずれによる変化を織り込み、気軽に散策ができるようなワークプレイスが展開されている。閉じる場所と開く場所、狭さと広がりを組み合わせ、多角な壁が利用者の滞留と流動を交錯させる。そのシーケンスが空間に独自のリズムを生み出し、その日の気分でどこでも仕事ができる、心地よさと共に利用者同士の交流が自然と行き交うことを意識された計画である。

京 智健

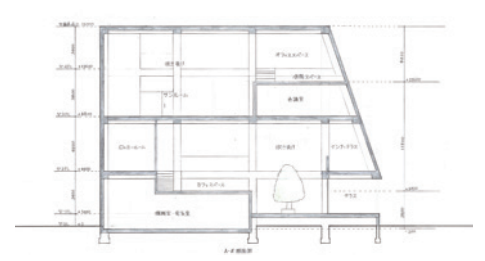
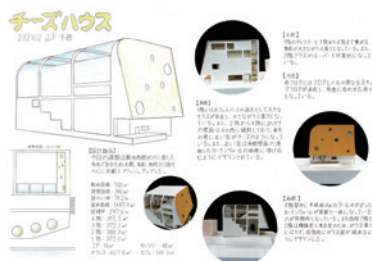


チーズハウス

山下 千穂

最初期のエスキスで特徴的な形の模型がすでにあった。その魅力を損なわないように検討が重ねられたが、ゾーニングと構造の柱割りに多くの時間を費やすことになる。試行錯誤の末、縦横3スパンの6mグリットを採用することで一気に最後まで展開したという印象。今回の主題であるコアについてもコンパクトに解けており、基本的なオフィスビルの形式を成立させた上で、様々なプランニングの工夫で魅力的なワークスペースになっている。

好川 拓



Veil & Core

伊藤 真衣

マッシブな建物全体がガラスの外皮 (veil) で包まれ、その内側にはトップライトまで伸びる大きな吹抜け (core) が据えられている。建物周囲には緩やかに各階を繋ぐ階段が配され、上下階を多様な経路で移動できる楽しさが計画に盛り込まれている。建物と外皮の間は半屋外・半屋内の空間として、利用者にとって広場のように機能する。見上げれば、各階の小さなバルコニーや屋外階段が点在し、建物全体に豊かな表情を与えている。全体として、空間同士を繋ぎながら多層的な体験を生み出す力を備えた作品であり、コンセプトと空間構成がうまく結びついている点が評価できる。

加嶋 章博

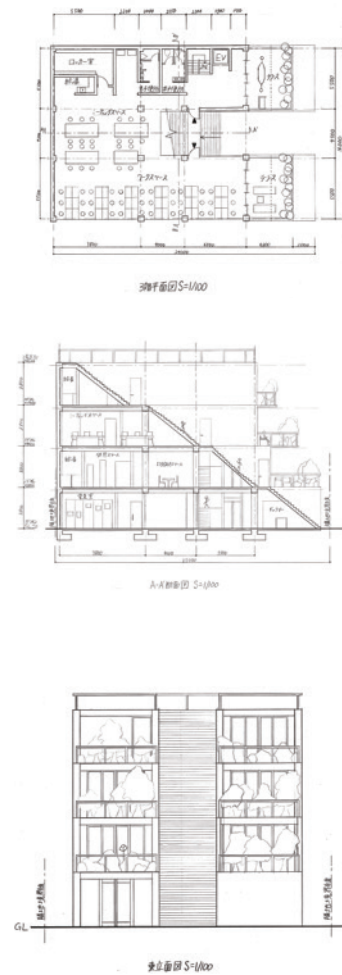


見上げ、登る

飯室 遥斗

4階まで 80 段ある直通的の屋外大階段を中央に挿入したオフィスビルとして、大胆かつ独創的な構成である。本来は避難動線としての役割をもつ大階段が、各階のCOMMONスペースに隣接する緑のテラスと一体となり、公園の一角のように座ったり休憩したりできる場として機能している。オフィスへのアクセスそのものが楽しい体験となる計画である。中央に大階段を据えながらも、各階の動線は丁寧に検討されており、大川の眺望を取り込んだワーキングスペースが各階に巧みに計画されている点も評価できる。計画力と空間の魅力を兼ね備えた作品であり、今後の発展も期待できる。

加嶋 章博



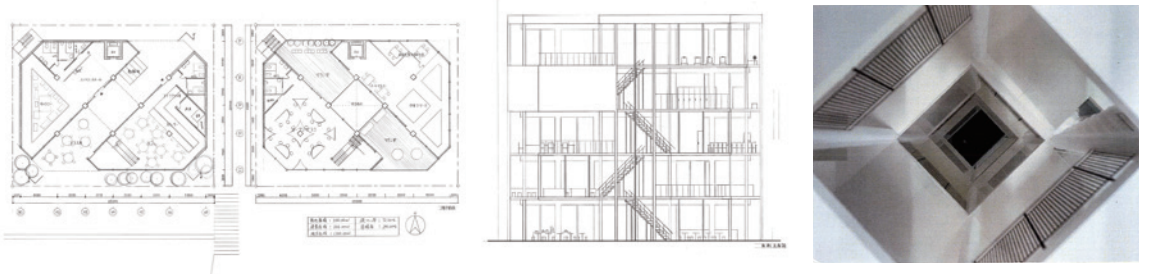
REN-SO works

中村 和希

建築ボリュームを斜めにくり抜き、くり抜く角度を階ごとに反転させることで、内部と外部が交錯する豊かな空間が実現できている。建築中央はくり抜かれた水平ヴォイドの交点となり、全てのフロアを貫く垂直の吹抜となっていて、上下に視線の抜けを得られる。シンプルなシステムを採用しつつ、複雑な空間を作り出している力作である。

一つ一つの場所のあり方や設えがやや似ているので、それぞれの特徴を引き出し具体的に計画できると、より表情豊かな建築になるだろう。

堀 賢太



余白と共に

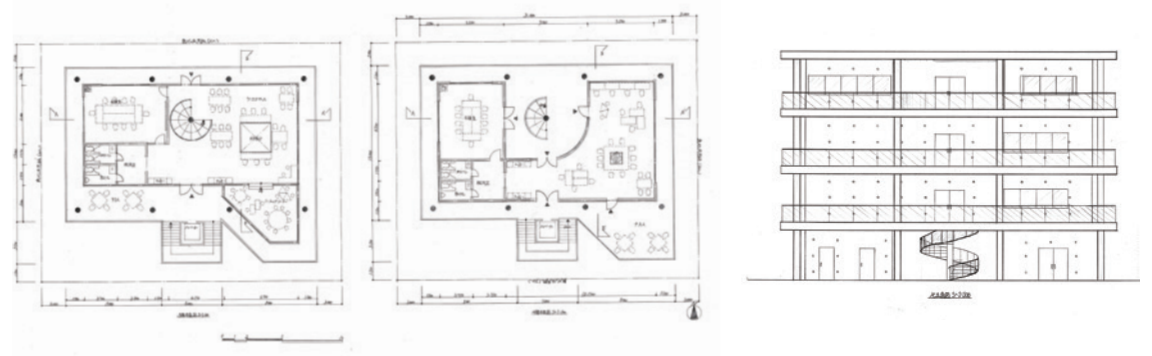
呉 世根

本課題は、周辺の豊かな環境への応答と、事務所建築が内部で過ごす人々にいかに作用するかを主題としている。

この計画は、ドミノシステムを採用し、主構造と間仕切を切り離すことでフレキシブルな平面を実現し、課題に応えようとする姿勢が評価できる。一方で、景観に対峙する間仕切面を壁ではなく開口主体とすることで、コンセプトはより明確になっただろう。

今後の更なる成長を期待している。

出江 潤

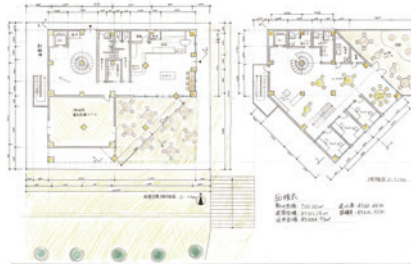
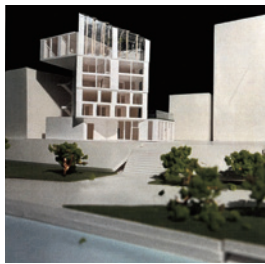


流域のアトリエ

野村 優奈

整形敷地に建つヴォリュームの中層部を45度回転させて、大川の眺望を大きく取り込む事に主眼を置いた計画である。中2階・中3階を設定して、低天井ながら気持ちのよいワークスペースが多数できている。4階は対照的に、高天井でガラス張りの開放的な空間を設けている。回転により生まれた南西部分のヴォイドは無開口の壁と屋外階段のみで少しもったいないが、平面も断面もシンプルな操作で効果的な手法だと評価できる。

守行 忠勝



フラクタル アーチ

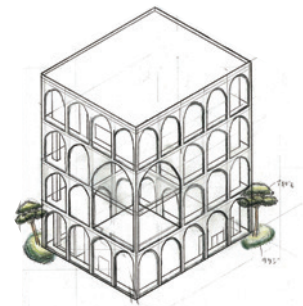
成瀬 孝直

アーチは用いやすいモチーフですが、だからこそ扱いに注意しなければキッチュな装飾になりかねない難しさがあります。

この作品はそのアーチをテーマにプロポーションのスタディを真摯に行うことで魅力的な立面をつくることに成功しています。

二層吹抜け部を除きアーチ部分はほぼ同じ奥行きの一様な空間となっていますが奥行きや境界面の設定次第ではもっと多様な居場所の計画が出来たはずでそのような可能性の検討があればなお良い作品になったのではないかと思います。

戸田 智



1

年生後期

| 担当教員 |

専任

伊熊昌治

大谷由紀子

非常勤講師

小田真平

駒井陽次

高木章寛

南野優子

信藤勇一

濱田猛

山根健太郎

| STAFF |

Shoji IKUMA

Yukiko OTANI

Shinpei ODA

Yoji KOMAI

Akihiro TAKAGI

Yuko NANNÔ

Yuichi NOBUTO

Takeshi HAMADA

Kentaro YAMANE

第1課題

キャンパス内のレストスペース

概要 摂南大学寝屋川キャンパスは、新校舎や広場、テラスなどのさまざまな施設やオープンスペースの新設・リニューアルが進んでいる。本課題は、建築学科の校舎前に広がる中庭に「レストスペース」なる空間・場として、緑のある休憩スペース & トイレを計画する。初めての建築設計課題であり、寸法、および、場所の構成や人の動線に留意して、学生や教職員にとって心地よい空間をスタディし図面で表現する。

第2課題

「蔵のある暮らし」をデザインする 狭小敷地に蔵とともに棲む

概要 都市開発により大型町家がマンションとして売却され、蔵一棟が残された幅4m・奥行30m程度の狭小敷地である。「まち」らしさの継承と地域の資産としても必要な要素である蔵とともに棲むための住宅を計画する。

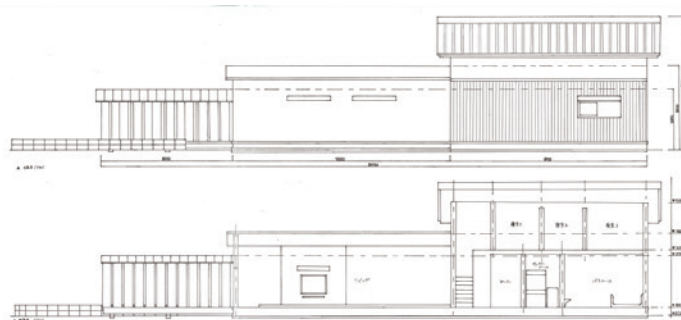
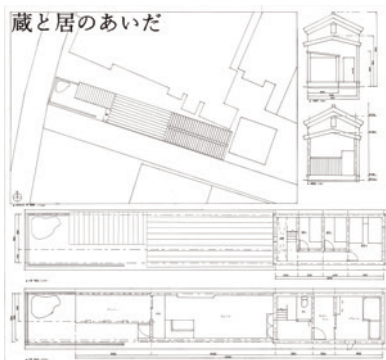
住環境の豊かさには、光、風、音といった自然環境を取り入れることが重要であるが蔵の存在も意識し、隣地や道路といったパブリックな部分からのプライバシーの確保も意識して計画をする。模型でのスタディーを中心とし、同時に図面で表現を行う。

蔵と居のあいだ

出田 陽心

蔵を主たる居とし、既存建物が無い西側に池と庭、蔵と庭のあいだにリビングと半屋外のテラス、3つのゾーンは私～共の領域にグラデーションを描く。そのグラデーションは、建物のボリュームとしても表現される。しかも、図面はA2用紙3枚をつなぎ、インキング仕上げ。いずれも意表を突く。蔵を活かした提案はもちろんのこと、図面表記・技法という本科目の目標においても、膨大な熱量が感じられる作品である。

大谷 由紀子

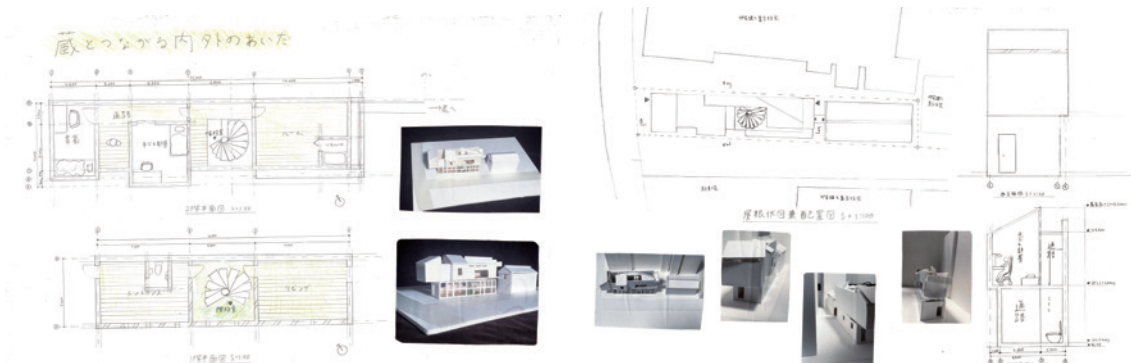


蔵とつながる内外のあいだ

岸田 稜一郎

細長い敷地条件に対し、動線や効率を整える方向に収束しがちな中で、本案はバランスが崩れることを恐れず、上下階に外部を大胆に引き込む断面構成に挑戦している点が印象的でした。未熟さは残るものの、空間に予期せぬ広がりや体験を生む意志が感じられ、魅力的です。快適性への配慮は今後の課題ですが、「心地よさ」より「豊かな体験」を優先した姿勢は清々しく感じられます。

山根 健太郎

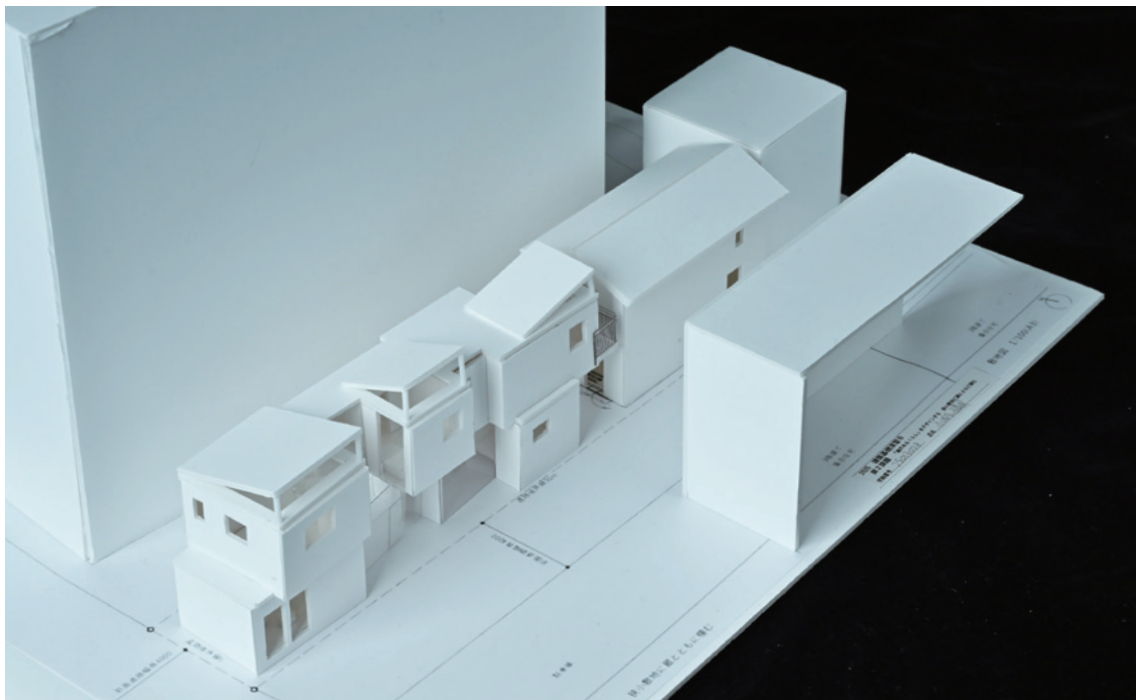


ズレの箱

小林 慎昊

細長い敷地条件を的確に読み取り、小さいヴォリュームに分節することで既存の蔵との共存を図ろうとする提案である。ずらしながら連続させることで、多様な外部空間を生み出し、単調になりがちな内部空間に変化と奥行きを与えている点が評価できる。ずらしによって獲得された窓は屋内外の境界を曖昧にし、空間体験を豊かにしている。また、狭さやプランの複雑化といった課題も丁寧に整理されており、構成力の高さが感じられる。

小田 真平



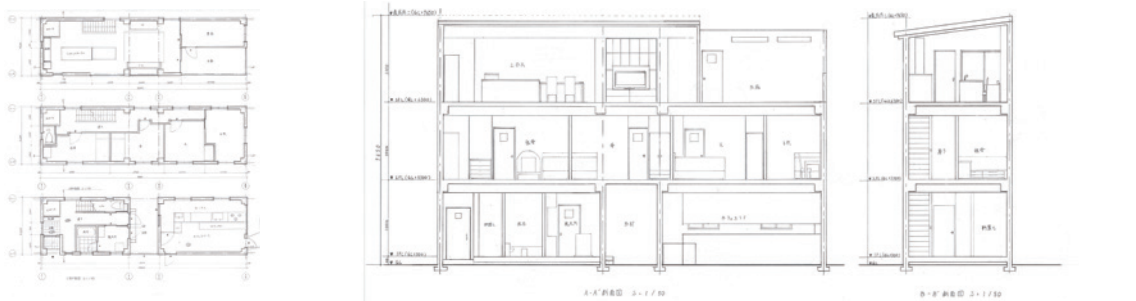
ぽつんと蔵 CAFE

～蔵と共に生きる
狭小住宅～

篠崎 拓真

細長く、蔵のある敷地において、新しい住宅を加え巧みに空間レイアウトされた案。新築住宅の中央に外部空間を設け、また蔵との境界にも外部空間を設けた。この2つの外部空間が、住宅、カフェ、蔵の3つの空間を分節して明快な計画となり好感がもてる。図面、模型写真の表現からは、安心感と生活感も感じ取れるプランとなっている。また、建物ファサードには健康的な印象も感じるが、さらなるダイナミックなデザインへの挑戦にも期待する。

信藤 勇一



家族空間を核とする住居

平井 心埜

家族の気配が交差する場所として、角度をもったひとつの空間が住まいの中心に据えられている。この「家族空間」は各室を緩やかにつなぎ、日常の中で自然な関係性を生み出す核として機能している。一方、蔵は非日常の場としてシアター的な役割を担い、日常とは異なる時間の流れを住まいの中に静かに織り込んでいる。平面・断面ともに構成は明快で、空間同士の関係性を丁寧に整理する姿勢が感じられ、今後のさらなる成長が期待される。

駒井 陽次

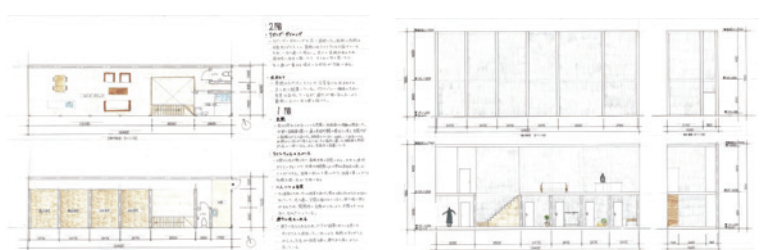
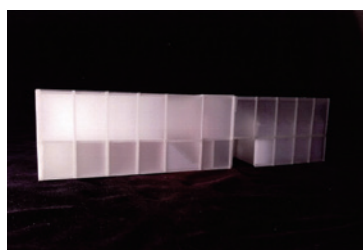
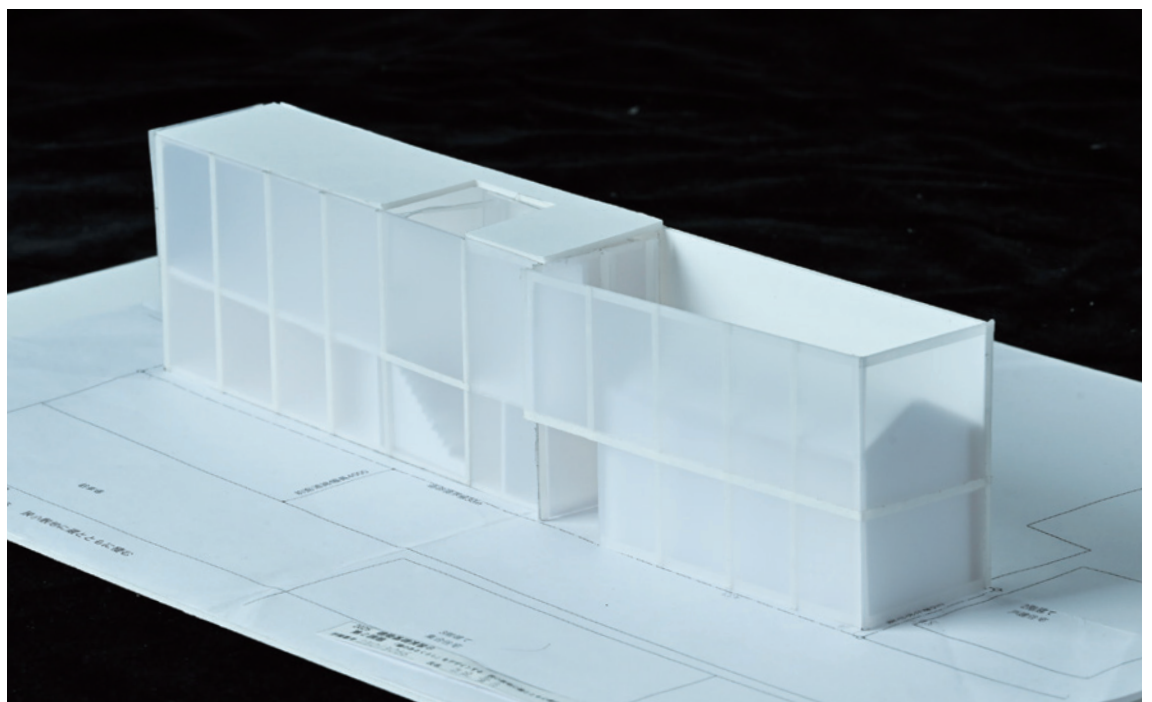


光と住む家

正延 葉月

既存の蔵と新築住宅をスリガラスで包み込み、一体の建築として再解釈した着眼点が非常に秀逸です。外観では蔵の存在を直接主張せず、かすかな輪郭として浮かび上がらせることで、町の歴史を静かに継承する姿勢が感じられます。一方、内部ではやわらかな光に満ちた明るく開放的な空間が実現され、歴史と現代性、閉鎖性と開放性を巧みに両立しています。敷地条件を前向きに価値へと転換した完成度の高い提案です。

濱田 猛

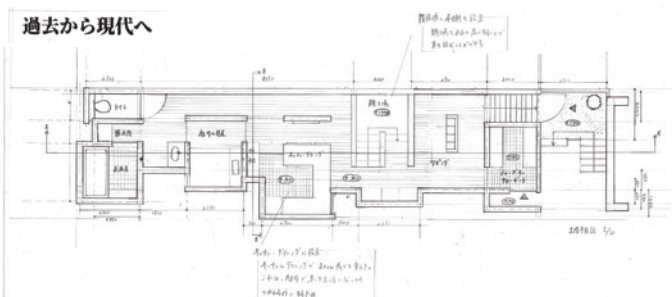
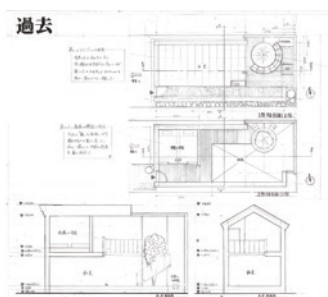
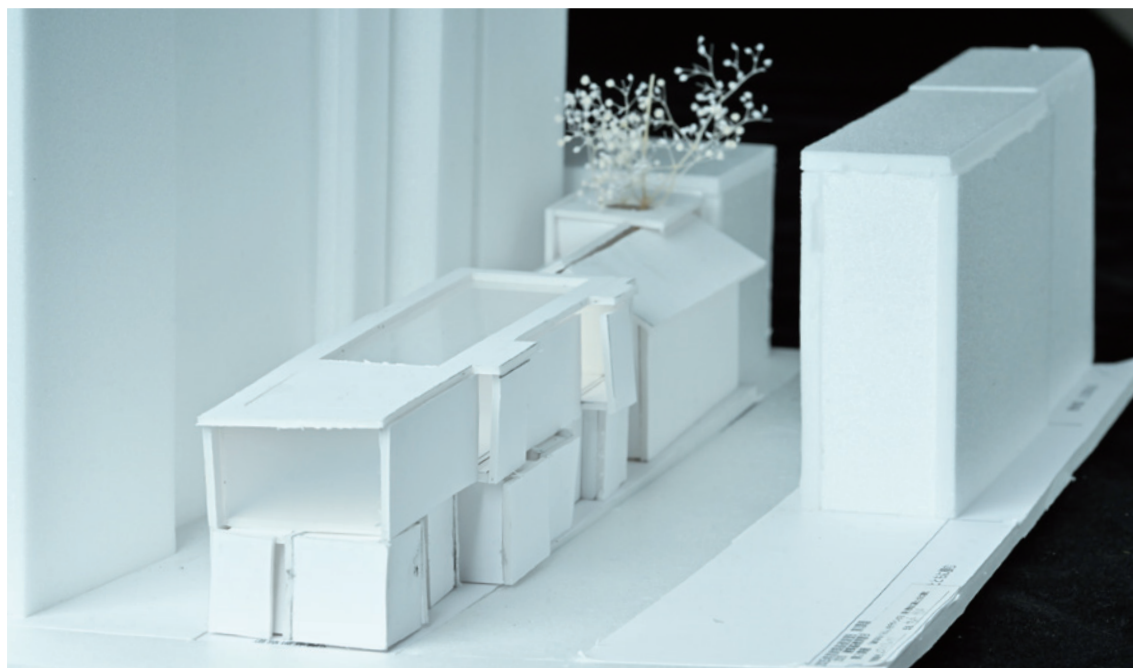


紡ぐ

丸井 悠斗

蔵（過去）と母屋（現代）を対比させるのではなく、境界なく接続するというアイデアを元に、過去と現代を「紡ぐ」ことによって既存蔵がある敷地への解決策を示した意欲作である。「紡ぐ」というコンセプトを建築として実現するためにちりばめられたキューブ状の個の単位は、綿密に考えられた心地よい寸法で構成されると同時に、それらの余白との関係性により多様で魅力的な空間を生み出している。

南野 優子

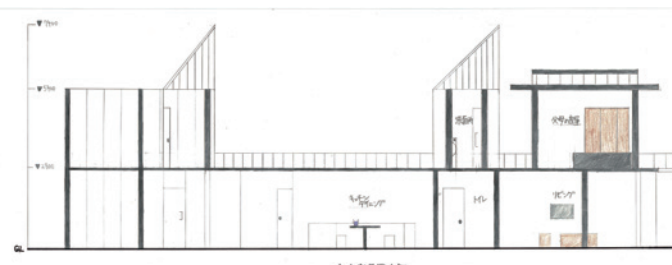
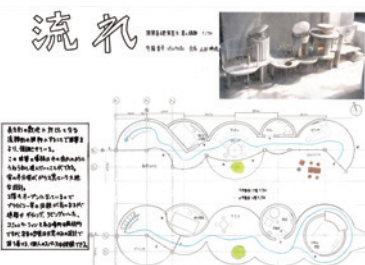
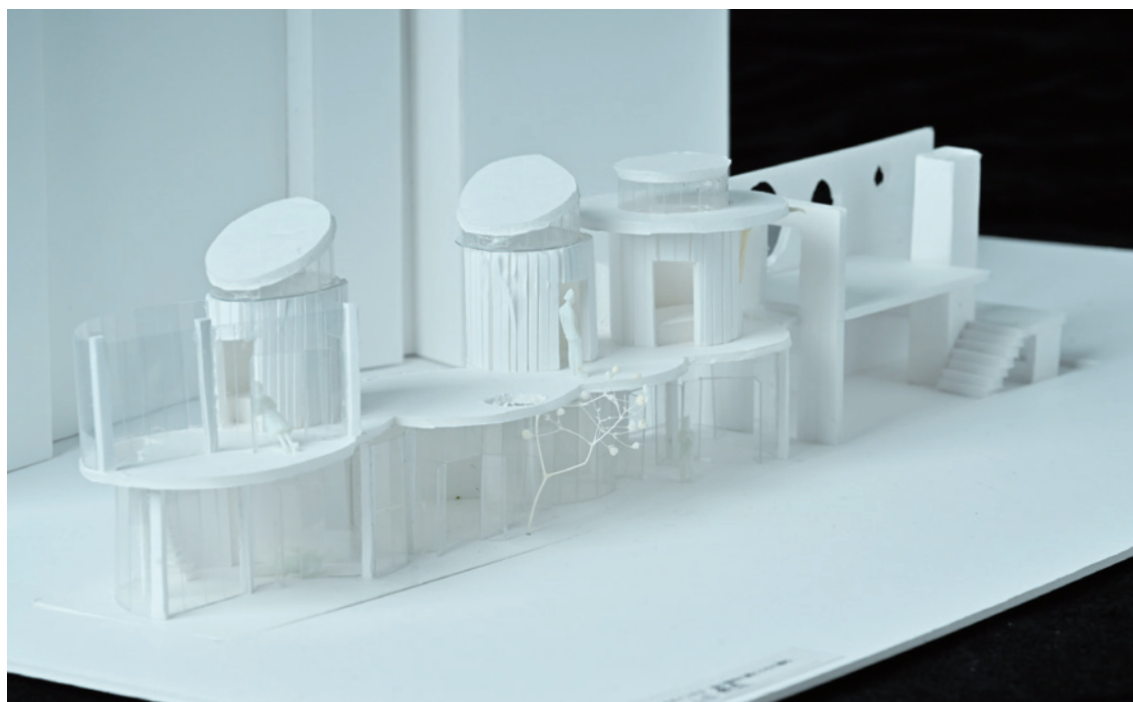


流れ

山田 稀琉

西側道路から蔵に向かって、連立する円筒ボリュームで構成された住宅の提案。細長く、制約が厳しい敷地の中でもそれらを感じさせない、シークエンシャルで多様な空間が生まれている造形力は評価したい。ただし、居室への光の入れ方やプライバシーといった住環境については、もう少し配慮があっても良かったのではないかと思う。長方形の敷地と円形ボリュームの間に生まれる隙間部分について、住環境に寄与するようなデザインがなされていれば、より現実的な良い提案になったと思う。

高木 章寛

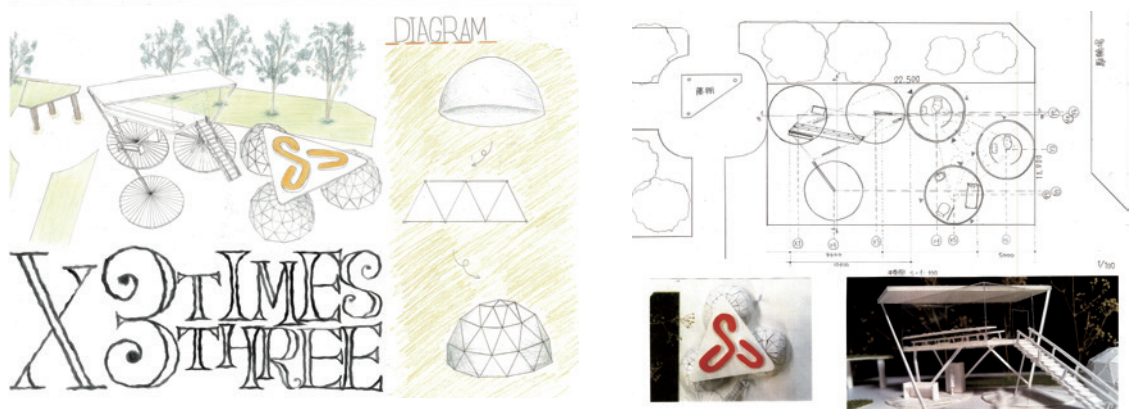


X3 TIMES THREE

池上 ゆず

屋内のカフェ・休憩コーナーを宙に浮かして GL レベルを開放することで、高い目線からキャンパスを見渡せる新しいビューポイントを生み出しつつも、周辺棟の利用者が多方面から気軽に立ち寄ることが出来るレストスペースとなっている。ツリーハウスのような佇まいは、キャンパスのランドマークとなることも期待できる。アクセスしやすさとプライバシーの両立をシンプルに実現している入れ子状のトイレ平面計画も評価したい。

高木 章寛

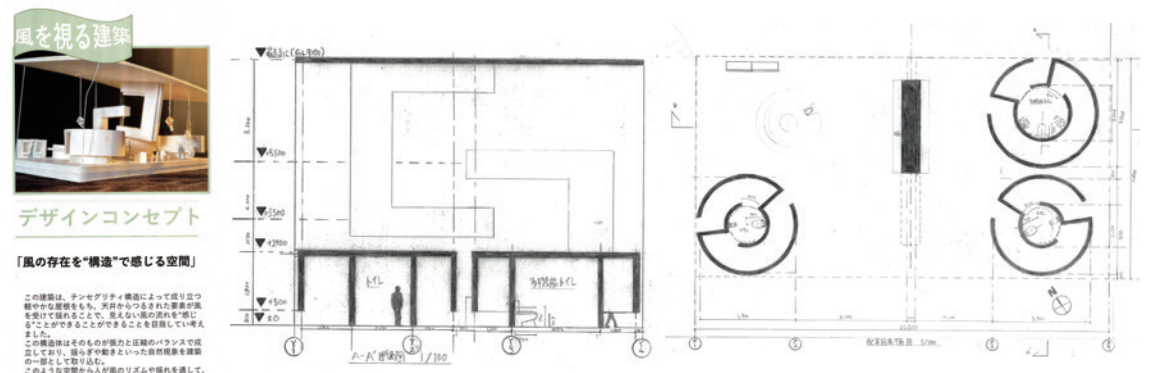


風を視る建築

杉村 優斗

テンセグリティ構造を用いて柱を極力排した浮遊する屋根の提案は、構造そのものを空間体験に昇華しており非常に魅力的です。風によって屋根が揺れるという性質を「風の可視化」と捉え、建築を通して環境を感じさせる視点は、大学内部に設ける施設として高い思想性を備えています。トイレや休憩所をその下に配置することで、日常的な行為に自然現象を重ね合わせた点も評価できます。構造表現と使われ方の関係をさらに深めることで、より完成度の高い提案になるでしょう。

濱田 猛

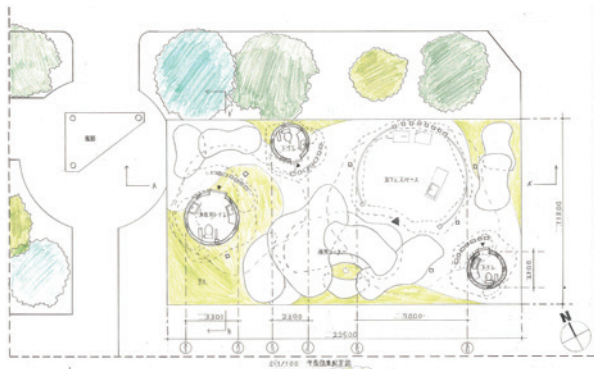


木漏れ日と心地よい風

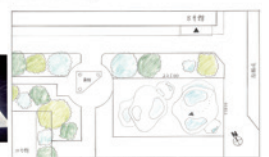
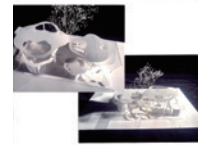
原田 詩月

人の居方が、そっと建築に委ねられる空間である。レベル差を用いて構成された段差は、ベンチや机、腰掛けとして多様に機能し、利用者がその時々気分や関係性に応じて居場所を選び取る余白を生み出している。有機的な屋根形状と透明な素材を通して、木漏れ日のような柔らかな光が静かに差し込み、穏やかな時間の流れを感じさせる。空間同士の関係性やスケール感も丁寧に整えられており、今後さらに思考と表現を重ねることで、設計者としての確かな成長が期待される。

駒井 陽次



「自然と人の過剰な空間」
屋外と室内を曖昧に区別しないことで、自然と人の過剰な空間を創り出す。多様な居場所を創り出すことで、利用者がその時々気分や関係性に応じて居場所を選び取る余白を生み出している。有機的な屋根形状と透明な素材を通して、木漏れ日のような柔らかな光が静かに差し込み、穏やかな時間の流れを感じさせる。空間同士の関係性やスケール感も丁寧に整えられており、今後さらに思考と表現を重ねることで、設計者としての確かな成長が期待される。

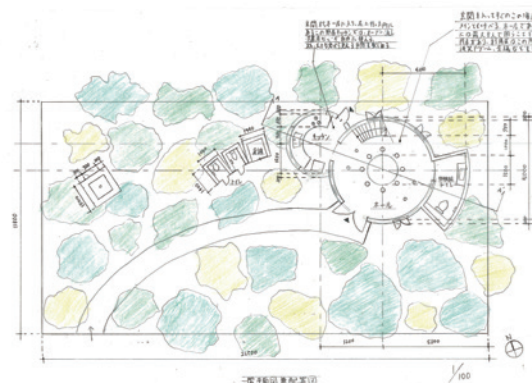


非日常と邂逅

松井 一真

キャンパス内は日常、小さな森は境界域、非日常的なレストスペースへと誘う空間を創り出した案。敷地いっぱいの森の中へ上手く円形休憩スペースを馴染ませ、休憩スペースやトイレをレイアウトしている。2階建ての休憩スペースは、機能的にコンパクトにまとまっているが、やや洋風の外観は少し若々しいデザインが可能だったかもしれない。今回のテーマである非日常の内部、外部空間が巧みなドローイングとして描かれ好感を感じる。

信藤 勇一



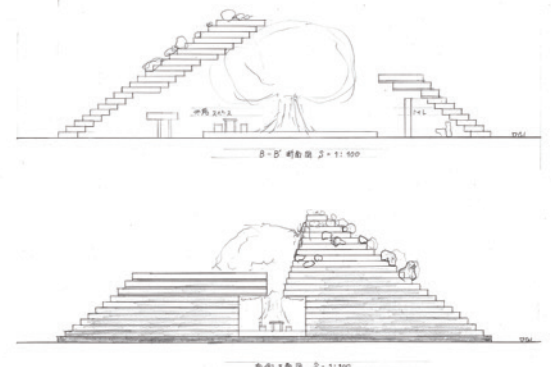
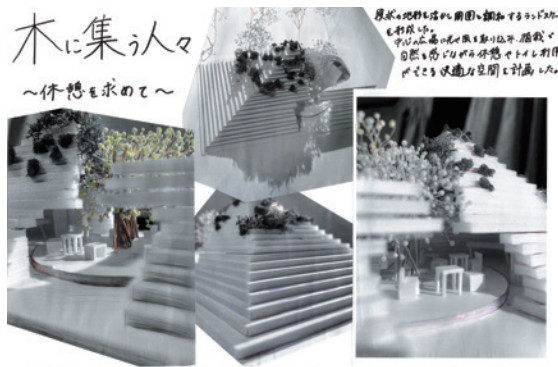
木に集う人々

～休憩を求めて～

松枝 尚希

地面を隆起させるという大胆な操作によって、平坦なキャンパスの風景を立体的に更新しようとする意欲的な試みである。階段状の丘は、登る・腰掛ける・見下ろすといった多様な身体的行為を自然に誘発し、日常の滞在行動を豊かにしている。曲線的に繰り抜かれたヴォリュームの中に、休憩スペース、トイレが配置され、内外の連続性が丁寧に構築されている。スリットから差し込む木漏れ日は、時間の移ろいを可視化し、本作を「キャンパスの風景を変化させる装置」として成立させている。

小田 真平

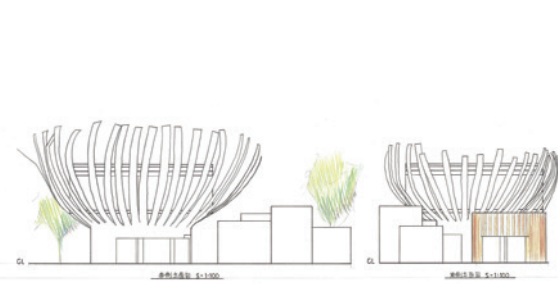


自然と集まる空間

松村 直道

放射状に広がるリブ状の造形が強い印象を残し、トイレという閉じたプログラムを、光や影、包まれ感を伴う体験的な空間へと引き上げようとする意志が伝わってきます。曲線と反復を用いた構成に挑戦し、造形そのもので空間をつくらうとしている点は高く評価できます。一方で中央の形に対し、周辺空間がやや類似的に留まっているため、関係性の違いをもう一步整理できると、全体がより高め合う構成になったはずです。造形の勢いに対して、人のスケール（視線高さ・座る位置など）がまだ十分噛み合っていない印象なので、動線のみならず、とどまる時間のあり方についても考えるようにすると、より魅力的になると思います。

山根 健太郎

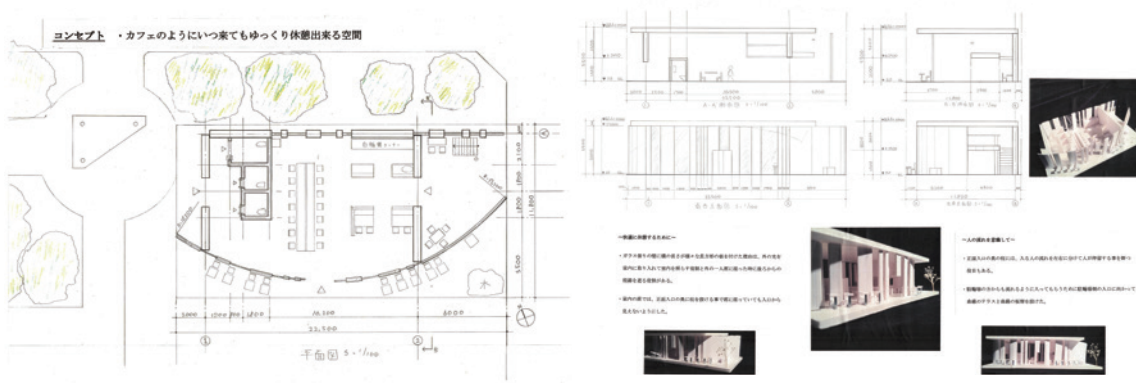
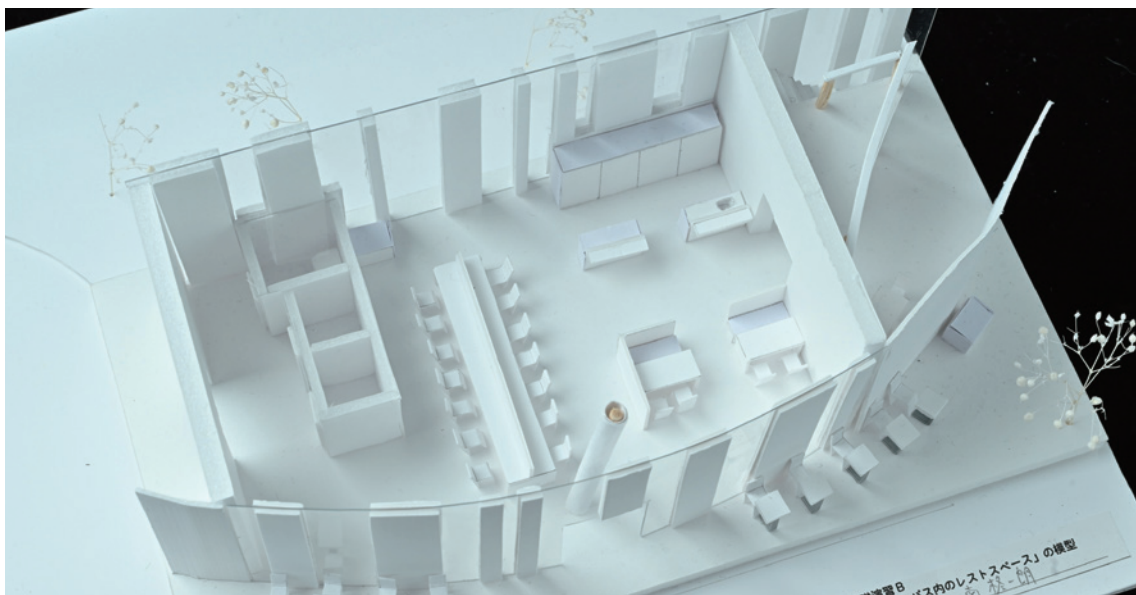


時を過ごす場所

南 柊一朗

「時」を可視化するために、太陽の入り込む日差しに注目し、太陽光が作り出す陰の変化を感じる場をつくりだしている点が秀逸である。水平な矩形屋根は曲線状に配置された壁面に緩やかなカーブの陰をおとすように配慮され、さらに視線を拡散する方向に居場所を作り出している。陰をつくる壁の配置やシンボリックな1本の柱を設け。見えがくれする人の姿を楽しむ場所を創出し、曲線壁により1人で安心していられる場所を作り出している。

伊熊 昌治

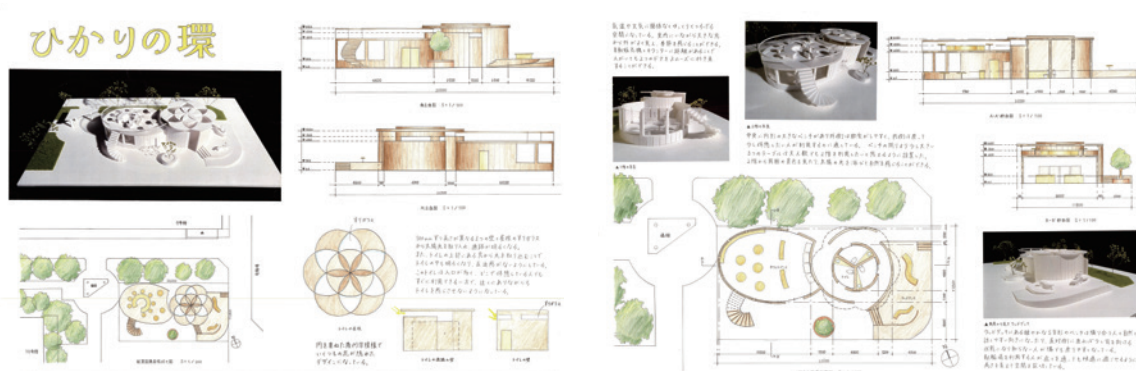


ひかりの環

武藤 歩乃

曲線で構成された高さの異なる筒状のボリュームと外構レベルの操作により多様な居場所を考えた案である。トイレの屋根は幾何学的なパターンで構成され、自然光を意匠的に取り入れながらもプライバシーを両立した空間となっている。図面の表現力には特筆すべきものがあり、線の強弱の使い分け、着色による表現、丁寧なレタリングにより「ひかりの環」というコンセプトが明快に表現されている。

南野 優子



1

年生前期

第1課題

「中心のある家」のトレース

第2課題

「中心のある家」の模型制作

第3課題

大学構内に設けられる展示空間（パビリオン）

| 担当教員 |

専任

伊熊昌治

白須寛規

非常勤講師

池田久司

川口裕人

斉藤智士

佐藤伸也

村上美美子

| STAFF |

Shoji IKUMA

Hironori SHIRASU

Hisashi IKEDA

Hiroto KAWAGUCHI

Satoshi SAITO

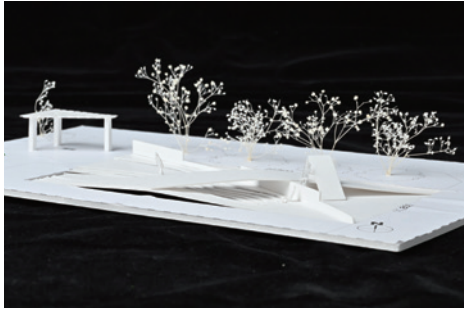
Shinya SATO

Fumiko MURAKAMI

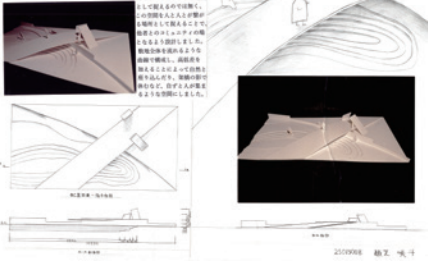
概要 1年生前期の最初の設計演習では、基礎的なスキルの習得を目指す。最初の「トレース」課題で図面のルールを学び、次の「模型」課題で模型制作の基本を身につける。いずれも建築家・阿部勤氏の自邸「中心のある家」を題材とした。最後は、小規模な「パビリオン」を自分で設計する課題に取り組む。機能は設定せず、3種類に設定した高さの壁と屋根を、切る・折る・曲げる等の加工により造形的に魅力のある模型を制作し、模型から図面化することを目指し、最終的に1枚のシートにレイアウトし、プレゼンテーションとして完成させた。

繋がる

植芝 咲斗



繋がる

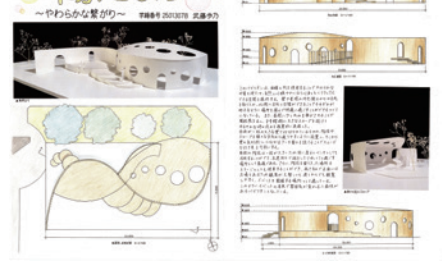


陽だまり

武藤 歩乃

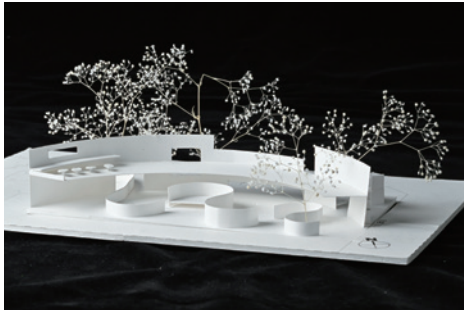


陽だまり



空中回路

中村 美咲

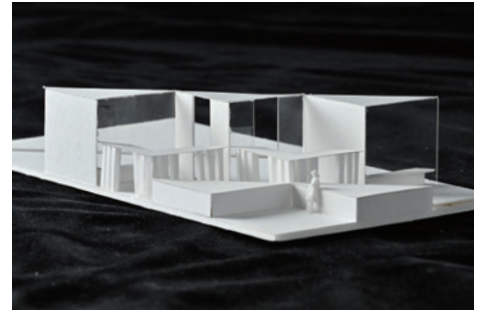


空中回路

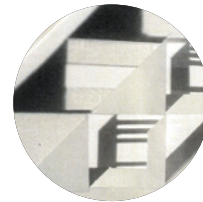
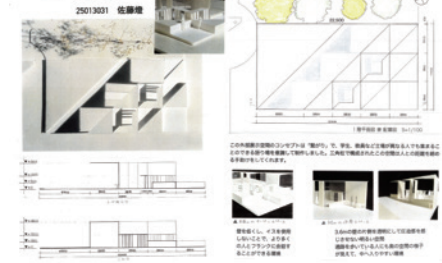


つなぐ

佐藤 燈

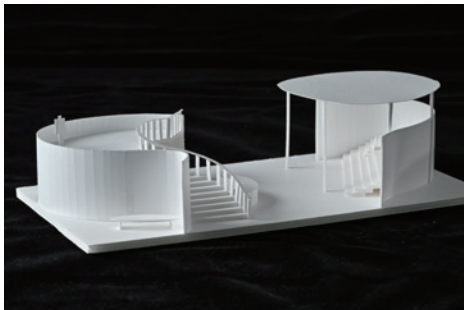


つなぐ

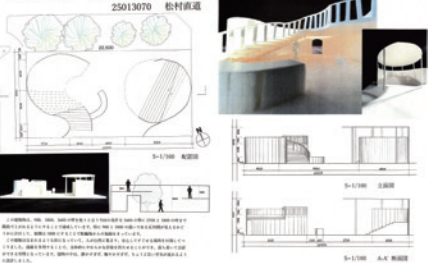


包まれる建築

松村 直道

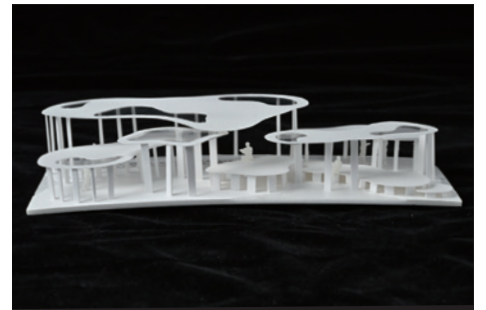


包まれる建築

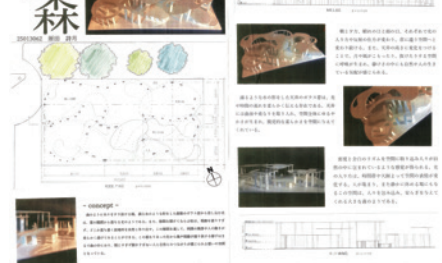


滴る森

原田 詩月



滴る森





岩間 庵莉



山田 秀真



武藤 歩乃

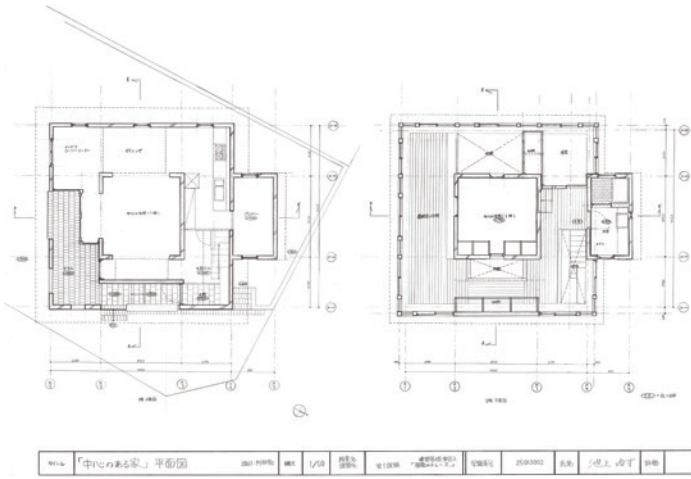


小林 慎昊

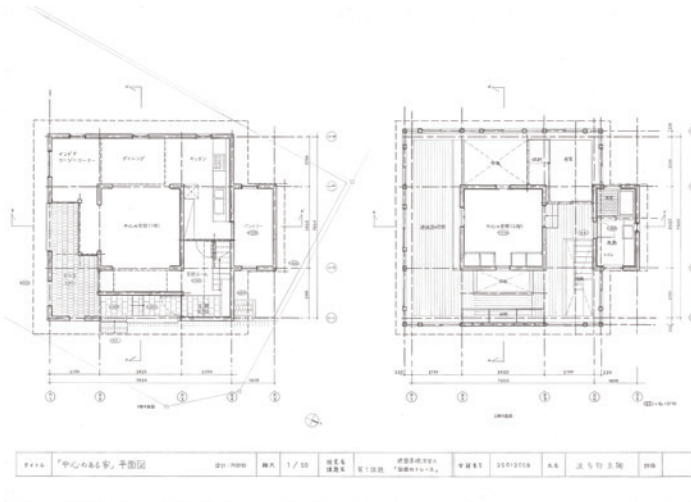
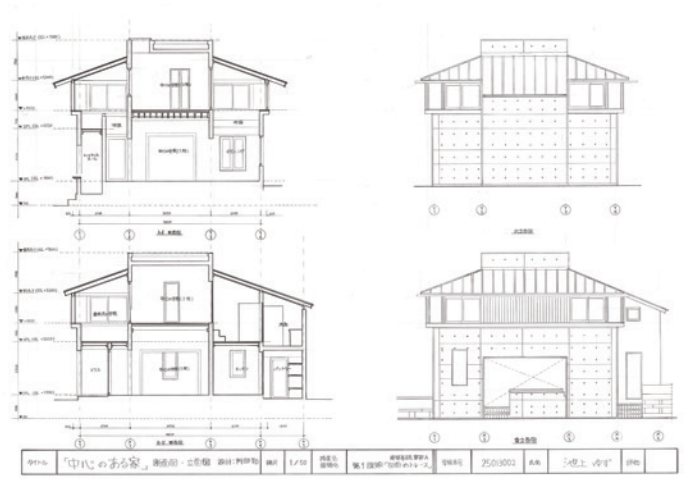


野間 隼人

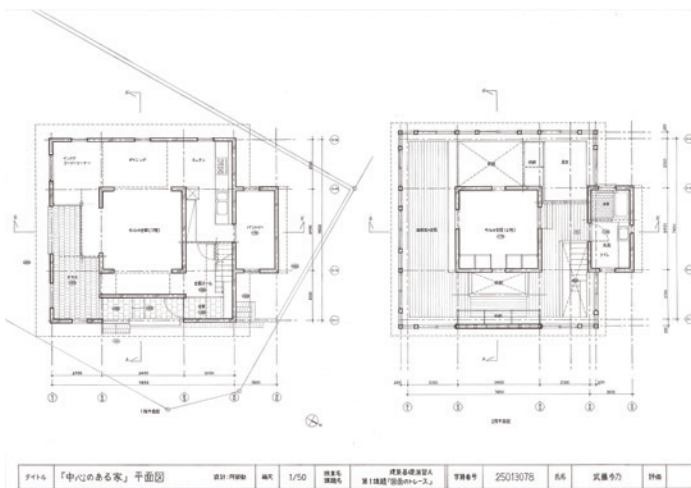
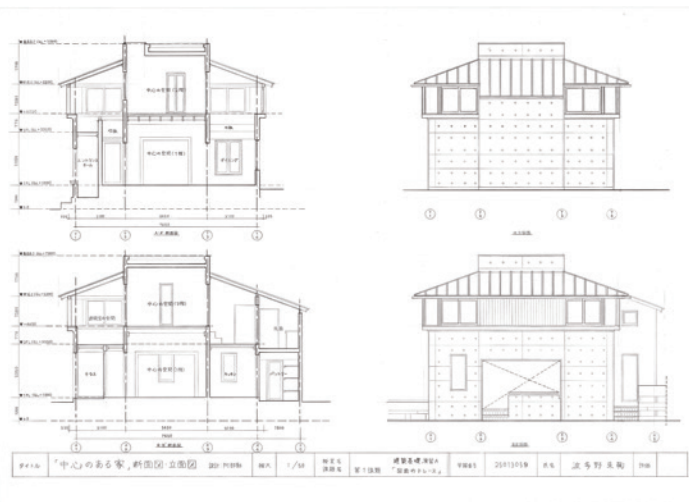
建築基礎演習 A 第 1 課題
「中心のある家」のトレース



池上 ゆず



波多野 朱鞠



武藤 歩乃



都市文化共生デザイン研究室（加嶋研究室）が海外合同ワークショップに取り組みました。

Oversea Workshop on Architecture and Urban Context Brno University of Technology × Setsunan University (2025)

建築・都市文脈をテーマとした海外合同ワークショップ
本学協定校（チェコ共和国）ブルノ工科大学 × 摂南大学

Itinerary 全体日程



Workshop Overview ワークショップ概要

Workshop Structure & Theme (ワークショップの構成とテーマ)
Focusing on the historic city center of Brno, the workshop examined areas where streetscape continuity had been disrupted by war damage and other factors (missing façades). Through field observation, discussion, and visual representation using drawings and collages, mixed Japanese-European teams explored possibilities for reconstructing future streetscapes. English was used as the primary language, supported by sketches and diagrams.

ブルノ市中心部を対象に、戦災等により連続性を失った街並み (missing façades) に着目し、未来の街並みの再構成を検討した。

日欧混成チームによる町歩き、議論、図面・コラージュによる視覚的表現を通じて検討を進め、英語を基本にスケッチや図解を併用した。

Educational Objectives (教育的狙い)

- To provide opportunities for cross-cultural exchange and practical learning through collaboration with an international partner university.
- To foster architectural thinking by sharing diverse perspectives on urban heritage and renewal through joint work in a historic city.

① 協定校との連携を通じて、異文化交流と実践的な学習の機会を提供すること。
② 歴史都市を舞台とした共同作業により、街並みの継承と更新に関する多様な視点を共有し、建築的思考を深めること。

Members 参加者 (本学)

指導教員：加嶋章博 (建築学科 都市文化共生デザイン研究室)
修士1年：大野剛史 (理工学研究科 社会開発工学専攻 M1)
4年：小林大輝 土井萌愛 中郷陽咲 中村美結 福田梨咲

Brno Univ. of Technology ブルノ工科大学建築学部 正門前にて

Workshop Day 01 ワークショップ 01



Workshop Day 02 ワークショップ 02



Workshop Day 03 ワークショップ 03



Activities & Exchange on Campus ブルノ工科大学での活動や交流



Reflections 振り返り

【学生コメント】

- 「ブルノ工科大学の学生と協働することで、建築が生活様式や価値観を反映していることを実感した。」
- 「一緒に街歩きをする中で、街並みの連続性が都市の印象を形づくる重要な要素だと認識した。」
- 「言葉の壁があっても、スケッチや図を通じて考えを共有することができた。」
- 「このワークショップを通して、都市や建築を歴史的な視点で捉える見方が変わった。」

【教員まとめ】

本ワークショップでは、異なる文化背景をもつ学生が協働し、歴史都市における街並みの読み取りと再構成を実践的に学んだ。短期間ながらも、観察力と対話を通じた建築的思考の深化が見られた。

建築学科の「同い年」たち

- オール阪神・巨人
1975年4月にコンビ結成
- スーパー戦隊シリーズ
1975年4月に放送開始
- ローソン
1975年6月に1号店を開業
- モンベル
1975年8月に創業
- コミックマーケット
1975年12月に第1回を開催
- マイメロディ
1975年にサンリオが開発
- 徹子の部屋
1976年2月に放送開始

摂南大学開学
工学部
建築学科創設

建築学科一期生 85名 (女性1名 男性84名) が巣立つ

8号館竣工

(当該年度卒業生数)

85

123

130

111

Timeline

昭和50年
1975

昭和51年
1976

昭和52年
1977

昭和53年
1978

昭和54年
1979

昭和55年
1980

昭和56年
1981

沖繩国際海洋博覧会
ベトナム戦争終結
Microsoft Corporation 設立

ロッキード事件
Apple Computer Company 設立

気象衛星「ひまわり」打ち上げ

新東京国際空港 (現：成田国際空港) 開港
日中平和友好条約調印

共通第一次学力試験 (共通一次) が開始
SONY が「ウォークマン」を発売

アーケードゲーム「パックマン」発売

神戸ポートアイランド博覧会
スペースシャトル「コロンビア」打ち上げ

108

107

95

108

136

125

106

109

118

平成3年
1991

平成4年
1992

平成5年
1993

平成6年
1994

平成7年
1995

平成8年
1996

平成9年
1997

平成10年
1998

平成11年
1999

湾岸戦争勃発
ソビエト連邦崩壊

PKO 協力法成立
「星のカービィ」発売

Jリーグ開幕
レインボーブリッジ開通
「55年体制」崩壊
18歳人口が減少モードに突入

関西国際空港開港
イチロー (オリックスブルーウェーブ) が日本プロ野球史上初の1シーズン200安打以上 (210安打)

阪神・淡路大震災
地下鉄サリン事件
Microsoft が「Windows95」を発売
Amazon.com がサービスを開始

「名探偵コナン」テレビ放送開始
羽生善治が将棋タイトル7冠独占

香港返還

長野オリンピック
サッカー日本代表 (岡田ジャパン) がワールドカップに初出場
Apple が「iMac」を発売
Google 設立

通貨「ユーロ」が導入

91

124

84

82

87

57

67

61

60

平成21年
2009

平成22年
2010

平成23年
2011

平成24年
2012

平成25年
2013

平成26年
2014

平成27年
2015

平成28年
2016

平成29年
2017

新型インフルエンザ流行
民主党政権誕生

小惑星探査機「はやぶさ」が地球に帰還

東日本大震災
サッカー女子日本代表 (なでしこジャパン) がワールドカップで優勝

東京スカイツリー開業

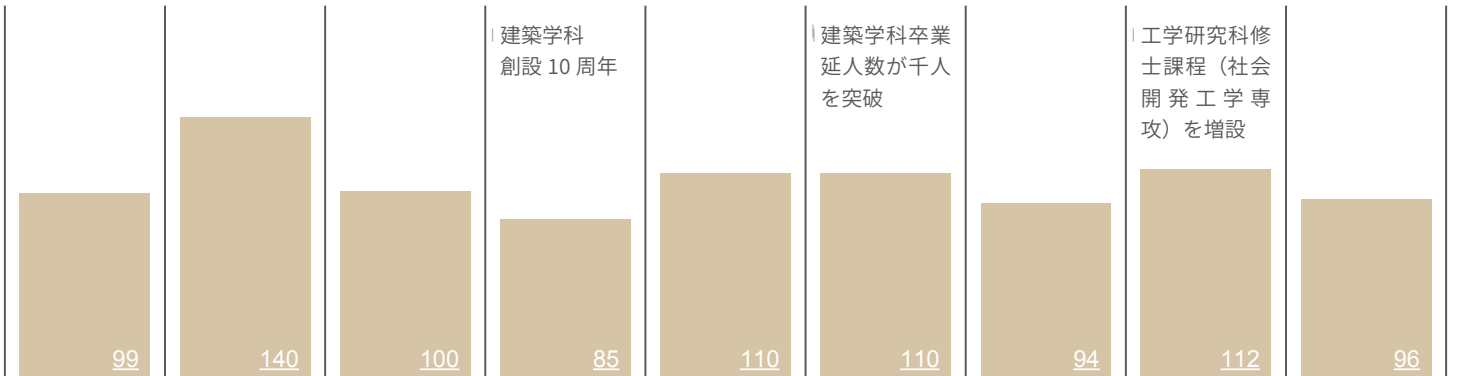
富士山が世界文化遺産に認定
「妖怪ウォッチ」シリーズの第1作目が発売

「笑っていいとも」終了

新国立競技場「ザハ案」が白紙撤回

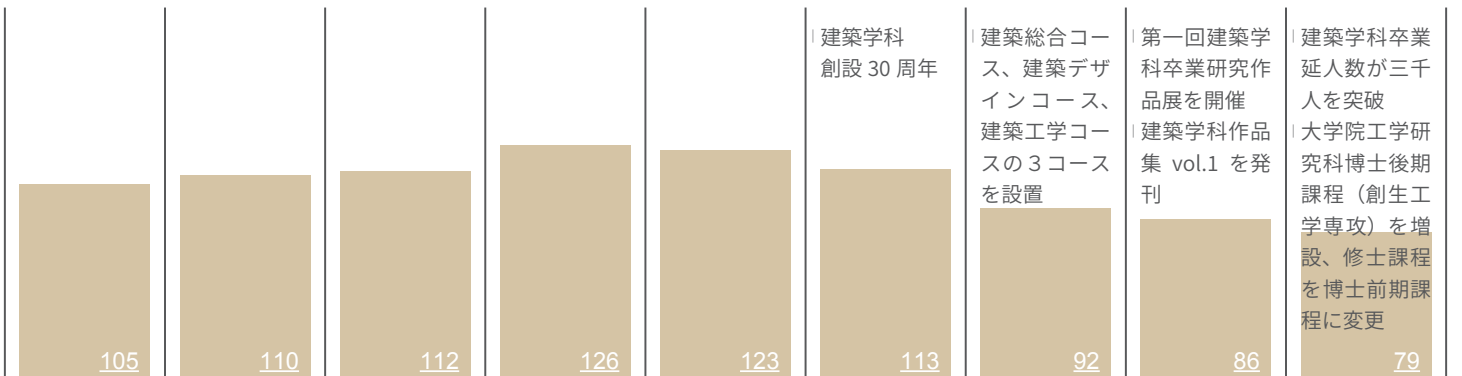
熊本地震
通信制高校「N高等学校」が開校

任天堂が「Nintendo Switch」を発売
トランプ大統領がバラ協定からのアメリカの離脱を発表



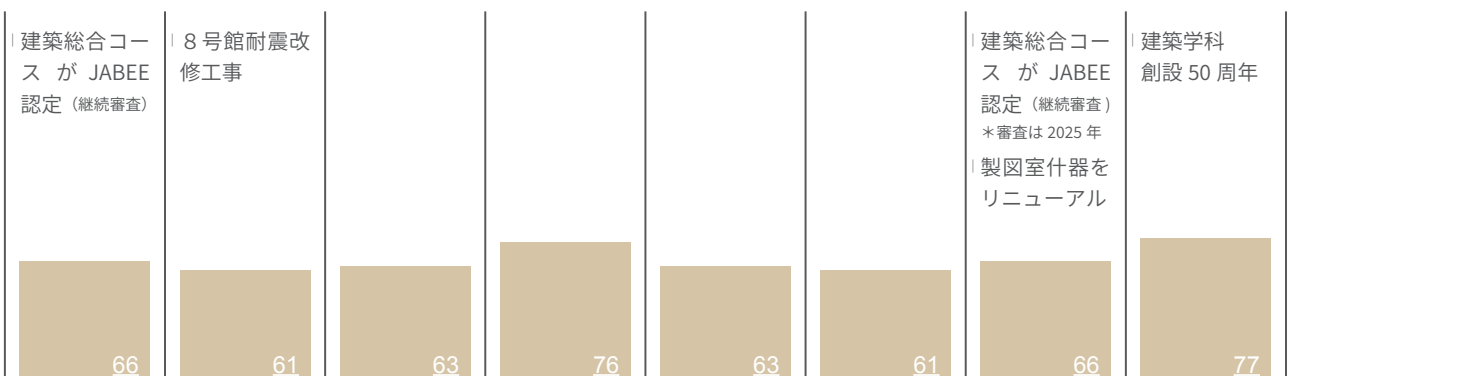
昭和 57 年 1982 | 昭和 58 年 1983 | 昭和 59 年 1984 | 昭和 60 年 1985 | 昭和 61 年 1986 | 昭和 62 年 1987 | 昭和 63 年 1988 | 平成元年 1989 | 平成 2 年 1990

ホテルニュージャパン火災 | 東京ディズニーランド開園 | Apple が「Macintosh」を発表 | ミノルタが AF一眼レフカメラ「α-7000」を発売 | チェルノブイリ原子力発電所事故 | 国鉄が分割民営化 | エニックスが「ドラゴンクエスト III」そして伝説へ...」を発売 | 任天堂が「ゲームボーイ」を発売 | 大学入試センター試験が開始



平成 12 年 2000 | 平成 13 年 2001 | 平成 14 年 2002 | 平成 15 年 2003 | 平成 16 年 2004 | 平成 17 年 2005 | 平成 18 年 2006 | 平成 19 年 2007 | 平成 20 年 2008

「Play Station2」が発売 | ユニバーサル・スタジオ・ジャパンが開園 | サッカーワールドカップ日韓大会開催 | 新型コロナウイルス流行 | 新潟県中越地震 | 「Youtube」がサービス開始 | 「Twitter」がサービス開始 | 初代「iPhone」が発売 | 「Play Station」が発売 | 「Facebook」がサービス開始 | 愛・地球博 | 第1回 WBC にて日本代表（侍ジャパン）が優勝 | 「ニンテンドー DS」、「Play Station Portable」が発売 | 北海道洞爺湖サミット | リーマンショック | 日本の総人口がピーク（1 億 2808 万人）



平成 30 年 2018 | 令和元年 2019 | 令和 2 年 2020 | 令和 3 年 2021 | 令和 4 年 2022 | 令和 5 年 2023 | 令和 6 年 2024 | 令和 7 年 2025 | 卒業生延人数 4599名

建築総合コースが JABEE 認定（継続審査） | 8 号館耐震改修工事 | COVID-19 大流行 | 大学入学共通テストが開始 | ジブリパーク開園 | 能登半島地震 | 建築総合コースが JABEE 認定（継続審査）*審査は 2025 年 | 建築学科創設 50 周年 | スーパー・ブルー・ブラッドマン観測 | ノートルダム寺院大規模火災 | ラグビーワールドカップ日本開催 | 大阪府北部地震 | 西日本豪雨 | 大阪・関西万博 | 日本初の女性の内閣総理大臣が誕生 | 一内訳
女性 511 名
男性 4088 名
理工学部 833 名
工学部 3776 名
(2026.3.31 時点)

卒業論文

- 1 植田 雄 司 大阪市中央区・船場地区におけるオフィスビルの公開空地の類型化と評価
- 2 坂本 彪 馬 住宅平面図にみる『和室』の有無・位置関係・床の間・室数・畳数の年代による変化 新建築雑誌（1986~2020）を通して
- 3 小林 立 宜 寝屋川市の低湿地帯における民家から見えてくる 地域景観の価値の再評価
- 4 森山 皓 晟 滋賀県の公共ホールにおける地域芸術文化への貢献の可能性について 中・小規模ホールの稼働率・催事・舞台形式の分析から
- 5 大木 琉 斗 風洞実験における低層建築物に作用する風圧について
- 6 伊神 信之介 加速度センサーを用いた飛来物の衝撃力測定
- 7 岡野 晃 佑 有風環境下における板ガラスの耐衝撃性能に関する研究
- 8 小村 優 太 実大強風雨発生装置による物体の飛散に関する研究
- 9 亀崎 尊 忠 戸建て住宅模型に作用する突風荷重に関する研究
- 10 田 口 結 建材の劣化を考慮した日本版改良藤田スケールの再検討
- 11 坪井 孝 樹 超高層中間層免震建物の高さ方向の免震層の最適配置に関する研究
- 12 出合 拓 翔 有風環境下における外壁材（サイディング）の耐衝撃性能に関する研究
- 13 中村 美 結 大阪府生野区における飲食店分布からみる多文化共生の実態
- 14 前川 光 丞 夏季の切妻屋根の付加による日射遮蔽と屋根裏の通風による室内への熱移動の低減に関する研究
- 15 浅井 章 汰 背部または腰部への局所冷気流が生理心理反応に与える影響に関する研究
- 16 川島 慶 伍 摂南大学寝屋川キャンパスにおけるくつろぎスペースの環境測定と利用実態の分析 その①照度基準と昼光率に基づく光環境の評価
- 17 堀 翔 大 摂南大学寝屋川キャンパスにおけるくつろぎスペースの環境測定と利用実態の分析 その②気積と利用人数からみた空気環境の評価
- 18 高見 哲 史 摂南大学寝屋川キャンパスにおけるくつろぎスペースの環境測定と利用実態の分析 その③騒音基準と利用人数からみた音環境の評価
- 19 富谷 隼 太 頸部への接触冷却が生理心理反応に与える影響に関する研究
- 20 豆井 陸 翔 背部への局所冷気流または局所等温気流が生理心理反応に及ぼす影響に関する研究
- 21 米満 海 玖 人 顕熱と潜熱の放熱量の違いが生理心理反応に及ぼす影響に関する研究
- 22 井口 皓 帆 生成 AI との協働による建築初期設計プロセスの提案 Stable Diffusion を用いたプロンプトの言語依存性と循環型ワークフローの検証
- 23 上野 真 心 2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）におけるメディアが発信する建築の立ち位置について
- 24 久木 龍 飛 和歌山県・龍神温泉の価値と保存に関する研究 歴史的建築物を核とした持続可能な保存体制の提案
- 25 堀田 夏 輝 都市機能誘導区域における施設数と人口の増減に関する研究 三重県津市を事例として

卒業設計

- 1 村尾 悠 月 子供の遊び空間を内包した路地再生の可能性 京都市上京区白銀町
- 2 竹川 大 洋 現代社会における生と死の共生 境界をほどく建築の試み
- 3 西口 千 尋 地域に寄り添う建築 道としての記憶と未来
- 4 宮 下 巧 あわいの建築 新しい市街地再開発の提案
- 5 岡 泰 平 疏水を紡ぐ 本の流れとともにたどる物語
- 6 小西 秋 仁 対流と滞留の広場 地域へつなぐ丹波橋駅前空間の再編計画
- 7 小林 大 輝 学びの消失を起点としたニュータウンの再生
- 8 土井 萌 愛 ひろわれた日常
- 9 中郷 陽 咲 でんしゃなき島のせんろみち
- 10 藤原 啓 義 空白の再編集 板宿商店街の市場跡の再編集
- 11 増木 俊 迪 遊びがつなぎ直すまち 若者と地域の再接続
- 12 石 川 翼 農地を“関係の装置”へ
- 13 福田 梨 咲 らくだと歩む
- 14 矢口 恵 斗 使われない時間のデザイン 雨が暮らす住宅群

-
- 26 岡田 将 弥 勉強に集中できる自習空間に関する研究
 - 27 岡部 太 夢 寝屋川市と大阪市生野区における銭湯の変遷と比較に関する研究
 - 28 岡本紗奈江 ゼミ室内におけるリラックス空間に関する研究
 - 29 小 山 葵 人の利用からみた超高層集合住宅の屋外空間に関する研究 大阪都心3区を対象として
 - 30 瀬戸虎太郎 郊外住宅地における高齢者が歩きたくなる歩行空間要件の抽出 川西市清和台を対象として
 - 31 棚橋 滉 太 市街化調整区域への編入による都市のコンパクト化の可能性と課題に関する研究
 - 32 岩村 省 吾 防災教育・避難訓練の課題抽出と考察について
 - 33 石原 稜 太 加古川市美乃利地区における水路の整理と水害用タイムラインに関する考察
 - 34 小谷 孔 明 災害発生時のペットのための備蓄に関する研究
 - 35 杉本 万 波 鴻ノ池運動公園(奈良市)を対象とした災害時計画案の作成と考察 全国の防災公園への展開
 - 36 竹中 幹 人 大規模災害を想定した病院の立地特性指標の提案 奈良県内75病院を対象として
 - 37 松本 美 空 災害時における拠点建物の安全確認手法に関する研究
 - 38 宮崎 咲 良 倒壊家屋から救出された輪島塗を引き継ぐ方法に関する考察 壊れた輪島塗を用いた企画を通じて
 - 39 山口 諒 也 京都府内26市町村のハザードマップの比較と考察
 - 40 宮坂 建 希 壁板の目地が耐力に与える影響に関する実験的研究 その1目地の深さを変数とした場合
 - 41 柴田 悠 吏 壁板の目地が耐力に与える影響に関する実験的研究 その2目地の幅を変数とした場合
 - 42 雨面 莉 玖 スリット入り鉄板を設置した架構のエネルギー吸収性能に関する実験的研究 その1スリットの高さを変数とした場合
 - 43 城内 雅 善 スリット入り鉄板を設置した架構のエネルギー吸収性能に関する実験的研究 その2スリット間隔を変数とした場合
 - 44 小笠原 健 人 シアスパン比が0.5のRC短スパン梁のせん断耐力に関する実験的研究 その1梁幅を変数とした場合
 - 45 橋野 心 シアスパン比が0.5のRC短スパン梁のせん断耐力に関する実験的研究 その2せん断補強筋比を変数とした場合
 - 46 兵頭 陸 哉 ハーフPCa床板を用いた床スラブの耐力および変形性能に関する実験的研究 その1打ち継ぎ面にコッターを用いた場合
 - 47 久木山 堅 斗 ハーフPCa床板を用いた床スラブの耐力および変形性能に関する実験的研究 その2打継部をほうき目仕上げとした場合
 - 48 岡田 七 星 フラットプレートのパンチング耐力に関する実験的研究 その1スラブ筋量を変化させた場合
 - 49 清水 暁 翔 フラットプレートのパンチング耐力に関する実験的研究 その2スラブ厚さを変化させた場合

-
- 15 高田 蒼 士 地域に根ざしたまちづくり
 - 16 大西 和 尚 奈良・きたまち広場
 - 17 田川 泰 地 斜面に寄り添うランドフォーム建築 ワインと自然が交わる場の提案
 - 17 西 村 凜 未来に広がる繋がる
 - 19 山下 真 緒 地上と地下を繋ぐ都市空間の創出
 - 20 荒木 汀 紗 流れの中で、休む 土佐堀・中之島における短時間滞在空間の提案
 - 21 國澤 晃 一 緑のつながり 桂離宮から読み替える現代のまち
 - 22 児玉 武 士 かける 建築から考えるギャンブルの在り方
 - 23 佐藤 帆 純 連続する帯 境界をゆるめる高架下の居場所
 - 24 田原 成 一 郎 日常の中のスタンド 寝屋川一番街に開かれたスタジアムによる寝屋川の再構築
 - 25 樽井 智 哉 欲動ヲ獲得セヨ。
 - 26 福 井 希 影という余白 都市に生まれる名もなき居場所
 - 27 松浦 栞 奈 共助と共生 暮らしの可視化と窓の共有化
 - 28 吉村 尚 生 まちとり物語 重要伝統的建造物群保存地区に溢れ出す「ぼく・わたしのひみつち」

■2025年度 設計演習 課題一覧

1年生(前期) 建築基礎演習 A	第1課題: 「中心のある家」のトレース 第2課題: 「中心のある家」の模型 第3課題: 阿部勤「中心のある家」のトレース図、模型を活用したプレゼンテーション [大学構内に設けられる外部展示空間(パビリオン)]
1年生(後期) 建築基礎演習 B	第1課題: キャンパス内のレストスペース 第2課題: 「蔵のある暮らし」をデザインする 狭小敷地に蔵とともに棲む
2年生(前期) 建築設計製図 A	第1課題: 中之島公園を臨むワークプレイス 第2課題: SU Visitor Center ~通り抜けできるキャンパス~
2年生(後期) 建築設計製図 B	第1課題: ピロティとテラスのあるコミュニティ・ライブラリー 第2課題: まちの美術館: 吹き抜けのある市民のためのアートパーク
3年生(前期) 建築設計演習 A	課題: 学校の再構築 前半課題: グループ課題 後半課題: 個人課題 小学校の設計
3年生(後期) 建築設計演習 B	課題: 『世界を編み直す建築』~境界からひろく可能性~ 小野スタジオ: 「建築のもつシンボル性について」 西倉スタジオ: 「何かを動員するカタチ」 武田スタジオ: 「景観」 西井スタジオ: 「掛ける・兼ねる・変える」 白須スタジオ: 「隣接性」
4年生(通年) 卒業設計	

■2025年度 摂南大学 建築学科スタッフ

専任		設計演習担当非常勤講師		
教授	池内 淳子 伊熊 昌治 (建築基礎演習 A・B) 大谷 由紀子 (建築基礎演習 B 建築設計製図 A) 奥田 泰雄 * 加嶋 章博 (建築設計製図 B) 宮本 征一 柳沢 学	池田 久司 (建築基礎演習 A) 斉藤 智士 (建築基礎演習 A) 佐藤 伸也 (建築基礎演習 A) 村上 芙美子 (建築基礎演習 A) 川口 裕人 (建築基礎演習 A) 駒井 陽次 (建築基礎演習 B) 高木 章寛 (建築基礎演習 B) 信藤 勇一 (建築基礎演習 B) 南野 優子 (建築基礎演習 B) 山根 健太郎 (建築基礎演習 B) 小田 真平 (建築基礎演習 B) 濱田 猛 (建築基礎演習 B) 出江 潤 (建築設計製図 A) 京 智健 (建築設計製図 A) 堀 賢太 (建築設計製図 A) 戸田 智 (建築設計製図 A) 古川 晋也 (建築設計製図 A) 好川 拓 (建築設計製図 A,B) 守行 忠勝 (建築設計製図 A) 貴 泰正 (建築設計製図 B) 岸下 真理 (建築設計製図 B) 藤田 慶 (建築設計製図 B) 門間 香奈子 (建築設計製図 B) 井戸 健治 (建築設計製図 B) 富田 祐一 (建築設計製図 B) 水上 和哉 (建築設計演習 A) 矢田 朝士 (建築設計演習 A) 山口 尚之 (建築設計演習 A) 北條 豊和 (建築設計演習 A) 小野 龍人 (建築設計演習 B) 武田 憲人 (建築設計演習 B) 西井 洋介 (建築設計演習 B) 西倉 美祝 (建築設計演習 B)		
准教授	* 小林 健治 (建築設計製図 B 建築設計演習 A)			
講師	白須 寛規 (建築基礎演習 A 建築設計演習 B)			
建築学科共通準備室	中尾 千紗子 伊藤 朋子 重原 都美子 長崎 麻子 * 真木 美穂子			

* 作品集編集担当

2025年度 摂南大学 理工学部 建築学科 作品集 Design Works '25/'26

2026年3月24日 発行

発行 摂南大学理工学部建築学科 〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町17-8

印刷 大和写真工業株式会社

D e s i g n W o r k s ' 2 5 / ' 2 6

D e p a r t m e n t o f A r c h i t e c t u r e
S E T S U N A N U N I V E R S I T Y

2 E L 2 N N V N N N I A E B 2 I L A
D e b s r t w e u t o t v r c p i t e c t n t e

D e s i g n M o d e l s , 3 2 \ , 3 0